

23-256

矢津昌永  
角田政治  
小平高明  
合著

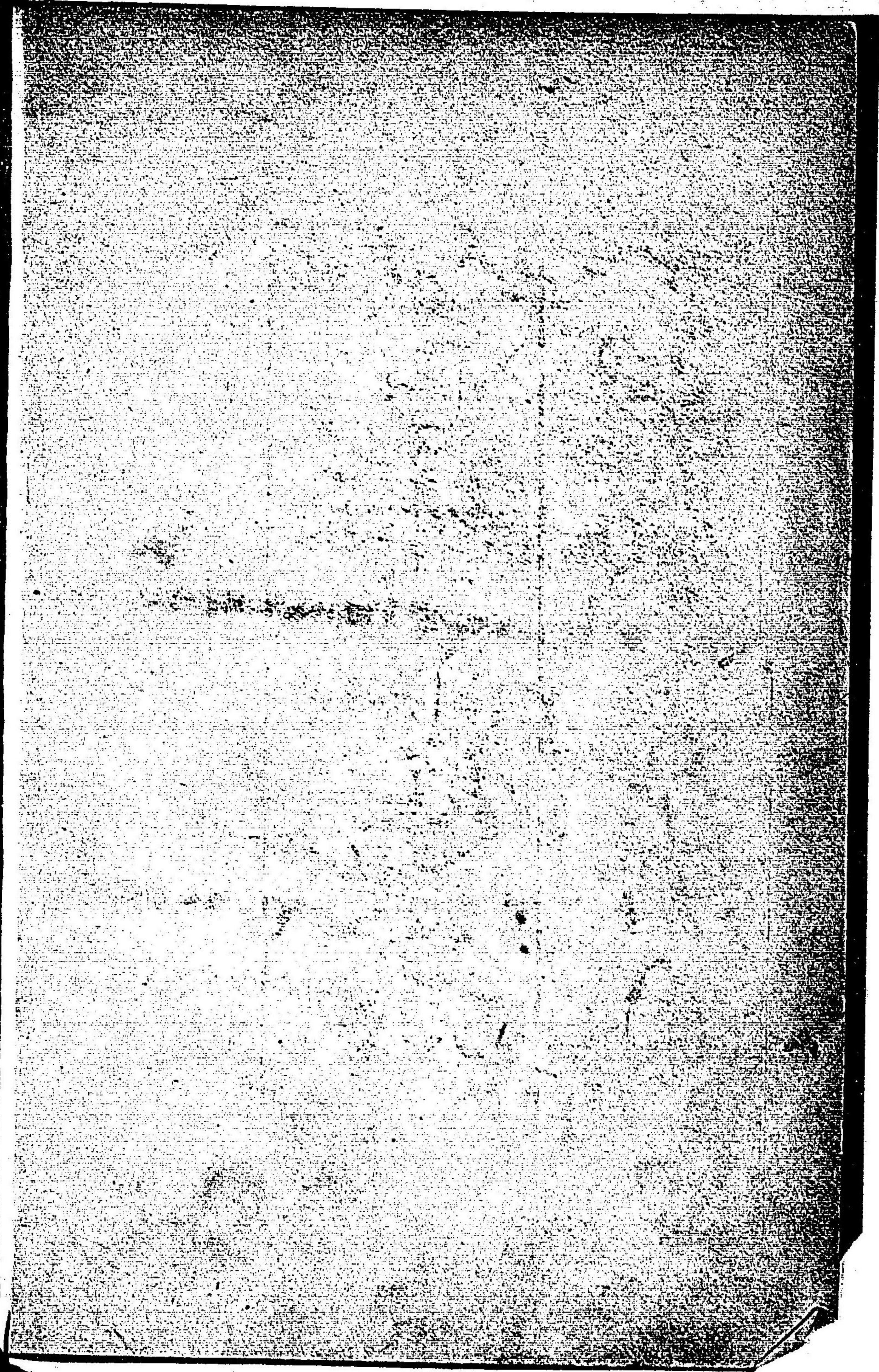
# 大日本地理集成全

東京 隆文館發兌

明治  
38 n 15  
内交



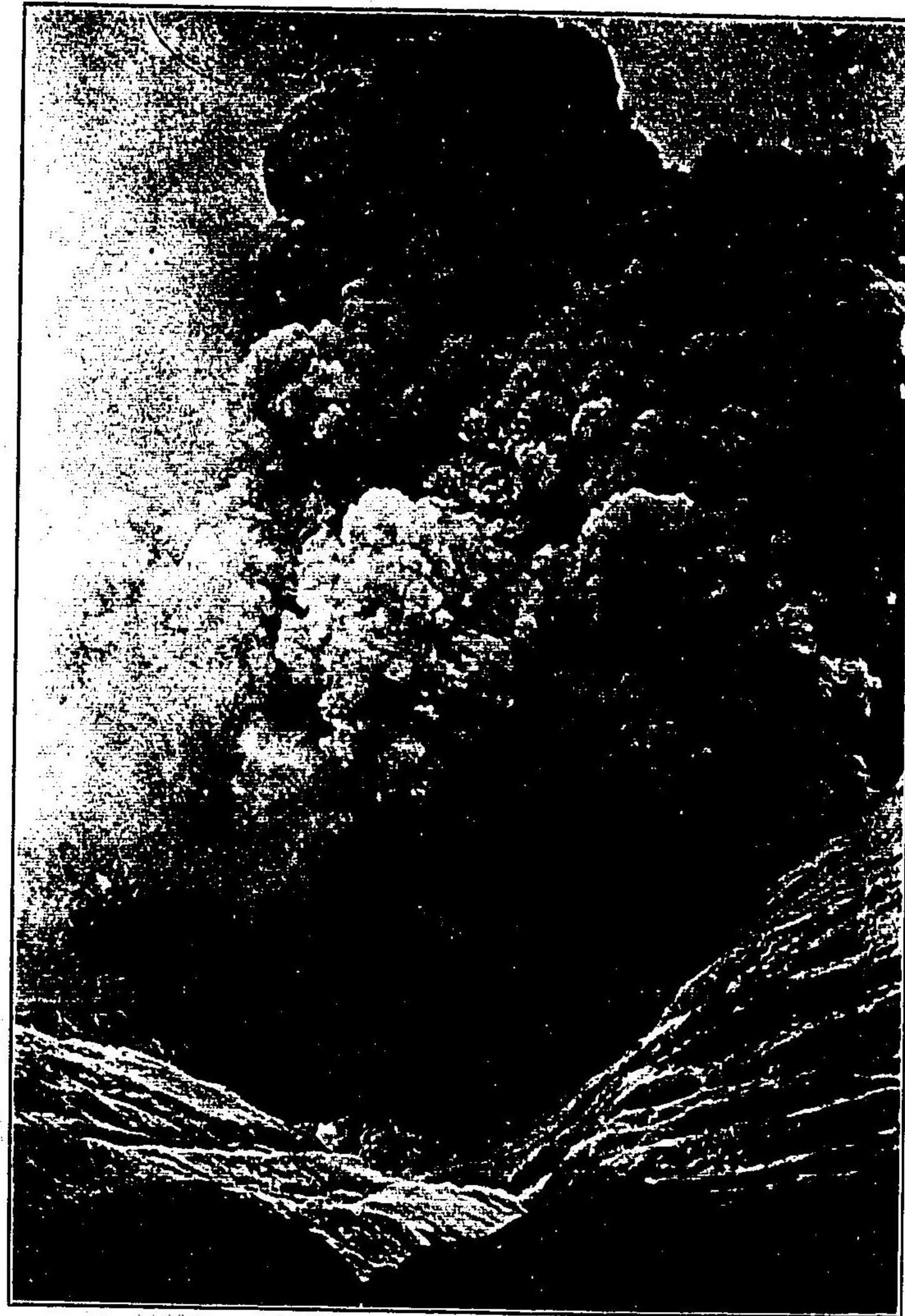
む望々丘口火岳崎び及宮離り上湖の遠根箱



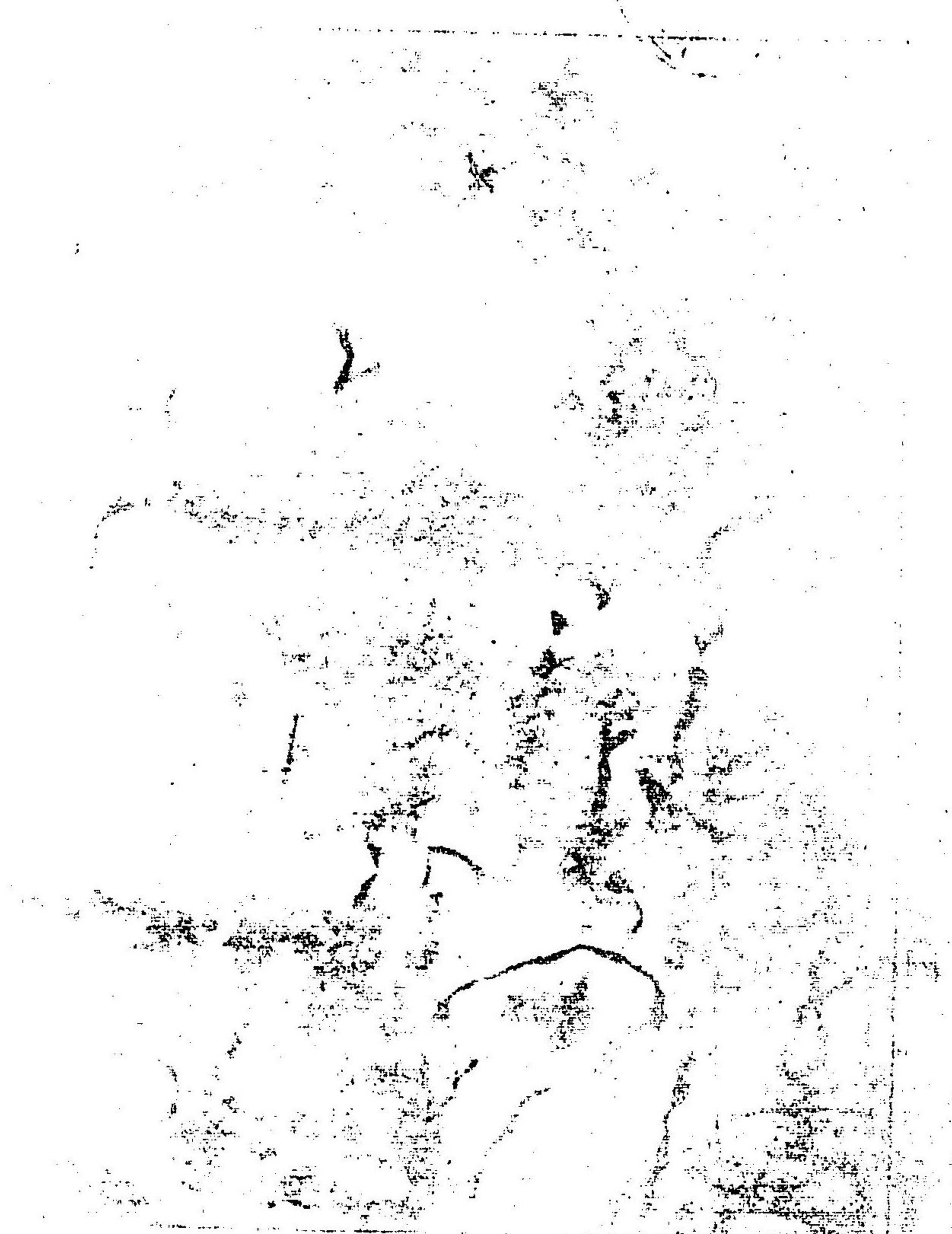


(意注船「オーカ」るす有な木胸)

りよ(港・口 火)港見二の島原笠小  
む望を山廻るたけ根を旗頭に利最



阿蘇火山 中岳噴火口





川 岸 石

# 大日本地誌集成序

戰勝國の榮を荷へる日本帝國の國粹果して如何、是れ外人の頻りに知らんことを務むる所なり。故に地理に歴史に將た美術に苟も我が國の事情を知るに資す。其の然るに顧みて本邦人の自國を知るの程度果して如何を回想すれば亦赧然たらざるを得ず。特に自國地理上の智識の如き更に索然たるものあるを覺ゆ。是れ種々の原因あるべしと雖ども從來繁簡その中庸を得たる適當の書籍なかりしも確に其の一大原因たらずんばあらず。本書は實に其の要望の見地より筆を

起せるものにして先づ國民の指導者たるべき教育家  
諸君の参考書たるを以て自ら任ぜり、次に地理研究  
篤志家諸君の中庸の研究書たるを以て自ら任ぜり、  
次に自國の聲價を公平に知らんと欲する經世家諸君  
の座右の伴侶たるを以て自ら任ぜり、  
其れ此の如く本書は既に教育家の参考書たり、地理  
研究家中庸の研究書たり、人經世家座右の伴侶たるを  
以て自ら任ぜるを以て敢て筆を數千萬言を費じて浩瀚  
大冊を競ふにあらず、亦徒に單簡を主として愛を割き  
紙數の輕減を務めじにもあらず、要は専ら中庸を旨  
とし公平を執り、以て適當に我が日本帝國の真相を

讀者の眼前に描き出して之を紹介せんことを務めた  
るのみ、今著者等用意の要項を左に開陳せんとなす  
一、凡そ地理學は土地と人生との間には自ら親密な  
る關係ありて或は因となり或は果となるの理法を  
求むる理學なるを以て本書は單に記載的に流るゝ  
の通弊を避けたり、都邑の如き其の建設せられ又  
其の發達せる自然的要因より説き起して將來の運  
命をも類推せんことを勉めたり。

一、地理教授は其の往々にして陥り易き無味乾燥  
の弊より救ひ之を以て趣味津々豐富盡きざるの用  
意なかるべからず、本書は最も茲に留意し、

一、各地方誌の終りには必ず研究の方法を指示せり。是れ當に研究家の指針たるのみならず、本書を参考して教授せんとする人の教授上の指針たらしめんが爲めなり。

二、材料の精撰拾捨には頗る心を籠めたり。將來我が國民の最も力を盡すべき産業の如きは務めて其の状況を詳述し特に歴史的由緒をも説明したり。又小都邑等の今後の發達に關係薄きものゝ如きは之を省略し而して將來有望の運命を有する都邑の如きは筆紙を吝まず説明を試みたり。

明治三十九年第一回海戰大捷紀念日  
 矢津昌 永識

# 大日本地理集成目次

## 第一編 自然地誌

第一章	地球	一
第二章	位置	三
第三章	地體構造	四
第四章	地殼の發育	六
第五章	山系	一〇
第六章	水系	一〇
第七章	平野	一四
第八章	海岸	一六
第九章	溫度	一五
第十章	天産物	一五



目次  
第二編 人文地誌

第一章 住民.....五

第二章 教育.....五

第三章 宗教.....六

第四章 政治.....六

第五章 財政.....六

第六章 軍備.....六

第七章 外交.....六

第八章 生業産物.....六

第九章 農業.....六

第十章 林業.....六

第十一章 漁業.....六

第十二章 礦業.....六

第五節 工業.....三五

第六節 商業.....三五

第九章 交通.....二四

第一節 鐵道.....二四

第二節 馬車電氣鐵道.....二四

第三節 海運.....二五

第四節 日本縱貫旅程.....二五

第五節 通信.....二六

第三編 處誌

第三章 關東地方.....一四

總說.....一四

東京府.....一六

神奈川縣.....一八

千葉縣.....一九

埼玉縣……………一六

群馬縣……………二〇

栃木縣……………二六

茨城縣……………三二

第三章 奥羽地方……………三〇

總說……………三〇

福島縣……………三二

宮城縣……………三三

岩手縣……………三五

青森縣……………三六

秋田縣……………三八

山形縣……………四〇

第三章 本州中部地方……………四二

總說……………四二

第六章

四愛知縣

靜岡縣……………四八

山梨縣……………五〇

愛知縣……………五二

岐阜縣……………五四

長野縣……………五六

新潟縣……………五八

富山縣……………六〇

石川縣……………六二

福井縣……………六四

第四章 近畿地方……………六六

總說……………六六

滋賀縣……………六八

京都府……………七〇

奈良縣……………七二

第三章 三重縣……………五三

和歌山縣……………五三

大阪府……………五三

兵庫縣……………五三

第五章 中國地方……………五三

總說……………五三

岡山縣……………五三

廣島縣……………五三

山口縣……………五三

鳥取縣……………五三

島根縣……………五三

第六章 四國地方……………五三

總說……………五三

德島縣……………五三

香川縣……………四九

愛媛縣……………五〇

高知縣……………五二

第七章 九州地方……………五〇

總說……………五〇

福岡縣……………五二

大分縣……………五二

佐賀縣……………五二

長崎縣……………五二

熊本縣……………五二

宮崎縣……………五二

鹿兒島縣……………五二

沖繩縣……………五二

第八章 北海道……………六〇

目次

頁

第一章 北極地 ..... 六

第二章 臺灣 ..... 六

第三章 樺太 ..... 六

第四章 關東州租借地 ..... 六

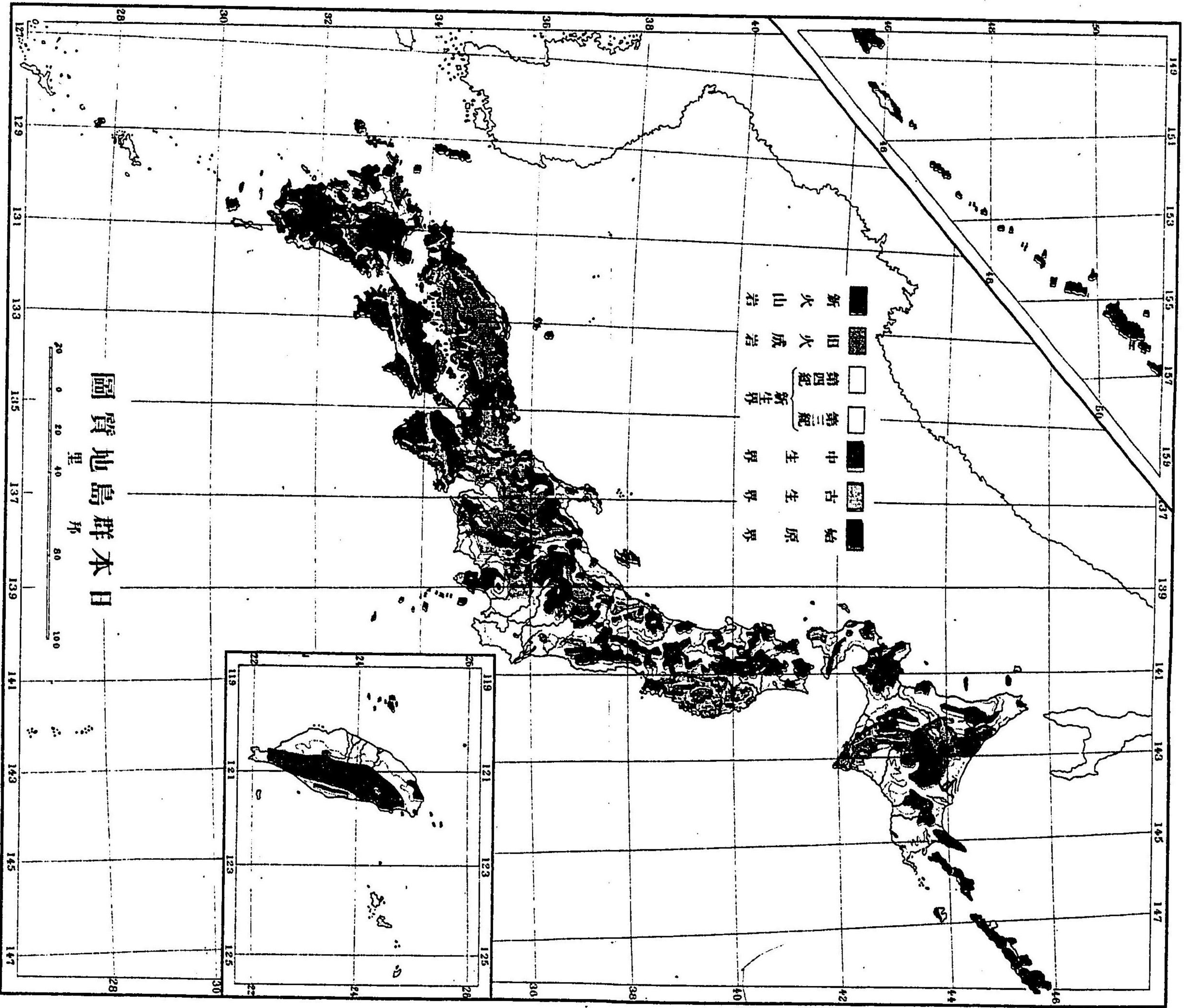
第五篇 將來の我國民 ..... 六

附表

第六篇 我國領土 ..... 六

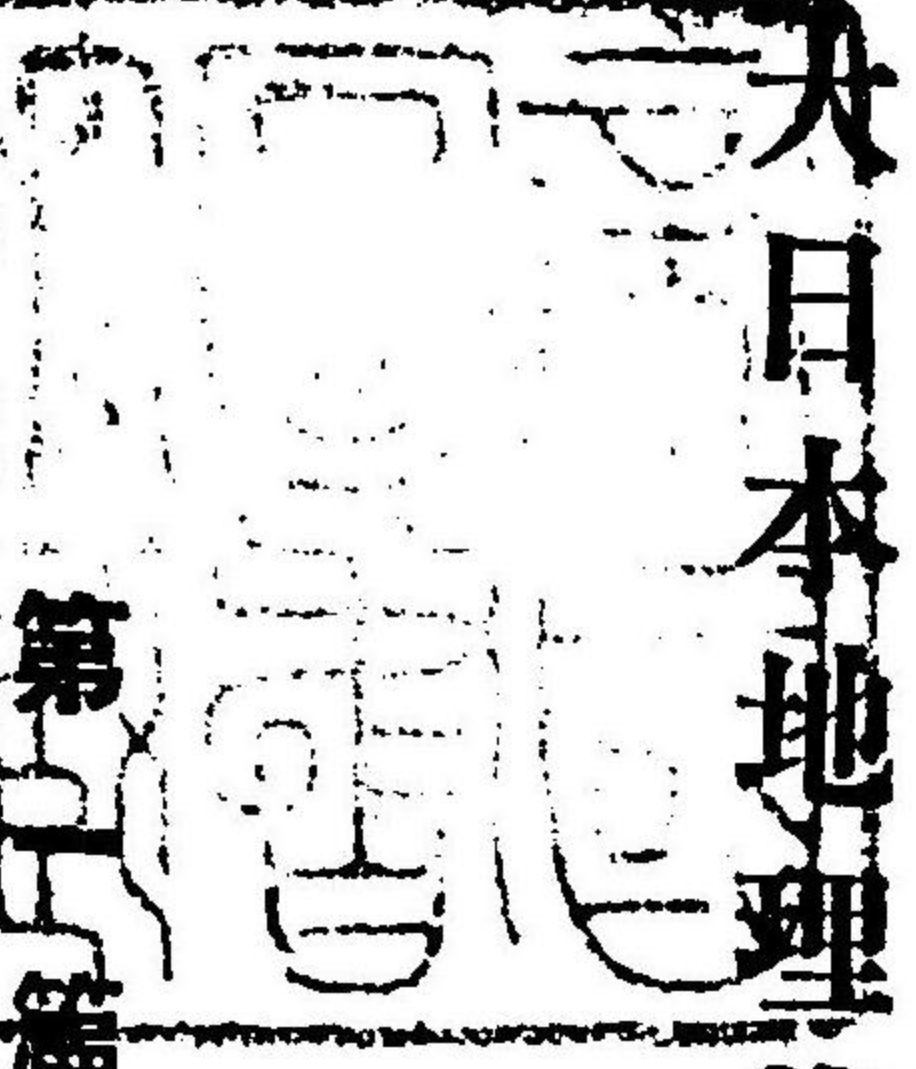
第七篇 我國領土 ..... 六

大日本地理集成目次終



日本群島地質圖

# 大日本地理集成



第三編

自然地誌

第一章 地球

地球

火雲説

我地球は、もと太陽系統の諸天體と共に、火雲(Nebula)と稱する非常に高熱の瓦斯體にして、頗る遠く擴がり、現今最遠の、遊星の軌道の外まで、達せりと云ふ。されど漸次熱を失ひて、冷却凝縮するに従ひ、一部分は液體となり、絶えず旋轉運動せし結果、軌道の平面に數多の圈を生じ、是等圈は種々の點に於て分離して、別々に固結して遊星となれり、而して各遊星は、その軸の周圍を廻轉すると共に、火雲の中心たりし太陽の周圍を廻轉す、今日土星の周圍に見ゆる圈は、火雲の遺物なりとす。如上の憶説はカント、ラプラスの唱道せしものにして、現今は理學的證明の結果、定説として何人も疑ふものなし。この説の根據とすべし事實七あり。

第三編 自然地誌

- 一、太陽及び、諸遊星を組成する物質は同一元素なり。  
隕石は、他天體の破片の地球上に墜落せるもの、これを分析するに鐵、ニッケル、マグネシウム、カルシウム、ソヂウム、ポッタシウム、炭素、硅素、燐、硫黄、酸素、窒素、水素等一として地球上にあらぬはなし。  
三稜玻璃により日光を分析して、スペクトラムを得、その色彩、並に黒線を、地球上の元素のスペクトラムと比較するに全く同様なり。
- 二、太陽系統に屬する諸遊星は、總て球に近き形を有す。
- 三、諸遊星は皆、自轉と公轉とをなし、凡て同方向に回轉す。
- 四、諸遊星の軌道は、殆んど同一平面にありて、太陽の赤道の平面と一致す。
- 五、太陽は極めて高熱の瓦斯よりなり、其容積大なるを以て冷却すること遅し、月はその形小なるを以て冷寒なる塊となり、其中間なる地球は、表面固形體なれど、内部は高熱にして今も熔融の狀態をなす。

六、太陽即、太陽系の中心より遠かるに従ひ、遊星の密度小にして扁平の度大なり。

太陽	直徑の比	一〇九、三〇〇	密度	〇、二五
水星		〇、三八		一、一二

金星	〇、九四	一、〇三
地球	一、〇〇	一、〇〇
火星	〇、六三	〇、七〇
木星	一、一六	〇、二四
土星	九、四九	〇、一三
天王星	三、九〇	〇、一九
海王星	四、六二	〇、一六

是、重力の法則によりて、かゝる結果を呈せるなるべし、地球は月の比重に倍し、地球自體につきて考ふるも、地殻の比重は、概して三以下なるも、地球内部より噴出する玄武岩、三、四のものあり、且地球全體の比重五、六なれば、内部の比重大なるを知る、諸遊星皆、その内部に比重大なるものを沈む、太陽系統につきて云ふも、その排列この理に従ふは前表によりて知るべし、これも同一體なりし證據なり。

七、諸遊星中のあるものは猶、環を存す、土星の如きこれなり。

地球の形

地球の形

地球の球形をなすことは、種々の例證によりて説明するを得べし。

- 一、海岸に立ちて入港する船舶を望むときは、最初にその橋頭を認め、漸次にその船體を見るを得、若し海岸の山頂等に立ちて望むときは、遠きものも、なほ船體を認め、更に遠くして海岸よりは望み得べからざるものも、橋頭を認むるを得。
- 二、洋海若しくは、平原にて地平線は、常に圓周を畫き、觀察點を高むるに従ひ、その圓周の圍ひ面積従つて増大す。
- 三、世界周航者が、常に一方に航路をとるときは、反對の側より再び、その出發點に歸着するを得。
- 四、月蝕のとき、月面上に投ずる地球の影が圓形なること。
- 五、太陽若しくは月は、同時は地球の全面を照らさざること。
- 六、太陽、月その他、諸天體の出没は、同時ならずして地球上位置の東西により遲速あること。
- 七、恒星の高度は、地球表面上、位置の南北に従つて大小あり、即ち南方に進むときは、北方の地平に近き星は地平の下に隠れ、南方の地平上に新に星出で、北方に進むときは之に反す。
- 八、遠距離を隔て、水面上等しき高さを有する、三本の杭を立て望遠鏡を以て、一方より望むに、一直線をなさずして兩端の二つを連ぬる視線の上に、中央のものは突出すること。

地球直徑  
約長徑三千  
八百八十八  
里短徑三千  
百七十八  
里

地球の運動

一、自轉に要する時間  
約三十三時  
六分五十四  
秒  
二、公轉に要する時間  
約三百六十五  
日八時四十分  
八分  
三、地球の公轉速度  
約一億八千  
萬里  
四、地球の自轉速度  
約一萬七千  
八百里

地球の形は球形をなすこと、以上述ぶるが如くなれど、眞球形をなさずして、橙實狀をなし、扁平楕圓體なり、これ地球が、その回轉より生ずる遠心力の爲めに、中央の部分に膨大したるによる、その長短兩軸に於ける半徑の長さは、六三七七、三九七軒に對する、六三五六、〇七九軒にして、その扁平の度（兩軸の差を長軸にて除せるもの）は、約三分の一なり、されば直徑六尺に對し、僅かに二分の差なるが故に、殆んど球形に近きものなり、地球の形と、その表面の有様とを、小なる模型に作りたるを地球儀と云ふ、上の方を北とし、下の方を南とす、地球表面の有様を平面に示せるものを地圖と云ひ、上を北とし下を南とす、地球全體を一目に示すは地球儀の方が、便にして、その一部分を細かに示すは地圖の方が利あり。

### 地球の運動

我等、若し汽車に乗りて旅行するときは、己の進むを覺えずして却て、山河草木の後進するが如く感ずるなるべし、之と同じく我地球は、全く静止して、太陽の東より西に運動する如く見ゆるも、その實地球は二種の運動をなすなり、則ち一は地球、自その地軸の周圍を西より東に、二十四時間にて一回轉をなす、之を自轉と云ひ、一自轉に要する時間を一日と呼ぶ。地球は自轉しながら、更に三百六十五日四分の一を以て、太陽の周圍を一回轉す、之を公轉といふ、一公轉に要





地名	北緯	東經
鹿島	35°00'	139°36'
宮崎	31°50'	131°00'
三浦	35°00'	140°00'
佐賀	33°00'	130°00'
山口	33°00'	131°00'
大分	33°00'	131°00'
福岡	33°00'	130°00'
下関	33°00'	131°00'
岡山	34°00'	133°00'
宮崎	31°50'	131°00'
濱田	35°00'	140°00'
松山	35°00'	137°00'
神戶	34°00'	135°00'
京都	35°00'	136°00'
和歌山	34°00'	135°00'
津	35°00'	139°00'
名古屋	36°00'	137°00'
岐阜	36°00'	138°00'
武蔵野	35°00'	139°00'
金澤	36°00'	138°00'
地名	北緯	東經
那覇	25°00'	127°00'
鹿島	35°00'	139°36'
熊野	33°00'	135°00'
佐賀	33°00'	130°00'
長崎	32°00'	129°00'
福岡	33°00'	130°00'
門司	33°00'	130°00'
唐津	33°00'	130°00'
廣島	34°00'	132°00'
境	34°00'	132°00'
西郷	34°00'	132°00'
高知	34°00'	132°00'
徳島	34°00'	134°00'
大津	35°00'	136°00'
宮崎	31°50'	131°00'
敦賀	35°00'	137°00'
伏見	35°00'	136°00'
七尾	36°00'	138°00'
四日市	36°00'	138°00'
清見	36°00'	138°00'
彦根	36°00'	138°00'
長野	36°00'	138°00'

經緯度の測定

經緯度の測定

地名	北緯	東經
甲府	35°00'	138°00'
東京	35°00'	139°00'
前橋	36°00'	139°00'
福島	36°00'	140°00'
山形	37°00'	140°00'
札幌	43°00'	142°00'
地名	北緯	東經
新潟	36°00'	138°00'
横濱	35°00'	139°00'
水戸	36°00'	139°00'
宇都宮	36°00'	139°00'
秋田	39°00'	140°00'
青森	40°00'	140°00'
函館	41°00'	141°00'
小樽	42°00'	141°00'

我中央東經度  
百廿五度  
四部標準  
時部標準  
と地球中  
先島諸島  
に用ふ  
十度

地球は二十四時間に、その地軸の周囲を一回轉する故、經度十五度を隔つる地毎に、正午に一時間づつの相違を來すべき筈なり、正午とは、己が立てる地を通ずる經線上を太陽の通過する時を云ふ、されば、グリニチの正午と、今知らんとする地の正午とを比較して、直に經度を定むるを得べし。

緯度を定めんには、地平線上、北極星の高度を測るを以て可とす。これ、北極星は、北極の頂上にありて赤道にては、地平線に望むを得べく、北するに従ひ、漸次その高度を増すものなれば、高度を測定して緯度を定むるを得るなり。

## 氣候

氣候

地球表面の氣候は、種々の事情により寒暖頗る趣を異にす、今その事情の主なるものを擧ぐべし。  
一、緯度の高低 低緯度の地は、日光の直射を受けるを以て温度高く、高緯度の地は、日光斜射するを以て温度低し、赤道附近の熱くして南北に去るに従ひ、温度を減するは、これが爲なり。

二、土地の高低 太陽熱の気温に及ぼすは、直射熱によるにわらずして、一旦地面に直射せるものが反射して空気を温むるものなれば、反射面少なき高山の頂上は温度低く、反射面の大なる平地は温度高し。

三、水陸の位置 陸地は、太陽の温熱を受くるも早く、又放散するも早けれど、水は吸収、放散共に遅し、されば内陸の氣候は寒暑共に烈しく、海岸の氣候は、寒暑共に中和なり。

四、海流の影響 暖流に洗はる、海岸は、その温度自、高く、寒流の洗ふ海岸は、気温を奪ひて温度低し、我北海道の東岸と西岸との気温に大差あるは、之が爲なり。

五、山脉の方向 北半球に於ては、南方に山脉を帯ぶるときは自、日光を遮る場合多く、従つて南方より來る暖風を妨げ。北風を吹きすさまじむるもの故、温度従つて低く、北方に山脉を

帯ぶる地は之に反す、南半球に於ては、山脉の位置と気温との關係、正に北半球に反對なり、概して高山大山脉に近接せし地は、所謂風多く、気温低きを例とす。

六、常風の方向 北半球に於ては、南風を多く受くる地方は温度高く、北風の多き地方は温度低し、南半球は之に反す。

七、地質の相違 地質の乾燥、濕潤、沃瘠の相違、及びその土性地盤の岩石なると、砂礫或は土壤なるとにより、気温に相違を生ず。

八、森林の有無 森林ある地は、風霜を妨げ、寒暑の激變を防げ、草原砂漠は寒暑共に激し、気温を變化する事情、かくの如く多くして、各地の氣候、區々一定し難しと雖も、概して赤道の南北二十三度半に至る間、即ち兩回歸線間の地域は、日光頭上を直射するを以て温熱甚しければ之を熱帯と稱し、兩極より二十三度半の地域は、日光の斜射頗る甚しく、或は一月中全く日を見ざることさへあり、極地に至りては半年全く夜なれば、温度最も低し、之を寒帯と云ふ、熱帯より寒帯に至る間は、温帯にして、寒暑は中を得て、人の勞働に適し、熱帯地方の如く、住民の惰弱安逸を來さず、寒帯の如く、退嬰に陥らしめず、以て文明發達の地たるに適す、現今世界の文明國は多くこの中にあり我國は、臺灣島の南端北緯二十一度四十八分より、千島アライト島の北端五十度五十六分に亘れば、臺灣の南部、わづかに熱帯に

入れど、その他は全く温帯に属す真に天與の好地位なり。

### 第二章 位置

位置 我が國は亞細亞洲の絶東なる、北太平洋中に羅列する群島にして、東北より斜に西南に延びたり、其極南は臺灣島の南岬、(北緯二十一度四十八分)にして、既に熱帯に入り、北端は千島のアライ島(北緯五十度五十六分)なり、極西は澎湖島北嶼の西端、(東經百十九度二十分)より、極東は千島の占守島(東經百五十六度三十二分)に至る、故に南僅に熱帯に入る外總べて北温帯内にあり、其中央緯度は三十六度二十分(水戸、高崎、上田、金澤)にして、朝鮮南部、黄河流域、波斯の北端、小亞細亞の南端、希臘の南端、シブラルタル海峡、北米合衆國の中央と、其緯度を同よす。

環境 我國は北は千島群島によりて、堪察加半島に接し、東は沙洋たる太平洋に臨み、北亞米利加と遙に相對し、東南は南島(Marcus)硫黄島よりウエーク島(Wake)(合衆國太平洋海底電線の仲繼所)マリアナ諸島、(ドイツ領)に連る、南西は臺灣よりパシー(Pashe)海峡を隔て、アメリカ合衆國のフィッピン諸島に對し、西は臺灣海峡を隔て、支那に隣り、朝鮮海峡を隔て、朝鮮に接し、日本海を隔て、シベリアに對せり、島嶼恰も亞細亞東岸に連珠を掛けたるが如く、凡

全長一千三百里の間に斷續し、オコック海、日本海、黄海及び東海を扼せり、故にシベリア、朝鮮及び支那北部より東方に到らんには必ず我が領海を通過せざる可らず、又世界最多の人口を有する支那大國を西にし、富限窮りなき北米大陸を東に控へ、南は遙に南洋諸島の珍品異産を收むべく、西北はシベリア鐵道によりて陸路歐洲に通すべし、故に我が國は兵要上、商業上、工業上、交通上、實に樞要の位置にあり。

廣袤 我が國の面積は二萬七千〇六十二方里、(陸軍省の調査二萬七千二百六十九方里)あり、五大島及び約四千の島嶼より成る、中央の最大島は本州(本土)にして次ぎの大島は北に在りて十州島(北海道)と謂ひ、九州は本州の西南に位し、又本州と九州間の大島を四國とす、臺灣島は遙か南に在りて、其の大き九州に次ぐ、その他重なる島嶼を擧ぐれば、千島、琉球、佐渡、淡路、對馬、隱岐、壹岐、等なり、此の各島の面積及び大小の比例を示せば左の如し。

土地	面積	百分比	土地	面積	百分比
本州	二四、五七、一三	九〇、二	佐渡	一、〇〇、〇〇	三、七
九州	二、六七、七五	九、九	澎湖島	一、〇〇、〇〇	三、七
四國	一、〇〇、〇〇	三、七	隱岐	一、〇〇、〇〇	三、七
琉球	一、〇〇、〇〇	三、七	小笠原島	一、〇〇、〇〇	三、七
對馬	一、〇〇、〇〇	三、七			
總計	二七、〇六、二四六				

廣袤約十六萬方哩



表面

裏面

中央線

る地方は地層整然として排列し、新古の水成岩層紀律正しく、相並び、又噴出岩に乏し、之を外  
面又は表面と爲す。

日本海に臨める北西面の地體は、地層錯雜して火山の噴出多し、之を内面又は裏面とす、而して、  
この表裏面の分界縫合に當れる縦斷線は、中央線と呼び、火山の多くは、この線に沿つて进出す、  
中央線以南の地を表日本といひ、以北の地を裏日本と稱す。

### 第四章 地殼の發育

地球はもと火熱の一球たりしもの、漸次冷却して今日の地殼を生じたりしなり。而して地殼は冷  
却するに従ひ、漸くその厚さを増し既往の岩石は風雨の爲に震爛崩壊して流水の力により水中に  
沈澱し水の下壓を受けて水成岩を構成するに至る。水成岩は或は褶曲し或は斷層をなして裂罅を  
造り、地殼の内部に藏せらるゝ熔岩は、その弱點を求めて噴出す之を火成岩とす。かくの如く幾  
度か構成崩壊を繰り返し以て今日に至りしものなれば、頗る錯綜混亂すと雖も地質學者は層中に  
埋藏する動植物の遺骸たる化石の種類に考へ、或は地層累積の状態を察し以て地殼發育の新古を  
分ち四大界とす、界は更に系に分ち統に分ち以て地質系統をなす。而して、これ等地殼の成りし  
時を代と呼び、代は更に紀に小別す之を地史年代と云ふ。

#### 始原界(代)

片麻岩系(紀)  
結晶片岩系(紀)

前寒武利亞系(紀)

寒武利亞系(紀)

志留利亞系(紀)

泥盆系(紀)

石炭系(紀)

二疊系(紀)

三疊系(紀)

侏羅系(紀)

白堊系(紀)

#### 中生界(代)

第三系(紀)

第四系(紀)

洪積層統(世)

沖積層統(世)

#### 新生界(代)

始原界 此は最古の地殼をなせるもの、その出現の時を始原代といふ、地球の最下部を組織する  
ものにして厚さ凡そ三萬米に及ぶ、就中片麻岩、最も古く地盤の骨格をなし幾多地層の爲に被覆

せられ、その露出廣からず、しかも地體の構造を知るに最も必要な材料なれば些少の露出と雖も看過すべきにあらず、始原界の岩石は壓力と地熱との爲に、いたく變性して屈曲皺變甚しく、その結晶片岩に屬するものは紙の如き薄片に剝取するを得るなり。本邦に於て始原界の岩石よりなれる地方は阿武隈高原、飛驒山脈、關東山脈、赤石山脈より三河、紀伊の一部に露はれ四國の中央を東西に走りて九州の西部に出づ。その露出面積九百二十方に過ぎずして即ち全面積の百分の三、四二に當る、御在所、竹貫、三波川はその露出の著しきを以て名あり。

古生界 始原界の上に沈澱せる厚さ一萬五千米の一大岩層なり歐洲の古生界は前表の如く精密に區分せらるれど本邦の古生界は、その中より出づる化石に乏しければ、外國に於ける如く區別する能はず、御荷録層は最も古く、秩父層、小佛層之に次ぐその露出は北上、關東、赤石の諸山脈及び紀伊四國、九州に於て始原紀層を被つて著しく發達し飛驒以西丹波丹後を経て中國に至る地方も亦その露出少しとなさず。露出面積三千四百四十六方里即ち全面積の百分の十二、七四を占め殆ど始原界の四倍に擴がる、當時歐洲に於ては森林鬱茂して今日の石炭を生せしと雖も本邦は未だ海底にありしを以て草木の發生に適せず、却て紡錘虫、海百合等棲息せしが故に今日石灰の材料として採掘する石灰岩は此時代になりしもの多し。

中生界 古生界の地層の上に發育せしもの、その面積廣からずして點々として散在し僅に千九百

三十五方里に過ぎず即ち日本全面積の百分の七、一五なり。これ始より中生層の發育悪しかりしにあらでその始は頗る廣く露出せしも中生代の前後に起れる地盤の大變動の爲め、堅實ならざりし本界の地層はその激動に勝てずして陥落消磨せし所多きなるべし。

新生界 本界の最も新しきものは現に海濱或は河流の流域に堆積せる新層にして日本群島の面積はこの代に至て著しく増加し本界の被覆するところ一萬二千七百十三方里に及び殆ど全面積の半を占むその始なる第三紀層は北日本に多く、北海道奥羽地方に著しく發達す。大河の濶域地たる石狩、越後、關東、濃尾、攝津等の廣大なる河領平野は最新の時代たる第四紀層なり。本界は土地の筋肉にして中生界以上の岩石は土地の骨節たり、富の淵源、人事の逐鹿皆これに於てす、眞に國の盛衰は斯界の多少によるといふも經言にあらざるなり。

此等の地層の發達すると共に各時代を通じて火成岩の迸發あり、舊火成岩たる花崗岩は始原古生の二代中に出で中生代に入りてその勢衰へず、本州中部地方、近畿地方、中國地方に連亘して露出せるもの即ちこれなり。今日見る火山は概ね新生界の初なる第三紀以後の活動に屬し從てその噴出物たる新火山岩は亦この以後に表はれたるものなり。

### 第五章 山系

臺灣山脈

**臺灣の山系** は即ち臺灣山脈にして、地體構造上、臺灣琉球系に屬す、島の中央より稍東に

臺東海岸

偏し島の長軸に並行して分水嶺をなす、その起端は南岬の北に起り、北を東の方向に走り、三千

蕃界嶺

米以上の高峰屏風の如く列び、雪山近傍に至り北々東に轉じ、蘇澳近傍にて海に入る。新高山は

臺東火山  
大屯火山  
山脈

その最高峯にして海拔四千四百四十五米、實に本邦第一の高峯なり、雪山之に次ぎ、三千四百二十

四米に及び、その高度本州の赤石山脈、飛驒山脈より遙に大なり、山軸の東方海岸に並行して、

臺東海岸嶺と呼べる小連嶺あり、山軸の西側に蕃界嶺の邱陵地あり、その北に大屯嶺ありて、大

屯火山脈の噴出するところたり、これ等の山脈には直徑二十三尺に亘る大檜を有する山林あり、臺

灣の財源たる樟腦樹も亦この山脈中の所産なり。臺灣には三條の火山脈あり、一は臺灣の主軸山

九州山脈  
日向山脈

脈たる臺灣山脈の東に、一はその西、島の西北端を掠むるものなり、前者を臺東火山脈と云ひ、後

者は即ち大屯火山脈なり。

霧島火山

**本州** 本州の地體は、崑崙山系、樺太山系の兩山系より形成せられ、而して表裏の兩面を有す

るは既に述べたる所なるが、從つて山系も内帶、外帶の兩系をなし、我國の島形に添ふて縦走す

るを見る。崑崙山脈の外帶は、九州の南部日向、肥後の國境を走る九州山脈あり、その脈東に走

阿蘇火山

りて四國島の脊梁をなせる四國山脈をなし、更に東して紀伊山脈となり、方向を北々東に轉じて

筑紫山脈

赤石山脈、木曾山脈となる、その内帶は九州の北部を走る、筑紫山脈より中國山脈、丹波高原、

飛驒高原と相連続し、以て樺太山系と衝突對曲す。

九州山脈は、九州南部の骨格をなせるもの、薩摩の西海中、甌島に起り西南より東北に走り、日

向南部に於て稍南北の方向に近づき、南々西より北々東に向ふ、之を特に日向山脈と云ふ。脈中

の最高峰市房山は、九州第二の高度を保ち、海拔千八百二十米、肥後、日向の境上に聳え、祖母岳

は千九百八十五米、九州第一の高峯にして、肥後、豊後の境上に座す。

九州山脈の西南に霧島火山帯あり、口之永良部島の新岳(七六四米)及硫黃島、開闢嶽(九二七米)に

連れる噴火脈は櫻島に延び、霧島に至り其勢、盛を極め韓國嶽(一七六二米)高千穂峰(一六五九

米)等の諸高峰を崛起す。

九州の内帶山脈は筑紫山脈にして、稍九州山脈の主軸と平行して西南より東北に走るも、御笠川

の横谷の之を截りて東西二個の山塊となる、東は筑豊煤田を含める企救、志摩の小山塊に分れ、

その西なるは背振山塊にして背振山(一〇三六)天岳(一〇六九米)等の高峰あり。

九州山脈と筑紫山脈との峽間に噴出せるは阿蘇火山脈なり、肥前の多良岳(二二三三米)に起り、島

原半島の温泉嶽(一四八六米)に連り、(多良岳、温泉岳は、もと霧島火山脈に屬せしむ)方向を北東に轉じて



有明海を越え、熊本の西、金峰山<sup>キミツ</sup>を起し以て本脈の盟主たる阿蘇山に連なる。阿蘇火山は肥後の東境に聳え、その外輪山の直徑南北六里(大矢峠より遠目ヶ鼻に至る)、東西四里(立野より坂梨に至る)世界に著名なる大火山口にして、中央に五岳あり、最も高きは高岳にして海拔千六百九十米に達す、その北に九重火山あり、豊後の中央に聳え、最高峰、千八百六十三米、中央の圓錐峰を星生山(二七二七米)とす、その東北に鶴見岳(一四八〇米)及由布嶽(一七二七米)の兩火山あり、阿蘇火山脈地方は集塊岩廣く分布すれば流水の浸蝕を受けて奇怪なる絶壁、峽流を作る、豊後の耶馬溪、肥後の小耶馬溪の如き、これなり。

阿蘇火山脈は、由布嶽の消火山より、國前半島の双子山を起し、四國に入り、石槌山、飯野山を噴起し、紀伊半島を過ぎて、伊賀名張の南に表はれ、更に三河の風來寺火山となる。

四國山脈は、四國島の北部に主軸を有し、西南西より東北東に走る、石槌山は脈中の高峰にして二千九十七米、劔山は東部の主峰たり、海拔二千二百四十二米、四國島第一の高峰なり、四國山脈の北には吉野川縦谷を隔て、讃岐山脈あり、四國山脈の南にも山塊多し、東に海部、安藝山塊あり、西に高岡、幡多、宇和の山塊あり。

中國地方の脊梁をなす中國山脈は、高原性にして、五百米内外の山陵不規則なる方向に走り、千

耶馬溪

四國山脈

讃岐山脈

中國山脈

白山火山脈

突道山脈

丹波高原

能登火山脈

紀伊山脈

和泉山脈

金剛山脈

笠置山脈

因幡の境なる菅野山(一六五〇米)、等の諸山は加賀の白山を盟主として中國を経て九州北岸、豊岐、五島に連なれる白山火山脈の噴出せしものなり、中國山脈の北に中ノ海、及突道湖を隔て、突道山脈あり、その方向、中國山脈と同じく西南西より東北東に向ふ。

中國山脈の東より、琵琶湖に至る間に蟠る山塊は、丹波高原にして、その南西部大阪灣に臨みて六甲山塊あり、六甲山はその秀點にして九百米に達す、高原の北に與謝山塊あり、七百米を出ざる丘陵地なり、琵琶湖の西に聳ゆる比良山(二二二二米)は、丹波高原第一の雄峰なり。

隱岐列島は日本海上に孤立する中國の屬島なり、佐渡に起り、能登半島の北部を掠めて隱岐に通せる能登火山脈の噴起にかゝる。

紀伊山脈は、紀伊半島の骨格をなすもの、西は四國山脈に連り、東は三河の渥美半島に連る、大臺原山は脈中の高峰にして、千六百八十五米に及ぶ、その西、熊野川の上流を隔て、大峰山陵あり、最高峰を彌山とし、千九百二十米あり、紀伊山脈と、紀伊川より伊勢櫛田川に連る縦谷を隔て、和泉、金剛、笠置、鈴鹿の四山脈あり。

和泉山脈は、紀伊川の北に聳え、葛城山は脈中の秀峰にして海拔八百五十八米なり、その北に金剛山脈あり、金剛山は海拔千二百三十七米に達す、金剛山脈の北部は大和川の谷を隔て、生駒山群をなす、金剛山脈の東、奈良の平野を隔て、笠置山脈の南北に走るあり、その東麓は上野

鈴鹿山脈  
養老山脈

邱陵地に連なる。鈴鹿山脈は、上野邱陵地の東を南北に走る、鎌ヶ岳、綿向山、大洞山、三畝山なり。鈴鹿山脈の北、員辨川を隔て、養老山脈あり、濃尾の平野に臨み、その高峰を笠ヶ岳（一〇三七米）とす。

木曾山脈  
赤石山脈

木曾山脈は、尾、濃三國の境上に起り、南々西より北々東に延び、その高さ千五百乃至二千米あり、木曾駒ヶ岳（二八八〇米）は脈中の最高峰なり。木曾山脈の東、天龍川を隔て、赤石山脈の蜿蜒たるあり、赤石山（三〇九三米）を最秀峯とし、仙丈岳（二九七〇米）之に次ぐ、赤石山脈の西、天龍川に近く走る一脈を伊奈山脈と呼ぶ、天龍川の支流三峯川、遠山川及參河の豊川により主脈と分る。

飛騨高原  
乗鞍火山

飛騨高原は、本邦唯一の高山性の地、二千米に近き諸峯を頂き、我國最高連嶺たり、高原の東邊は、乗鞍火山脈に属する御嶽、乗鞍岳、硫黄岳、立山等の諸火山を崛起す、之と平行して槍ヶ嶽連嶺あり、槍ヶ嶽は三千九十二米、大蓮華山は二千九百三十四米に達す。

伊吹山脈  
伊吹山脈

飛騨高原の西南部、濃尾平野に臨めるところに、伊吹山脈あり、鈴鹿山脈の北に連なり、飛騨高原と丹波高原の中間に位す。

寶達山脈

飛騨高原の北西、富山、福井の平野を隔て、能登半島の頸部に、寶達山脈あり、高瓜、寶達、獅子等の諸山を含む。

富士帯火山脈

本土帯の北彎を構成する樺太山系は、樺太島に起り、其外帯は北海道本島を宗谷岬より襟裳岬に、北北西より南々東に縦断する蝦夷山脈をなし、本州に於ては北上山脈、阿武隈山脈、關東山脈と相連鎖して崑崙山系と對曲す。關東山脈は斷層の爲に所々に陥落を生じ、今日現存せるは、其破片たる山塊に過ぎず、秩父山塊、足尾山塊の如きその一なり。樺太山系の内帯は、奥羽の脊梁をなせる中央分水山脈、越後山脈あり、中央分水山脈は那須火山脈に属する火山の脈を切て噴出せし爲め、其被はるゝ所となる。崑崙、樺太兩山系の相衝突せる本州中部は、對曲、若しくは斷層等諸種の地殼の變動を生じ、爲に二山系の方向たる、東北より西南に向へる線に、略直角をなして大裂縫線あり、こゝに本州第一の高峯、富士（四七七八米）を主峯とせる富士帯火山脈入り出づ、即ち南はマツアナ諸島より連絡して、硫黄島の火山列島、小笠原群島、豆南諸島、伊豆の火山半島を起し、箱根火山帯より富士山、甲斐の茅ヶ岳、甲信の境上にある八ヶ嶽（二九三二米）、立科（二五三〇米）を経て、信濃北境に高妻（二四二五米）、黒姫（一九八二米）、越後の妙高（三四五四米）、焼山（二四四〇米）、等の火山を起し日本海岸に及ぶ、この脈と略並行して、信濃の東境千曲川の東に、毛無火山脈あり、淺間（二四六〇米）草津白根（二二四三米）毛無（一六四五米）等の諸大火山の脈は、那須火山脈に属するものなり。

毛無火山脈

足尾山塊

富士帯火山脈の東に關東山脈あり、三ヶの山塊に分る、北なるを足尾山塊とし、千曲川の上流、甲

秩父山塊  
丹澤山塊

武信境上に蟠居せるを秩父山塊とし、その東南を丹澤山塊とす、三山塊孤を畫きて關東の平野を抱く、秩父山塊は、最も高峻にして甲武信嶽は二千四百五十八米の高峯、雲取山は二千一米なりとす。

筑波山脈  
八溝山脈  
阿武隈山脈  
北上山脈

關東平野の北には、筑波山脈、八溝山脈あり、その北に阿武隈山脈あり、磐城海岸を南北に走り、阿武隈川口に至る、阿武隈山脈の北東、石巻灣を隔て、北上山脈あり、北上川の東に蟠りて南北に走る、早池峯は、千九百九十六米の高度を有して最高峯なり。

那須火山脈

奥羽の脊梁をなす中央分水嶺山脈は、主として那須火山脈の噴起を受く、那須火山脈は、淺間山より北東に向ひ、榛名、赤城、日光火山彙、那須火山彙等、一直線に列し更に北に向ひて、吾妻、藏王、駒ヶ岳、焼山、岩手山、八甲田山、恐山等の諸火山となり、遂に北海道本島の膽振火山脈

島海火山脈

に連接す、現今盛に噴烟せる活火山、頗、多く、本邦火山中最も活動の激烈なるものなり、那須火山脈の西に一系列の火山脈あり、日本海岸を南北に走る、陸奥の岩木山に起り、鳥海、森吉、月山に連なる、これを島海火山脈とす。

越後山脈

島海火山脈に接續して越後山脈あり、信濃川の東に起り、越後と上野、下野、岩代、羽前の境をなす平嶽(二二七〇米)、駒ヶ岳(二二三〇米)は西部に聳え、飯豊山(一八八〇米)、朝日岳(二二四四米)は北部に高し。

蝦夷山脈

蝦夷山脈は北々西より南々東に北海道本島の中央を縦貫す、その北部を天鹽山脈と云ひ、南部を日高山脈とす、ムタクカムウシユベ(二二三四五米)を最高峯とし、石狩岳(二〇三五米)ヒバイロ岳(二〇一七米)、オプタテシテ(一九八〇米)等の諸火山一列をなす、日高山脈の西、鶴川、空知川を隔て、夕張山脈あり、夕張岳(一九三三米)及アシユベヌツブリ(一九二〇米)の高峯聳ゆ、北海道の西部には那須火山脈、島海火山脈に接續せる膽振火山脈あり、その北に増毛火山群あり、蝦夷山脈の東側には千島に連なれる火山脈、東より來りて之に會す、之を千島火山脈とす、シベリアのカムチャッカ半島より脈を曳き、千島列島を噴起して北海道本島を東より西に亘り、蝦夷山脈と丁字形に結合す。

膽振火山脈  
千島火山脈

我日本はかくの如く國中、山嶽重疊し、特に火山脈の縦横に噴起せるあり、蓋、我國は亞細亞大陸の縁邊をなし、その東は急に深き太平洋の陥没あり、太平洋は五大洋中最も深き海盤なれば、大陸のこの深き海に沿へる縁は、大に地殻に弱點を生ずるや明なり、爲に一帶の火山脈、この太平洋の縁に連亘し、太平洋の周圍には、世界火山脈總數の大部分を集合し、さながら燈火を點せる如く、噴起並列せり、げに火山脈は、太平洋を廻ると云ふも誤ならず、東はアメリカ大陸の西岸、西は我日本、フィリピン諸島、その南の島に、皆て火山を抱く、我日本には貳百以上の火山あり、この中活動の顯著なるもの六十あり。

硫氣孔  
蒸氣孔

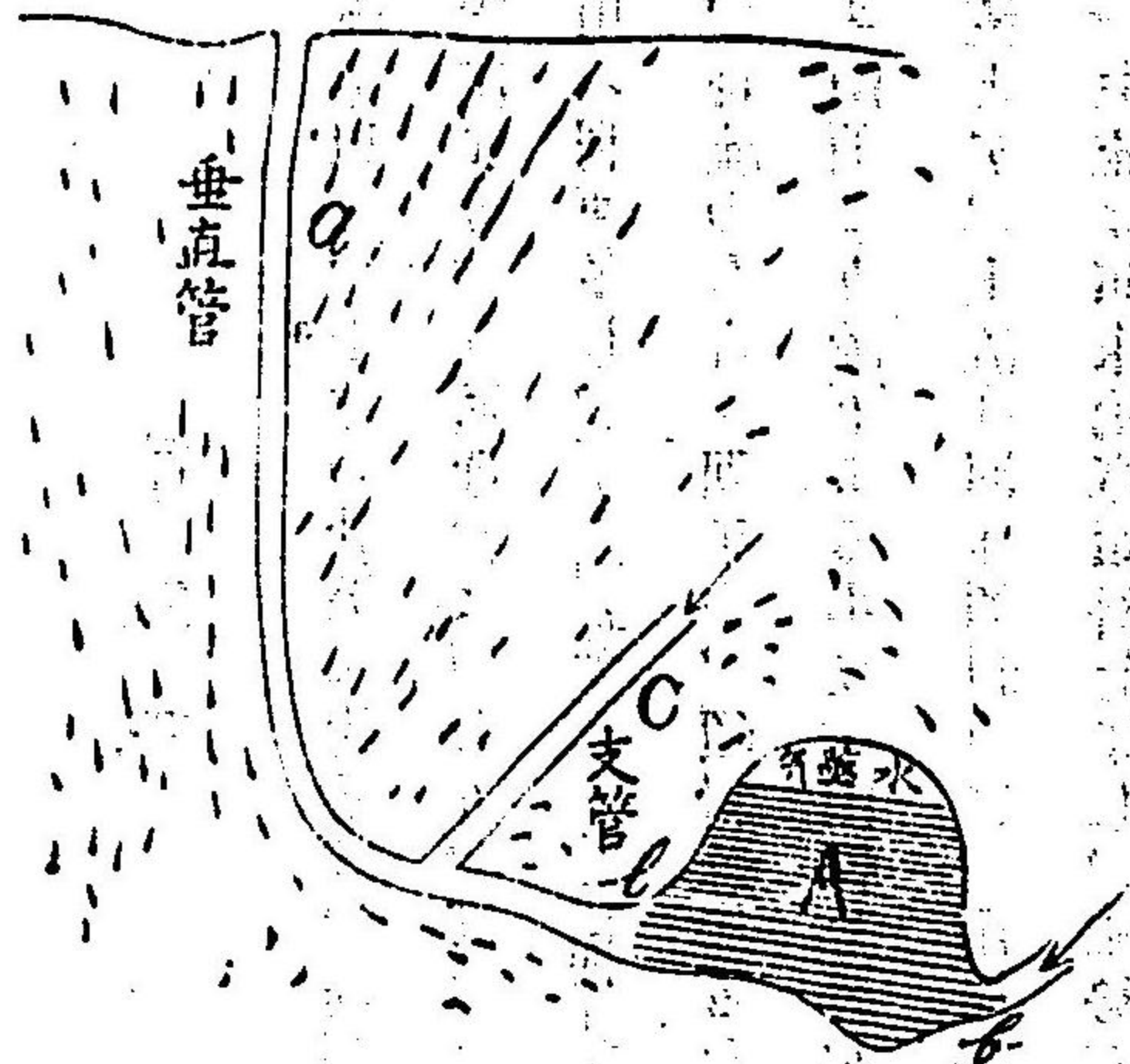
噴氣孔、間歇泉温泉は皆地熱作用に基す、本邦には噴氣孔の數、頗多し、水蒸氣の外、硫質瓦斯を噴出するを硫氣孔と云ひ、箱根の大地獄、岩代磐梯山の大地獄の如きこれなり。主に水蒸氣を噴出せしむるを蒸氣孔と云ひ、信濃の遊獄谷、阿蘇の湯の谷の如し、炭酸瓦斯を噴出するを炭酸孔と云ひ、三瓶山の鳥地獄はこれなり。

温泉

温泉は、氣温以上の温度を有する鑄水の湧出するを云ふ、泉質により酸性泉、鹽類泉、鐵泉、硫黃泉、炭酸泉、單純泉の別あり、富士火山脈、那須火山脈地方に多く湧出し、其數五百を下らず、温泉は病を醫し、精神を爽ならしむる生理上の効あるのみならず、その湧出するや附近の鑛物を溶解して、之を沈澱して鑛脈を作りて、地中の富を集じ、其効小なりとせず。水蒸氣及温泉の湧出の週期的なるを間歇泉とす、世界中間歇泉の多き地は、アイスランド、北アメリカ、ニュージーランド等にして我國にては、熱海と鬼首との二ヶ所あり、熱海の間歇泉は、海拔二十二米の高にあり、一晝夜に五回規則正しく噴出し、その週期の正しきこと、外國にも、その類例なし、今はその噴出孔に岩組を作り、横に噴出せしめし故、昔時の壯觀なし、噴出のなき時には少量の蒸氣孔口より立ち上るに過ぎざるも、噴出の時刻の近くや、地下に遠雷の如き響、斷續して聞え、尋で少量の湯沸騰して現はれ、次第に勢を増し、大噴出をなし、瀧の如く熱湯、並に蒸氣を噴出し、遠雷の如き響をなす、この間二時間。最も烈じきは、その内二時間なりとす、沸騰の止みし後

間歇泉

二時間半を経て、次の噴出あり、時としては長湧と稱し、十二時間連續して噴出することあり、その理は地下數十間の處に空洞aあり、その周圍は、地殻の内部より數多の脈を通じて來る。過



熱せられたる水蒸氣、又は熱湯の爲に高温度なりとす。

りはこの大空洞に水を供給する水道なり、今、空洞内の水、高温度に上り、従て水蒸氣を發し、水量の増すに従ひ、水蒸氣の張力増し遂に水面を増して、吐口より垂直管aを通じて熱湯を噴出せしむ、而して空洞内の水面より下れば、蒸氣噴出し、蒸氣を多量に噴出すれば、空洞内及管内の壓力、稍減じ、比較的低温度の湯は、支管cより流入し、一時水蒸氣の噴出を止む、されど空洞内には、十分の熱湯あり、熱の供給盛なる故、再び水を押し出す、水が出、次に水蒸氣出で、管中の

壓力少しく減ずる中は、又c支管より流入して水蒸氣を止む、かゝることを數回繰返す中、aの水は幾分交代して温度下り、壓力を減ずるよりより多量の低温度の湯流入す、この湯の再、充分熱せらるる迄は暫時噴出を休み、熱海の場合にては、この熱する時間は三時半なり。地震も、火

山に關係なきに非るも、噴火地震と稱するものは、其範圍極めて狭し。地熱の冷却の結果より生ずる地皮の褶曲の爲め、斷層を生じ、所謂地之地震を起す、我國の大地震は概してこの類なり、猶間接に地熱に基づく陥落地震あり、温泉等地下水の爲に石灰質の炭石の溶解せられて、地中に大空洞を生じ、その上部の地盤を支ふる能はずして陥落するより生ず、我國にはこの例乏し。

水系

## 第六章 水系

山脈を以て、土地の骨格に比せば、河川は將に血管に比すべきものなり、河の所在は、平坦にして肥沃なり、交通運輸に便あり、灌溉に利あり、水力供用に利あり、その他魚介養藻の利あり、河川の利便多し、かくの如くなるに拘はらず、我國土の形勢狹長にして、大山系、中央の脊骨をなせば、長流のあらん理なく、傾斜急なるを以て、流勢亦激しく、大河なきも亦已むを得ざるなり。抑も山頂より流下する水は、山軸を分水嶺となし、兩側に流れ、其傾きに三種あり、上流、中流、下流とす、上流は河床傾斜急に、兩岸高く聳え、河幅狭く水勢急にして、時に奔湍瀑布をなすあり。中流は河床稍寛傾斜をなし、流勢亦さまで急ならず、沿岸に灌溉の便を與へ、或は支流を入れて、水量を増じ、或は停水して沼湖をなす、下流は河幅漸く廣く、水量漸く大にして舟運の便多く、河口に至りて三稜洲を作りて分流するあり、海或は灣をなすあり、上流の水は浸蝕と運動と

の働きをなし、中流に於ては二方の外に堆積作用を營み、下流に下りては寧ろ、堆積の力大なり。本邦の河には上流、中流ありて下流なし、これ舟航の便少なきを示すもの、唯一つの利根川のみ、下流と稱し得べき部分を具ふるを見る。

國土の幅狭きに、山脈高く聳れるは、世界無比とも云ふべき我國は、國土經濟上より見ば、實に不利なるもの多し、流勢急激にして表土を推し流し、肥料分を流し去るによる、且つ我國は四面環海にして、黒潮等の暖流の沿岸を流るゝあり、水蒸氣多く従つて雨量夥しければ、往々洪水を醸して水災頻繁なり、今水害を被れる土地の面積を算するに。

明治三十年	一〇、五四七町	三十一年	一九四、四二二町
三十二年	九、一八八町	三十三年	一、九四七町
三十五年	二一、二五八町		

三十一年最も甚しく、水災ありし河川の數二百、水災度數一千を超え損害金額六千萬圓に垂んとす、水害の豫防につきては個人の努力は、殆ど何の効をも有せず、一局部の堤防の破壊は、その結果を廣大なる面積に及ぼすことあり、十數里の流域に亘り同一の低地に居住するものは常に共通の利害を有すれども、區域の大に失し、却て共同の事業を企て難きものあり、政府は、森林法、河川法、砂防法を制定して治水の經營を怠らず、利根、富士、天龍、大井、北上、最上、阿武隈、

信濃、阿賀、庄、木曾、吉野、筑後、淀の十四川は内務省土木局の直轄に屬し、その他は所在府縣をして水害に對する豫防工事に當らしむ。

河川の流勢、猛烈なるは如上の不利益あるに拘はらず、他方には水力を利用して、大工業を恢弘するに足る。水力使用の簡便なる、費用の低廉なる、蒸氣力使用に比すれば少きは十分の一、多きは三分の一に過ぎず、而して水力使用は、その費用の廉なるに拘はらず、反て費用多き蒸氣力使用に優る點五あり。

- 一、汽力使用の如き汽罐破裂するが如き危険なき事、
  - 二、機關手、火夫を要せざる事、
  - 三、黒烟を吹き散らし、近傍に迷惑を及ぼさざる事、
  - 四、石炭を要せざる事、
  - 五、機械運動の開始、中止、唯、水門の手柄を一二轉せば、直に意の儘なり、氣力使用の如く、動力を傳る迄に時間と金とを要ざるなり。
- 我國は國中至るところに、水力を利用し得べき箇所は富み、全國に放棄しある瀑布、河川等の水力を利用せば、大畧三萬馬力を發生し得べし、將來殖産工業上の天寶と謂ふべし。河流と、その流入海面を次に掲ぐべし。

◎オコック海斜面

○糠拂川、頓別川、渚滑川、湧別川、常呂川(三五)網走川、斜里川(北見)

◎根室海峡斜面

○標津川、西別川(根室)

◎太平洋斜面

○釧路川(三三)鹿路川、荻路川(釧路)

○十勝川(五二)(十勝)

○幌別川、向別川、元浦川、幌舞川、三石川、布辻川、網別川、染退川、新冠川、沙流川、(三五)(日高)

○鶴川、厚真川、勇拂川、苦小牧川、小糸魚川、別々川、白老川、敷生川、長流川、國縫川、遊樂部川(釧路)

○落部川、島崎川、折戸川、磯谷川(渡島)

◎津輕海峡斜面

○沙泊川、戸切地川、茂邊地川、大龜川、知内川、福島川、及部川(渡島)

○正津川、檜川、堤川(陸奥)

◎太平洋斜

○奥入瀬川、下市川、馬淵川、淡川(陸奥)

○長内川、安家川、小木川、閉伊川(陸中)

○北上川(七九)追波川、鳴瀬川、名取川(陸前)

○阿武隈川(七七)眞野川、新田川、諸戸川、木戸川、夏井川、下川、鮫川(磐城)

奥羽地方

○久慈川、那珂川(四二)(常陸)

○利根川(七一)(常陸、下總)

○茨隅川、小糸川、小櫃川(上總)

關東地方

第壹篇 自然地理

本州中部地方

- 江戸川、中川、隅田川(三〇)六郷川(武蔵)
- 境川、相模川、酒匂川、早川(相模)
- 狩野川、鈴川、富士川(三八)安倍川(駿河)
- 大井川(四六)太田川、天龍川(六〇)遠江
- 豊川、矢作川、(三河)

近畿地方

- 庄内川、箕川、木曾川(五五)尾張
- 鍋田川、揖斐川、(以上三川、木曾川の分流)町屋川、鈴鹿川、雲田川、櫛田川、宮川(三三)伊勢
- 熊野川(三七)古座川、日置川(三一)有田川、紀伊の川(四七)紀伊
- ◎大阪湾斜面
- 岡田川、大津川、大和川、(和泉)
- 安治川、(二〇)武庫川(播磨)
- ◎瀬戸内海斜面
- 加古川、市川、揖保川、千種川(播磨)

中國地方

- 東大川、四大川(備前)
- 川邊川、(備中)
- 齊田川、三原川(備後)
- 太田川、小瀬川(安藝)
- 門前川、佐波川(周防)
- 厚東川(長門)

四國地方

- 肱川(伊豫)

九州地方

- 大野川、大分川(豊前)
- 藤原川、山國川(豊後)

四國地方

- ◎太平洋斜面
- 吉野川(四一)那賀川、海部川(阿波)
- 物部川、仁淀川、四萬十川(土佐)

九州地方

- ◎支那東海斜面
- 五箇莊川、美々津川、名置川、垂門川、大丸川、一瀬川、大淀川、加江田川、廣戸川(日向)
- 釜田川、新川、上別府川(大隅)
- 甲突川(薩摩)
- 萬の瀬川、川内川(四六)薩摩
- 球磨川、絳川、白川、菊池川(肥後)
- 筑後川、矢部川、武雄川(筑後)

臺灣地方

- 卑南大溪(臺灣)
- ◎臺灣海峡斜面
- 下淡水溪(三二)阿公店溪、手園川、四脚溪、大突溪、大肚溪、大甲溪、淡水溪(三五)臺灣

九州地方

- ◎日本海斜面
- 松浦川(肥前)
- 遠賀川(筑前)

- 阿武川(長門)

- 高津川、江川(五〇)石見

中國地方

- 神門川、簸の川(出雲)
- 日野川、天神川(伯耆)
- 加藤川(因幡)

近畿地方

- 朝來川(但馬)
- 竹野川、大川、由良川(三〇)[丹波]

本州中部地方

- 九頭龍川(三二)[越前]
- 手取川(加賀)
- 射水川(五八)[神通川(五二)早月川、黒部川(越中)]
- 糸魚川、荒川、信濃川(一〇〇)[阿賀野川(五七)内野新川、タイナイ川、アラ川、三面川(越後)]

奥羽地方

- 鳳ヶ關川、最上川(三五)[羽前]
- 日向川、月光川、小砂川、關川、子吉川、御物川(三五)能代川(羽後)
- 岩木川(陸奥)

北海道本島

- 茂草川、石狩川、天野川、厚澤部川、相沼内川、見市川(渡島)
- 利別川、泊川、朱太川、尻別川、網株川、神喜内川、美園川、古平川、余市川(小樽)
- 石狩川(一六七)厚田川、(石狩)
- 天鹽川(七四)コタンハツ(天鹽)
- マクンハツ(北見)

我日本の上田、又は上畑と稱せらるゝは、悉く河に因縁す。

河系	田	畑	全国耕地トノ割合
御物川及能代川	一〇〇,〇〇〇	三五,〇〇〇	二、六六
最上川	七四,〇〇〇	三四,〇〇〇	二、一五
信濃川	九二,〇〇〇	六四,〇〇〇	三、一〇
北上川	九四,〇〇〇	八六,〇〇〇	三、五八
阿武隈川	七二,〇〇〇	四三,〇〇〇	二、二九
利根川	二八九,〇〇〇	一四八,〇〇〇	一〇、六八
木曾川	一〇四,〇〇〇	六四,〇〇〇	三、三四
淀川及大和川	一二四,〇〇〇	六二,〇〇〇	三、七四
筑後川	八二,〇〇〇	四三,〇〇〇	二、四九
計	一,〇三一,〇〇〇	六七九,〇〇〇	三四、〇三

日本全国耕地の三分一強は、實に以上十一河の恩恵を受く。河流の人文に及ぼす、關係亦大ならずや。

**湖沼** 水の地下に浸入せし餘、又は蒸發し得ざる餘分は、自、陸地の凹所に集る、而して、其

凹地の水、蒸發量より多く供給あるときは、湖を生ずべし、其成因大要左の如し。

一、海底の地盤、漸次上昇して乾面となりしも、猶其凹所に水を溜するもの、霞ヶ浦、北浦の如し。

二、種々の地變力により地皮に凹所を生じ、こゝに水の溜溜せしもの、本邦第一の琵琶湖は、陥



三日好月石狩川  
十日新例戸石狩川  
あり近津

落の遺址に水の溜りしもの、遠江の濱名湖、肥後の畷湖は断層の窪地に水の溜りしものなり。  
 三、火山の舊噴火口に水を湛へたるもの。北海道の支笏湖。  
 四、火山の外輪山と中央火口丘との間にある、火口原の一部に水を湛えたるもの、箱根の蘆の湖、上野の榛名湖。

五、火山噴出物の堆積の爲め、溪流を堰き止めて生せるもの。中禰寺湖、檜原湖、秋元湖。  
 六、陸地に近接したる島嶼が、陸地の發達の爲に海峡の一部を遮閉せられて生せるもの、八郎瀉、矢道湖。

七、流水の土砂を河口に運搬し、海波の抵抗によりて、吐水力と波浪の力、相平均する所に沈澱し、遂に湖状をなすもの、日本海岸、北陸道岸に多き瀉はこれなり。

八、河邊の三日月沼、河道の移轉の爲め、舊河道の一部に、水を蓄したるもの、印幡沼、石狩川の沿岸、伊太利のアルプス山下、スカンデナヴィアの山中には、氷河の削剝作用によつて生せる湖多けれど、我國にはなし。

湖沼の附近は、概、冲積層の平原にして、地味肥沃、農産饒多、交通の便多く、魚介の利に富めば、従つて都府の發生するあるは自然の理なり。

湖	所在	周囲	湖附近の人口	沿岸毎一里の人口	記	事
八郎瀉	羽後	一五里	四二、〇〇〇	二、八〇〇	湖に近く日本海あれば人口比較的多からず。	
猪苗代湖	岩代	二一六里	二二、〇〇〇	一、四〇〇	湖の北岸に猪苗代町(人口二、七〇〇)あり、若松市(人口三〇、〇〇〇)の繁昌、この湖による大、されど、市の所在湖と稍隔たれば市の人口は上項に算入せず。	
諏訪湖	信濃	四里二〇丁	四六、〇〇〇	二、〇〇〇	湖東に上諏訪町(一〇、〇〇〇)湖西に下諏訪町(六、五〇〇)。	
河北沼	加賀	六里二〇丁	二六、〇〇〇	四、〇〇〇	湖の東岸に津幡町(四、〇〇〇)金澤市(八四、〇〇〇)より日本海に至る荷物運搬の湖による上金石町(七、〇〇〇)湖の河となりて海に注ぐ所。金澤市、上金石町の人口は上項に算入せず。	
霧ヶ浦	常陸	三六里	一一八、〇〇〇	三、六〇〇	湖北に石岡町(一三、〇〇〇)高濱町(三、〇〇〇)小川町(四、〇〇〇)あり、湖東に玉造町(二、五〇〇)麻生町(三、五〇〇)湖東町(五、〇〇〇)あり、湖南に江戸崎町(三、〇〇〇)湖西に土浦町(二、〇〇〇)真鍋町(三、〇〇〇)。	
印幡沼	下總	一二里	四四、〇〇〇	三、七〇〇	湖の北方河となりて、利根川に注ぐ所に安食町(四、七〇〇)あり、湖の南の冲積平原上に佐倉町(八、〇〇〇)、白井町(四、〇〇〇)あり。	
琵琶湖	近江	五九里三十二丁	四四〇、〇〇〇	七、四〇〇	湖東人口三十三萬、栗太郡三萬五千、野州郡四萬、蒲生郡四萬七千、神崎郡三萬、愛知郡二萬二千、大上郡五萬、坂田郡五萬二千、東淺井郡三萬、伊香郡二萬四千、草津町五千、八幡町八千、八日市町五千、彦根町二萬、長濱町一萬、湖西人口十一萬、滋賀郡六萬七千、高島郡四萬三千、大津市三萬五千。	
中の湖	出雲	一六里二丁	一四七、〇〇〇	五、〇〇〇	境町(五、〇〇〇)米子町(一萬八千)、安來町(五、〇〇〇)松江町(三萬五千)。	

我國の湖沼は概して北日本に多く、南日本に少し、而して火山脈の貫通する地に多しとす。

- シムンブト、トキダウシ、コムケト、磯淵湖、能取湖、網走沼北見
- 風蓮沼〔根室〕
- 屈斜路湖、殿周湖、兼路沼、阿寒湖〔釧路〕
- 支笏湖、洞爺湖〔虻田〕
- サラキシト、マンケレー〔天鹽〕
- 平沼、小河原沼、十三沼、十和田湖〔陸奥〕
- 八耶海、田澤湖〔羽後〕
- 品井沼〔陸前〕
- 猪苗代湖、槍原湖〔岩代〕
- 福島湖〔越後〕
- 霞ヶ浦、北浦、潤沼〔常陸〕
- 印幡沼、手賀沼〔下總〕
- 中禪寺湖〔下野〕
- 赤城湖、秘名湖〔上野〕
- 蘆湖〔相模〕
- 山中湖、河口湖、本栖湖、西湖、精進湖〔甲斐〕
- 諏訪湖、野尻湖、青木湖、松原湖〔信濃〕
- 横名湖〔遠江〕
- 河北湖、北湖〔加賀〕
- 琵琶湖〔近江〕
- 巨沼池〔山城〕

- 中の海、共道湖〔出雲〕
- 高田湖〔肥後〕
- 池田湖〔薩摩〕

### 第七章 平野

我國は高峻なる山脈、縦横に國中に蜿蜒するを以て大平野あらん理なく、小平野の山脈間に散點せるのみ。されど、この小なる平野も、實に、我國の富源をなし、云はゞ國土の筋肉を構成するもの、極めて重要な部分なり。蓋し平原は人々の往來、物品の交換等、所謂交通運輸に利あり、耕作牧畜に利あり、平原には概ね大河の流駛するを以て、田園の灌漑、船舶の航行に利あり、土地平坦なれば、道路の開設、鐵道の敷設、運河の開鑿に利あり、されば平原は農業に適するのみならず、製造、工業、原料の集散、工製品の運搬、販賣に便利なれば、人民四方より集まり、村落起り、都邑起り、人生の集點、人事の中心となる、偶然にわらず。

我國の平野は、河水の汎溢其他の作用の爲に生成せられたる、河畔平原たる沖積層の平原と。往古の湖底たりし地、後に一方に吐口を求めて潜水の流出したりし爲め乾涸せる湖底平野と、もと海底たりし地、土地の隆起作用と河流の浸淫沈澱との爲に平野となれる沿海平原との三種あり。臺灣の地勢は、頗る簡單にして中央より、稍東に偏して全島を縦斷する分水山脈あり、その東側は

臺灣の平野

平原

臺北平野

傾斜急にして平地なく、その西側に沿ひ蕃界嶺の邱陵地あり、これより西斜面は概して平地にして、臺中以南には邱陵地の西に廣大なる平野あり、臺北平原は、淡水溪の沖積せる地、これ等の平野は砂糖の産額著しく、邦人一年の所要高四億萬斤を産して餘あらんとす、米作亦年に二回の收穫ありて産額四五百萬石に及ぶ。

九州の平野

筑紫平野

肥後平野

人吉平野

出水平野

九州は、地積小に、河流短く、谿谷小なれば、曠漠たる平野を見ず、九州第一の大平野は、筑後川の流域なる筑紫平野とす、筑後米、肥後米はこの平野の産なり、肥後の平野は、熊本の周圍に開展す、もと海底たりし地、菊池川、白川、緑川の浸淫物堆積に加ふるに土地の隆起を以てし、地味肥沃、所謂肥後米の産地なり、肥後の南境、球磨川の上流に人吉平野あり、もと薩摩北境の出水平野と連接せしもの、その中間に火山性諸山の成生によりて其間を遮断せられしもの、如し、出水平野は川内河系に當り、米の産多く、人吉平野は瓢形をなす、球磨川の吐口を求めて流出せざりし昔には湖底たりし地、米の産少なからず、日向、宮崎附近、並に豊後、大分附近に狭小なる沿海平野あり、宮崎平原は大徒川一瀬川の沖積地、大分平野は大野川、大分川築土作用による。四國島は、高原性を帯び、平地少なし、高知平野は仁淀川、物部川の沖積土、極めて小規模なれど、四國島南部の唯一の平野なり。吉野川沿岸には、藍の名産地たる徳島平野あり、讃岐の海岸

四國の平野  
高知平野  
徳島平野

讃岐平野

中國の平野

岡山平野

玉島平野

福山平野

鳥取、倉吉、米子

宍道の平野

近畿地方の平野

攝河泉平野

京都平野

奈良平野

播磨平野

豊岡平野

は平地に富み、讃岐平野の名あり、高繩半島の海岸にも平地あり。

中國は、山脈、脊梁をなし河流は皆これを分水嶺として、南北に走れば、平野も陰陽處々に點在す、山陽には東大川、西大川の沖積土たる岡山平野、川邊川の流域たる玉島平野、芦田川の沖積土たる福山平野、太田川の涵域たる廣島平野及び山口の狭小なる沿海平野あり、何れも藎草の産地として名高し、山陰には加露川の流域たる鳥取平野、天神川流域たる倉吉平野、日野川の沖積土たる米子平野、神門十萬石の稱ある、簸の川、神門川の築土作用になれる宍道平野あり、何れも米、棉等の農産物に富む。

近畿地方は、平野乏しからず、攝河泉の平野は、安治川、大和川の沖積土、安治川の沙泥を河口に沈澱堆積するの急速なることは、明治八年に深さ八尺ありし所と十九年に深さ八尺ある所を測量するに十九年は八年の所より、百間沖に出づ、即ち築土作用は十一年間に百間の割合なり、驚くべき速度ならずや、京都平野は、もと湖底たりし盆地、淀、八幡の裂開せざりし以前は、滿々たる水を湛えたりしもの、巨掠池、その他、所々に點在せる沼は、その遺跡たり、奈良平野は金剛山脈と笠置山脈との間に湛えたる湖底たりし地、大和川、金剛山脈を横断して西に流れ、乾涸したりし盆地なり。

播磨國の大部は、平地にして加古川、市川の灌ぐ所、但馬の豊岡平野は、朝來川の築く所とす、

伊勢平野  
○美濃平野

紀伊半島は沿岸山迫りて平地を剩さず、紀伊川下流の地に狭小なる和歌山平野あるのみ、笠置山脈の東に上野盆地あり、その東、鈴鹿山脈を隔て、伊勢の沿海平野あり、宮川、鈴鹿川等濃流の築く所とす、濃尾平原は、木曾川並にその支流の沖積と、土地の隆起とに因て起成せる沃土なり、北は岐阜、東は瀬戸村、西は赤坂驛及養老の瀧に至る間の地は、近時迄海底たりしと云ふ、木曾川口の三稜州は、その大さ我國第一に位し肥沃比なく、日本の倉庫の名に背かず。琵琶湖畔の平地は、琵琶湖に注ぐ濃流の土砂を沈澱せると、湖水の水量の減退より生じたりしもの、地味亦肥沃なり。

近江平野

本州中部地方

高山平野

加賀平野

福井平野

信濃川平野  
○頭城平野

○越後平野

本州中部地方は、山嶽噴集して地勢高峻を極むれども、その間、河川の流域に平野の開展する少なからず、北に神通川の流域に富山平野あり、高岡平野は、その西に連なりて射水川の沖積土、越中米の産地たり、加賀の平野は加賀丘陵地の西に開け、手取川の灌漑する所、その南、九頭龍川の流域に福井の平野あり、信濃川の流域には所々に狭小なる平地を作る、上流に佐久平あり、中流に善光寺平あり、下流は即ち新潟平野にして、その西に開ける荒川の流域、頸城平野と共に越後米の産地たり、信濃川支流犀川の上流には摺鉢状をなせる松本盆地あり、諏訪湖畔の平野は、宮川の沖積と諏訪湖の減退とによりてなる、天龍川の上流には狭長なる伊那の谿谷平野あり、その下流は沖積土の沿海平野をなし豊川、安倍川、大井川、富士川の下流平野と相連なり、所謂峻遠

甲府盆地

○關東の平野

參の平野をなす、我國第一の茶の産地なり、木曾川の上流には細長なる木曾の谿谷平原あり、甲府盆地は、もと大なる湖なりしも、富士川南に流出して平野をなす、今猶、鯨の化石の發見せらるゝは之が爲なり。

關東平野は、我國第一の大平野にして、西と北とに山を負ひ、東と南とは海に面し、その間約三十里の大平野なり、關東山系の陥没して海となりし後、土地の隆起と河流の沖積とにより陸地となりしもの、大洋洋々として流れ、地味肥沃、氣候温和、真に本邦第一の重要なる平野なり、關東山系の陥落の遺片たる秩父山塊中に、大宮の盆地あり、荒川の涵域に當る。

北日本の平地は、南日本に見る所と大に趣を異にし、廣大なる平地、諸山塊の間に發見し、阿武隈川に沿ひ白河、福島の兩平野あり、磐城の海岸には平、相馬の平野あり。

仙臺灣邊は宮城野の平原にして、北上川の河谷たる北上平野に連なる、那須火山脈と越後山脈、鳥海火山脈との間には會津盆地、米澤、山形、御物川流域には大曲の平野等あり、何れも昔時の湖底の乾涸せしもの、地味肥沃、米の産地たり、最上川の河口に酒田の沿岸平野あり、鳥海火山脈に沿ひ秋田、能代、津輕の平野あり、北上川山脈の北、馬淵川の流域に八戸平野あり、青森灣邊に青森平野あり、苹果の名産地とす。

北海道本島は、蝦夷山脈南北に走り、千島火山脈、膽振火山脈之と東西に交叉して十字形をなし、

その縁邊に數箇の三角形の平野を開く。

石狩平野  
上川平野  
天鹽平野  
十勝平野  
釧路平野  
根室平野

石狩平野は、膽振火山脈と蝦夷山脈との間に開ける大平野にして、石狩川及其の支流の灌漑するところ、開拓、頗、進み、地味肥沃なり、石狩川の上流地と、天鹽川の上流地とは即ち上川の平野にして我國最寒の地なるも、近來發達著し、天鹽川の下流には、天鹽平野の開展するあり、蝦夷山脈の東側には、千島より來れる火山脈、東より來り之に會し、その南に十勝平野あり、十勝川の流域に當る、その東に釧路川の灌漑する釧路平野あり、根室灣に臨んで根室平野あり、標津川、西別川の沖積土なり、北見の南方、斜里灣に臨んで狹小なる沿海平野あり。

### 第八章 海岸

海岸

陸地の海、又は洋と接する所を海岸と云ふ、海岸の出入の多少、即ち海岸線の長短は、國の文野に關係すること、頗る密接なり、これ、海岸線長ければ、岬、角、半島、灣、港、内浦多く從て船舶の出入多く、物品の交換、彼我の往來盛にして、以て、この地方の開進奔達を促す因となる、歐羅巴洲の文明、世界に冠たるは之に起因し、亞弗利加洲の如き出入少なきを以て野蠻の境遇を脱せず。

洲名

海岸線延長

海岸線一里に對する面積

亞細亞	三六〇〇〇哩	四六九方里
北亞米利加	三〇〇〇〇	二六五
歐羅巴	二六〇〇〇	一四三
南亞米利加	一六〇〇〇	四三四
亞弗利加	一二五〇〇	八九五
濠太刺利亞	九〇〇〇	三三二

我國は、世界第一海岸線の長き國なり、世界の海岸線長き國と稱する希臘及那威は、面積五方里に付海岸線一里、英國は七方里に付一里なり、我國は面積二萬七千六百二十二方里(周圍一里以上の島嶼五百餘を計算す)にして、海岸線の全長七千四百六十七里なれば、約三方里半に付一里なり、面積と海岸線とを正確に比較せんには、面積を正圓とせる圓周の長を以て一と定め、之を單位として實際の長と比較して、その長短を定むるを得べし、即ち我國全海岸線は、凡十三倍(一二、八〇五)にして、更に各部に分ちて比較すべし。

本州	四、五七六	五、七八五
四國	三、八三八	五、五二一
九州	五、〇五三	一〇、一八三
北海道	二、三二四	二、四九五
臺灣	一、七八一	二、五三〇

第壹篇 自然地理

四七

北海道は千島列島を除き臺灣は澎湖列島を含み、本州及九州には淡路、佐渡、隱岐、壹岐、對馬、豆南諸島を屬島の中に算せず臺灣に於ては、全島の沿岸屈曲に乏しきも、獨、東北部は稍出入多し、基隆、蘇澳等の諸灣は此に在り、九州の海岸線は、極めて複雑し、その屈曲の頻繁なること、五大島の首位を占め、日向洋に面する日向東部海岸の外は到る處に大出入あり、南に有明浦、鹿兒島灣あり、西岸には肥後に、島嶼に富める八代海、有明海、天草洋あり、肥前は全國、巴狀の數半島をなし、深き有明海を抱き、大村灣を圍む、外に無數の小灣曲、小島嶼あり、北岸には伊萬里、唐津、博多、洞の海の諸灣あり、北東岸に別府灣あり、佐伯灣より細島に至る間、沿岸小屈曲多し。

四國の沿岸は、九州に對する西岸と、紀伊半島に對する東岸に於て、大牙小出入ある外、大灣に乏しきも、佐田岬、足摺岬、室戸崎の如き半島、突角あり。

本州の沿岸は、變化頗る多く、太平洋沿岸、日本海沿岸、瀬戸内海の三部各特色あり、本州東海岸の海岸線は火山脈の方向と平行する所謂太平洋式の海岸をなし、南海岸の海岸線は主山脈と傾角をなす大西洋式に屬す、延長千三百一十一里に及ぶ、奥羽東岸には屈曲少なけれど、陸中に無數の屈曲あり、牡鹿半島あり、東海道沿岸には、房總半島、東京灣、觀音崎、伊豆半島、駿河灣、御前崎、濱名湖、伊良胡崎、知多崎、伊勢海、紀伊半島等海岸の出入擧げて數ふべからず、特に志摩及其附近は、面積〇、六五方里につき、海岸線一里の割合にて、我國に於ける海岸線の最も長さ部分

とす、見るべし、戰國に小濱氏、九鬼氏を出し、徳川時代に河村瑞賢を出し、明治初年近藤真琴を出す、日本の海軍及海運を振興せしめし入材の先後、この地より輩出せしむの誠に其故あり。日本海沿岸は、出入甚だしく、出雲、丹後、若狹、越前、能登の沿岸の外には羽後に男鹿島の小半島あるに過ぎず、北端に陸奥灣あり、而してこれ等の半島、入江皆地質構造線に平行す。

瀬戸内海の海岸は、一定したる方向なく、出入極めて複雑し、無數の島嶼羅列す、海岸の灣入する所は、地皮の斷層及水蝕作用に基するものなり、瀬戸内沿岸の形式は、太平洋式に屬せしむるあれど、瀬戸内式の海岸として區別す。

北海道の全岸亦屈曲に乏しきも、其南端に大なる灣入をなせる内浦(噴火)灣、并に函館灣あり、東岸千島に對する所に、根室、厚岸、諸灣あり。

**海流** 海洋の表面以下、百米乃至二百米の間は、風の方向に従ふ海水の運動ありて、恰も海洋全體に於ける脈管の如く循環す、是を海流と稱す、日本近海の海流には、黒潮と稱する日本海流及び其支流たる對馬海流の外に、小笠原海流と稱する暖流あり、來滿海流及び其分派たる樺太海流、並に千島海流即ち親潮と呼ぶ寒流あり、黒潮は太平洋、北赤道海流の一岐にして、臺灣の南端より、日本海流と稱せられ、同島の東岸に沿ひ、東北に流れ、琉球群島の西方を経て、大隅海峡に向ひ、之より東北東に走り、四國の沖より紀州の南端に達し、之より伊豆七島の東を流れ

海流

黒潮

對馬海流

る暗青色の潮流にして、其速度は一日約五六十哩とす、而して日本海流の温度は、夏季平均二十八度位にして、冬季は臺灣附近に於て二十三度、本州附近にて十七度に達す。  
**對馬海流** 北緯二十七度、東經百二十六度、宮古島の北方に於て日本海流より分岐したるもの、北流して對馬海峽を経て、日本海に入り北東に向ひて日本海の東部を流れ、一は津輕海峽を経て千島海流と衝突して消滅し、一は尙北に進み、北海道の西岸を流れ宗谷岬を廻りて、オホツク海に入り寒冷なる樺太海流と混じり、一は千島列島の西岸に沿ひて北上するものにして、其速度は百二十哩より四哩間にあり。

小笠原海流

**小笠原海流** 小笠原海流とは小笠原島附近より、西に向ひて流る、逆流にして、南より來り小笠原島附近より東北に曲りて、小笠原島の東を流れ、北緯二十九度の邊に於て西に轉じ、東經百三十六度邊より西南に向ひ、又同百二十四度の邊にて南に屈折し、更に東に轉じ小笠原島を一周するものなり。

親潮

親潮即ち千島海流はオホツク海の東北隅に發し、カムチアツカ半島の西岸に沿ひて流れ、半島の南端に於てベーリング海峽より來れる寒流と合し、千島列島の東岸に沿うて南西に進み、根室水道に達し、宗谷海峽より來れる暖流に會し、之より尙、根室、釧路の南岸を洗ひ、襟裳岬を迂回して、西北に進み、噴火灣に入り之より南に折れて津輕海峽に入り、對馬海流に合す、一は陸奥

東岸に沿ひ、北緯四十度附近に達す、親潮は暗濁色にして平均十度内外の温度なり、來滿海流及び樺太海流は共にオホツク海より樺太の北に出で、分れて二派となる、樺太海流は樺太島の東に沿うて流れ、來滿海流は西方大陸に沿うて黄河に出づ。

海流の原因を以て、比重の差に歸し、鹽分多く、比重大なるものは海底を流れ、比重小なるものは表面流となりて、鹽分多き所を補ふものなりとなし、或は温度の差によつて、生ずるものとなし、赤道附近の暖水は、兩極に向ひ、表面を流れ温水の循環運動を起すにありなど唱ふれど、何れも一部の原因にして、その大原因は風の運動にあるなり、貿易風の影響を受けて起り、地球自轉の影響の爲に方向を轉じ、同じ方向に吹く風のために速度を強くせるものなり。

### 第九章 温度

温度

**温度** 我が國の位置は極南僅に熱帯に入るの外、總べて北温帯内に在るを以て、到る所氣候和順にして、四季皆愉快に生活することを得べし、亞細亞洲絶好の氣候なり、然れども地形一千三百里の長さに延長するを以て、北方と南方とは自ら温度の差あり、今我が國の南中北部の重なる地の夏、冬及び全年の平均温度を左に表出すべし(自測候所創立(至三十六年))

	夏	冬	全年	夏	冬	全年
恒春	二七・七(二七・九薩南)	二〇・八(二五・八)	二四・四	二四・八(恒)	臺北	二七・九(陸)
鹿兒島	二六・八	七・二	一六・八	熊本	二七・三	四六・六
					一五・七	二四・八(恒)

廣島	二六八	三七	一四六	大阪	二七二	三八	一四八	一三三
名古屋	二六七	三一	一四五	東京	二五五	二八	一三六	二〇四
金澤	二五六	二〇三	三二	石卷	二三三	一〇六	一一〇	
青森	二三八	九二	六九	根室	一四五	五二	五七	二九
上川	一九七	一〇一	五〇	三三				

右の表によれば夏季我が國の最熱、恒春(二七、六)の温度と最寒根室(一四、五)とは約十三度の差あり冬季は恒春(二〇、九)の温度と上川(氷點下一〇、四)とは三十一度の差あり、而して恒春の温度(二〇、八)は東京の六月頃(二〇、四)略々同じく、又上川の八月(一九、八)の温度も東京初夏に同じ、要するに我が國は四面環海なる上に、南方には温暖なる黒潮と云へる海流の洗へるありて、氣候著しく温暖なり、但し東北の一部は寒流に洗はれ、稍々寒冷なれども、全體より之を見れば、寒暖中和の好氣候にして、暑熱の人を傷害する所少く、又寒氣の營作を妨ぐる地稀なり、是を以て動植の物皆其所を得て、全土風景に富み、亞細亞洲中の樂園と稱せらる。

日本の温度の良好なる所以 一、重に北温帯を占む、二、太平洋に環抱せらる、三、暖流其沿岸を洗ふ。

**雨量** 我が國は北温帯中にありて、多雨の地に屬す、全年の平均雨量最も多き所は大島にして、

三千四百八十二糎に上る、最も少きところは網走にして、僅々七百二十糎に過ぎず、然れども尙各地によりて、多少の差あり、降雨の量尤も多き地方を大別せば、(一)臺北より大島、大隅を経て志摩に到る南太平洋岸一帯の地、(大島三、四八二糎、潮岬三、九〇九糎、高知二、八〇五糎、宮崎二、五六九糎、石垣二、二七四糎)(二)越前、加賀、能登等の日本海岸地方(金澤二、五三八糎、福井二、三九七糎、伏木二、一四〇糎、輪島二、〇八二糎、皆月一、八〇五糎)(三)臺中、臺南、恒春の臺灣西南部(恒春二、三三九糎、臺東一、六二五糎、臺中一、九三四糎)なり。最も雨量の少き所も亦三ヶ所あり(一)十州島の東北海岸地(網走七二〇糎、宗谷八五二、根室九三四)(二)本州島の中央内地(長野九八一糎、松本一、一五二糎、甲府一、二七九糎、前橋一、二一八糎)(三)瀬戸内沿岸(松山一、二九四糎、新居濱一、五五四糎、多度津一、一四二糎、廣島一、四七五糎、呉一四〇八糎、味野一〇七七糎、岡山一、二二糎、神戸一、三九九糎)なり季節に就て言へば、太平洋沿岸は夏季に多雨にして、寒候には尠し、即表日本は殊に十一月の天長節の頃は、多く日本晴れの好天氣なり、日本海沿岸は之に反して、冬季に多雨にして、夏季に寡雨なり、六月及び九月は霖雨多く、殊に六月は『五月雨』と稱し、連日際々として開けず、我が日本の最多雨量の季節なり。

**風** 我が國は西北に亞細亞大陸を控へ、東南は太平洋に瀕するを以て、風は主として此二者に支配せらる、即夏季は太平洋より、亞細亞大陸に向ふ風あり、是れ夏日南風及西南風多き所以なり、



冬期は之に反して、亞細亞大陸より太平洋に向ふ西北風あり、此の風は烈寒の地を掃ひ來るを以て、此の風を被る間は我が國の寒氣は較々強し、九月の上旬には往々颶風起ることあり、此の颶風は比律賓群島附近に起り、東北に進みて本邦各地共甚しく其害を受く。

## 第十章 天産物

本邦の地形は斜に長く、二十九緯度を通じて、熱帯より亞寒帯に亘り、太平洋上に横はり、大陸に近く、且山岳高く聳え、雨量又多く、氣候各様なるを以て、各種の生物あり、然れども諸島の大概は温帯にあるを以て、温帯の生物最も多し。

**植物** 凡そ北緯三十二度以南なる九州南部、臺灣、琉球、小笠原島等には熱帯の植物繁茂し、樟、榕樹、蘇鐵、椰子樹、檳榔樹、龍眼肉、芭蕉實等特種の産あり、九州、四國、本州及び十州島の南部には、温帯植物能く生茂し、國民の命脈を繋ぐ、米、麥の嘉穀を主とし、穀類、豆類及び纖維植物能く繁茂し、喬木には杉、檜、樅、櫻、公孫樹、赤松、黒松、山毛櫸、梅、櫻、楓等の有用樹成長せざるはなし、又十州島の北部及び千島列島に至れば、寒帯性の植物繁茂す、赤楊、蝦夷松、偃松、檜松等を重なる特生樹とす、内地の高山には、白檜、偃松等を生ず、而して全世界顯花植物の三分の二は我國にありと云ふ、殊に陽春三月櫻花の爛熳たる、清秋十月銀杏の黄金色を

なすの景は、歐米に見る能はざる所なりと云ふ。

**動物** 我が國に繁殖する動物類は、必要なる食用をなす、家畜禽鳥多く、有害なる猛獸、有毒なる虫類は實に少く、唯々北海道に熊、狼を産し、臺灣に山猫及豹を棲ましむるのみ、内地に最も多く産する獸類には、馬、牛を始め、野生の猪、鹿、狐、狸、鼬、兔、猿の類とす、沖繩以南には熱帯のうみがめ、珊瑚を産し、對馬には亞細亞大陸に棲息する野猫を産し、北海道には亞細亞、北米の北部に棲息する鳥類を産す、又熱帯より來る暖流、寒帯より來る寒流あるを以て、多種の水族あり、世界豊魚帯の一に數へらる、又昆蟲の種類多なることも、世界稀有なり、殊に貴重なる海生哺乳類をも産す。

**礦物** 我國の地質は、多種多様にして、殊に地下の熱も、未だ盛なるを以て、各種の礦物を出す、殊に産額の多きは硫黃にして、世界の第二位に上り、次に銅は第三位、「アンチモニー」は第四位を占む、其他石炭の産出稍々多きも、品位優等ならず、且金、銀、鐵、石油等を産せざるにあらずれども、世界各地の産出額に比せば、多量なりとは云ふ可らず。

## 第二篇 人文地誌

### 第一章 住民

我が國人種の起原に付ては、種々の説われども、蒙古人種なる大國に入ることは疑なきが如し、然れども遼遠の星霜、亞細亞大陸の絶東に卓立して、大陸種族との因縁を絶ち、氣候風土の異なる自ら習俗風氣、言語を異にし、所謂大和民族なるものを養成するに至り、此の種族は大率此の國土を開き給ひし、國祖の後裔にして、一種の家族に異ならず、開闢以來長に、國運を發展したる種族なり、然れども大和民族、土着以來他に海外の歸化人、及び土族（土蜘蛛等）蝦夷等の異種族の混ざるもの多く、殊に最近臺灣領有以來、尙人種の混雜を來せり、今之を大別して、大和民族、アイヌ種族、支那種族、臺灣蕃族の四種とす。（或は琉球人を大和民族より分つものあり）

**大和民族** と云へども、幾多の星霜と、外國人に接觸すること多かりしため、純一なりとは云ふべからず、然れども優秀なる此民族は、幾多の異族を吸収し、陶冶し、全く大和民族と化生せしむるに至る、然れども之を古史の示す所により稽ふれば、大和民族も、尙天孫種族（瓊々杵尊系に屬する）出雲民族（大國主命系に屬する）と分つことを得べし、天孫種族は伊弉諾尊、天照大神

瓊々杵尊と系統を同ふし出雲民族は伊弉册尊、素盞鳴尊、大國主命と其系統を同ふし、此の兩系族は或は根國（諸册の二尊）に於て、或は高天原（大神と素尊）に於て、又は出雲（瓊々杵尊の將と大國主命）地方に於て、衝突せられしは、神話傳説ながら、兩派の異なるを示すにあらざるや、出雲民族は伊弉册尊及び素盞鳴尊も、高天原より根國に降り、其後裔出雲地方に繁植し、又諸神の根國に交通するには出雲地方を経たるを以て、出雲と根國とは實に密接の關係あり、根國派の民族が朝鮮半島と關係ありしことは、古史に明に遂に出雲民族は韓種と同種族なりと稱するものあり然れども天孫種族も、出雲民族も、其祖國は即高天原にして、此兩種族は同一の地方より一は日向地方に降り、（天孫種族）一は出雲地方に降りしものならんと云ふ。

一説に日向の地、其南方に僻在するを以て、天孫種族は或は馬來種なるべしと云ふと雖ども、古史に於て南方との關係を證するもの、事實殆ど無く、常に北方朝鮮半島との關係を保てる事實は少からず、即對馬、壹岐の二島が早くより、古史に著はれたるに南方の種子島、屋久島、琉球諸島が少しも關係を示さず、殊に韓國（辛國）の神は各地に之を祭れるも、一も南洋の神を祭る神社なく、殊に豊前國田川郡に鹿春神社あり、辛國の神、息長大姫（神功皇后の生家、息長氏の外戚は、天日槍即新羅皇子の裔なれば、日槍の妻、比賣語曾を後世追號して辛國息長大姫と云へるか）の神に配祀するに、忍骨尊、即忍種耳尊を以てするは、北方との關係を知るべし。

**アイヌ種族** 古史に熱蝦夷、巖蝦夷の別あり、巖蝦夷は、アイヌ固有の風俗、習慣を維持して、大和民族と同化せざるものを云ふ、後には漸次大和民族に壓迫せられ、次第に東北地方に逃れて、現今北海道にアイヌ種族として存す、其熱蝦夷なるものは、大和民族と接觸して、其文化

を採用したるものにして、今や全く大和民族に同化し終り、其子孫たるものも之を知る能はざるに至る、然れども大和民族の内に、蝦夷(アイヌ種族)の混入せるは疑ふ可らざるなり、然して現今北海道に存するアイヌ人は其數男女合計一萬七千有餘人にして、(内男八千六百九十九人、女九千二百一十人、日高國に住するもの最も多く、男女合計六千三百餘人なり)此種族は、今尙愚昧にして、且漸次滅盡せんとするの傾あり。

大和民族の内にアイヌ種族の混入するは古史明に之を徵すべし、王朝の末に陸奥に俘囚の長、阿部頼時亂を爲す、俘囚とは所謂熱蝦夷なり)此時頼時、貞任に従ひし、兵士は勿論武衛家術の兵も、アイヌ種族の民たりしのみならず、藤原家術の兵も此種に屬すべし、故に義經が北海道に逃れたりと云ふ傳説を存するは、家術に屬せしアイヌ種族が北海道に渡りて訛傳を生じたるべし。

**支那種族** 臺灣に住する民族にして、本來は 那より渡り、滿洲族、漢種、印度支那種等の移住したるものありしならんも、今や之を明にすること難く、言語、風俗、習慣等全然支那固有の風を存し、阿片吸入等の惡風を存すれども、今や我が王化に浴して、漸次其固有の風を失ひ、大和民族に同化せらるゝに至るべし、吾等は是れを大和民族に化せしめざる可らざるなり。而して臺灣には別に熱蕃と稱するものありて、支那種族の言語、風俗等を採用し、一見支那民族と識別し難し、是れ臺灣土蕃の支那種族と接觸し其競争に堪へずして、漸次支那民族に化せられしものなり、恰も熱蝦夷が大和民族に化せられたると同一なり。

**臺灣蕃族** 臺灣の東方山地に住し、支那民族と化せられず、其種族固より一なりされど、前に

述べたる熱蕃を除く外は、概して蒙昧野蠻なるものにして、所謂是を生蕃と云ふ、元來全島一帯の地に散在したるを、支那人に驅逐せられたり、其性悍猛頑強にして、異族の其境に入るを喜ばず、深山幽谷に割據するを以て、其事情を知ること亦難し、我が領臺以來、稍々之を知ることを得たれども、未だ明確ならず、要するに全島の中央に位せる、埔里社を中心として、南北の二大部に分ち、北を有蹄蕃人、南を無蹄蕃人とし、其發達の情態等大に異れり、人口約十二萬あり。(詳細は後章の臺灣人種の部を見るべし)

## 第二章 教育

教育

教育には、其實質上、學理教育、業務教育及豫備教育の三種あり、或は形式上より分類して初等教育、中等教育、高等教育に分つことを得べし。

小學教育

**小學校** 道徳教育、國民教育の基礎、生活に必須なる知能を傳授する所なれば、豫備教育と、業務教育との二種の目的を有す、最近文部省の統計によれば、全國小學校數二萬三千六百四十八生徒總數五百九十七萬七千二百二十四人に及ぶ、而して就學兒童の百分比例は、男九五、八〇、女八七、〇〇、合計九一、五七に達し、年々増加の傾向あり。

中等教育

**中等教育** 中學校、官公私立合せて二百五十八校、生徒總數九萬五千に及ぶ、東京、大坂、新

實業教育

海は最も普及せる所とす、高等女學校は官公私立合計八十校、生徒二萬二千に及ぶ。實業教育 近時、實業教育勃興し、各府縣概、農業、商業、工業等の學校を設立し、その數五百九十四校、生徒總數三萬人に及ぶ、獨逸今日の隆盛は實業教育の結果なるを思は、實業教育の必要と、その効果とは自明なりとす。

專門教育

專門教育 專門學校令に準據して立てられたる醫學、政治、法律、經濟學、文學、理學の公私專門學校の設立せらるゝもの頗る多く、官立には千葉、仙臺、岡山、金澤、長崎の醫學專門學校あり、東京、神戸、長崎、山口の高等商業學校あり、東京、名古屋、大坂の高等工業學校、京都高等工藝學校、札幌農學校、盛岡高等農林學校あり、大學豫科には東京、仙臺、京都、金澤、熊本、岡山、鹿兒島の七高等學校あり、熊本第五高等學校には工學部の設あり、その他、東京外國語學校、東京美術學校、東京音樂學校及び盲聾者の爲に東京盲聾學校あり。

私立專門學校の名あるものは、早稻田大學、慶應義塾大學、明治大學、法政大學、日本大學、東京法學院大學、京都法政大學、大坂關西大學等あり、何れも法律學、經濟學を教授す、その他醫學、哲學等を教授するもの亦尠ならず。

師範教育

師範教育 官立には、東京、廣島に高等師範學校あり、東京高等工業學校、東京高等商業學校及び農科大學に附屬して教員養成所あり、臨時教員養成所あり、女子の爲には女子高等師範學校

大學教育

あり、各府縣には一個以上の師範學校あり、全國の總數五十七校、生徒一萬九千人に達す。

大學教育 大學は、學術技藝の蘊奥を教授するところ、東京帝國大學は、大學院及法、醫、工、文、理、農の六分科大學あり、京都帝國大學には、大學院及、法科、理工科及び、京都醫科大學福岡醫科大學あり。

この他、宮内省の直轄には、學習院、華族女學校、遞信省には東京商船學校、陸軍省には大學校砲工學校、戶山學校、騎兵實施學校、野戰砲兵射擊學校、要塞砲兵射擊學校、電信教導大隊、士官學校、中央幼年學校、地方幼年學校、砲兵工科學校、經理學校、軍醫學校、獸醫學校等あり、海軍省には大學校、兵學校、機關學校、軍醫學校あり、

近年教育の旺盛その度を加へ、國內に於て男女各種の教育に發展するのみならず、大に清韓國民をも教育するに至りしは賀すべき極なり。

圖書館は、東京帝國圖書館を主とし、大橋圖書館、大坂住友圖書館、その他公私立合せて六十七、書籍七十萬冊に及ぶ。

宗教

第三章 宗教

信教の自由は、帝國憲法に於て認むるところ、我國古來敬神の美風あり、祖先を祀り、英雄を拜

神道

す、名けて神道と云ふ、もとより宗教の範圍に屬すべきも、佛教、基督教等と大に徑庭あり。神社は伊勢の大神宮を始とし、官幣大社四十三、中社二十六、小社三、別格官幣社二十三、國幣中社四九、小社二十六、府縣社五百七十四、郷社三千五百十九、村社五萬二千四百三十七、合計五萬六千七百一社あり、その他格外無資格社數十六萬三千八百七十一の多きに及ぶ、祭祀教法に關し種々の派あり。

神道 實行教 大成教 御嶽教 神理教 大社教  
黑住教 神習教 禊教 金光教 扶桑教 修成教

佛教

佛教は、欽明天皇十三年渡來以後、漸次隆盛に赴き、鎌倉時代は世界佛教の中心地たりしが、今は漸く衰へ、信仰熱も頗冷却せるものありと雖も、國民多數の信するものなり、全國佛寺の數七萬一千九百八十八、境外佛堂三萬八千三十三ヶ所あり、眞宗(一九、六三〇)最多く、曹洞宗(一三、七〇八)、眞言宗(一二、九三〇)之に次ぐ、宗派の分離頗る多く即十三宗三十六派の名あり。

- 天台宗 天台宗門派 天台宗眞盛派
- 眞言宗 眞言宗高野派 眞言宗御室派 眞言宗大覺寺派 眞言宗醍醐派 眞言宗新義 眞言宗智山派 新義眞言宗豐山派
- 淨土宗 眞言宗律宗 眞言宗眞言律宗
- 臨濟宗 淨土宗西山派
- 曹洞宗 (天龍寺派、相國寺派、建仁寺派、南禪寺派、妙心寺派、建長寺派、東福寺派、大徳寺派、圓覺寺派、永源寺派)
- 曹洞宗 曹洞宗

- 眞宗 (本願寺派、大谷派、高田派、水邊派、興正派、佛光寺派、出雲路派、山元派、誠照寺派、三門徒派)
- 日蓮宗 (富士派、不受不施派、不受不施講門派、本門法華宗、法華宗、本妙法華宗)
- 時宗 ○融通念佛宗
- 法相宗 ○華嚴宗

眞宗は、滋賀、岐阜、富山、新潟、大坂に勢力多く、曹洞宗は静岡、愛知に蔓延し、眞言宗は千葉、埼玉、岡山、新潟を本據となし、淨土宗は京都、愛知、臨濟宗は静岡、日蓮宗は千葉に最も多し、概して寺院の多きは愛知、千葉、滋賀、新潟、京都にして何れも、三千ヶ寺以上を有し、鹿児島九十九ヶ寺、沖繩の四十三ヶ寺、高知の二百九ヶ寺を最も少數とす、即ち本州中部、近畿北越地方に盛にして、九州、四國特にその南方に盛ならず、これ歴史上の由來もあるべく、人情風俗にも本づくなるべし。

基督教

基督教は、天文十二年ポルトガル人の種子島、漂着と共に、我國に流入し、その傳播の勢、頗る盛なるものありき。史家ランケ、羅馬法皇史に於て述べて曰く、「十六世紀の中頃より十七世紀の始にかけて、日本は英雄四方に割據し、國內分裂せるに乗じ、エヌイタ教徒は布教に盡瘁し、天正五年(一五七七年)洗禮を受けたりし日本人、三十萬人、慶長十一年(一六〇六)には、三百の寺院ありき。然るに慶長十七年(一六一二)葡船内にて日本人の西班牙に送りし書狀を發見し、家康、基督教徒を遇する残酷を極められたれど、教徒は死を恐れず、互に相助けて教を奉ずるもの、慶

長八年より元和八年(一六〇三—一六二二)の間に、二十三萬九千三百三十九人ありき」と、以てその勢力の大なりしを知るべし、天草島原亂後、殆ど絶滅したりしが、維新開國と共に再び盛となり、教會堂、講義所千百ニヶ所、教師外國人四百十八人、本邦人千十五人に及び、漸次青年學生間に、信徒を増加する風あり、其宗派の如き新舊兩派の中に更に細に分る。

天主教、ハリストス正教、日本基督教會、組合教會、  
 日本聖公會、浸禮教會、美以監督教會、南美以教會、  
 日本美以教會、美普教會、布美教會、福音教會、  
 福音路帖、同盟教會、同胞教會、普及福音教會、  
 宇宙神教、友會、基督教會、クリスチャン、  
 ヘブチバ教會、セヴンスデー、アドヴェンチスト、救世軍、  
 日本聖公會、その勢力最大に、日本基督教會、天主教之に次ぐ、信徒の多きは、東京、長崎、神奈川、兵庫、宮城、静岡等なり、静岡は佛教、基督教共に盛なるは注目に値あり。

政治

第四章 政治

國體及政體

國家とは、土地と人民とを基礎として、唯一の主權を以て之を統治する團體なり、而してその主權が、何人の手に存するかによりて國體の區別を生ず、一人の君主が、主權を

掌握するを君主國體と云ひ、人民の集合團體が、主權を掌握し、特定の人これに君臨するも、人民の代理者として選出せらるゝを民主國體となす。我國は、純粹なる君主國體にして、主權は皇位に存す、皇位は萬世に亘りて變ずることなし、主權を運用する方法、形式により政體の區別を生ず、主權の運用を立法・行政・司法の機關に分掌せしめて政治を行ふものを立憲政體と云ひ、統治者の随意に政治を行ひ、各分掌機關の設定を要件とせざるものを專制政體とす、我國は憲法發布以來、立憲政體の政治を採用したり。

帝國議會  
貴族院

帝國議會 天皇は、帝國議會の協賛を以て、立法權を行ふ。帝國議會の組織は、貴族院及び衆議院よりなる、二院協同して始めて協賛の職務を行ふものなり、貴族院は、左の人々を以て組織す。

- 一、當然議員(一)皇族の男子にして、成年に達したる者。終身議員なり。(二)公侯爵、滿二十五歳に達したる者、終身議員なり。
- 二、互選議員、伯子男爵、滿二十五歳に達し、同爵の互選により七ヶ年の任期を以て議員となる議員數は伯子男爵各總數の五分の一を超過するを得ず。
- 三、勅選議員、(一)國家に勳勞あり、又は學識ある滿三十歳以上の男子にして、特に勅選せられ

衆議院

たるもの、終身議員なり、(二)各府縣に於て、滿三十歳以上の男子にして、多額の直接國税を納むるもの、十五人中より一人を互選して、勅任せられたるもの、任期七年。  
衆議院は、全國九十七個の選舉區より選出せられたる議員三百七十九人を以て組織す、帝國臣民の男子にして、年齢三十歳以上のもの、被選の資格を有す、選舉人資格は、年齢滿二十五歳以上の男子にして、選舉人名簿調製の期日以前一ヶ年以上、其選舉區内に住みて、地租十圓以上、又は滿二年以上地租以外の直接國税十圓以上、若くは地租と其他の直接國税とを通じて十圓以上を納め、後、引續きて納むる者たるべし。

裁判所

**裁判所** 天皇の名に於て、司法權を執行するところなり、裁判所には大審院、控訴院、地方裁判所、區裁判所の階級あり、區裁判所は簡易の民事、刑事を裁判し、單獨判事之を行ひ、地方裁判所は普通の民事、刑事を裁判し、三人の判事の合議を以て行動す。控訴院、大審院は、下級裁判所の裁判に對する上訴を裁判す。控訴院は五人、大審院は七人の判事の合議裁判なり。全國裁判所々在地次の如し。

大審院 控訴院 地方裁判所

函館 函館、札幌、根室。  
宮城 青森、盛岡、仙臺、福島、山形、秋田。

東京

東京 東京、横濱、千葉、水戸、宇都宮、浦和、前橋、静岡、甲府、長野、新潟。  
名古屋 名古屋、安濃津、岐阜、福井、石川、富山。  
大坂 大津、京都、大阪、奈良、神戸、和歌山。  
廣島 島取、松江、山口、廣島、岡山、徳島、高松、高知、松山。  
長崎 長崎、佐賀、福岡、大分、熊本、鹿兒島、宮崎、那覇。

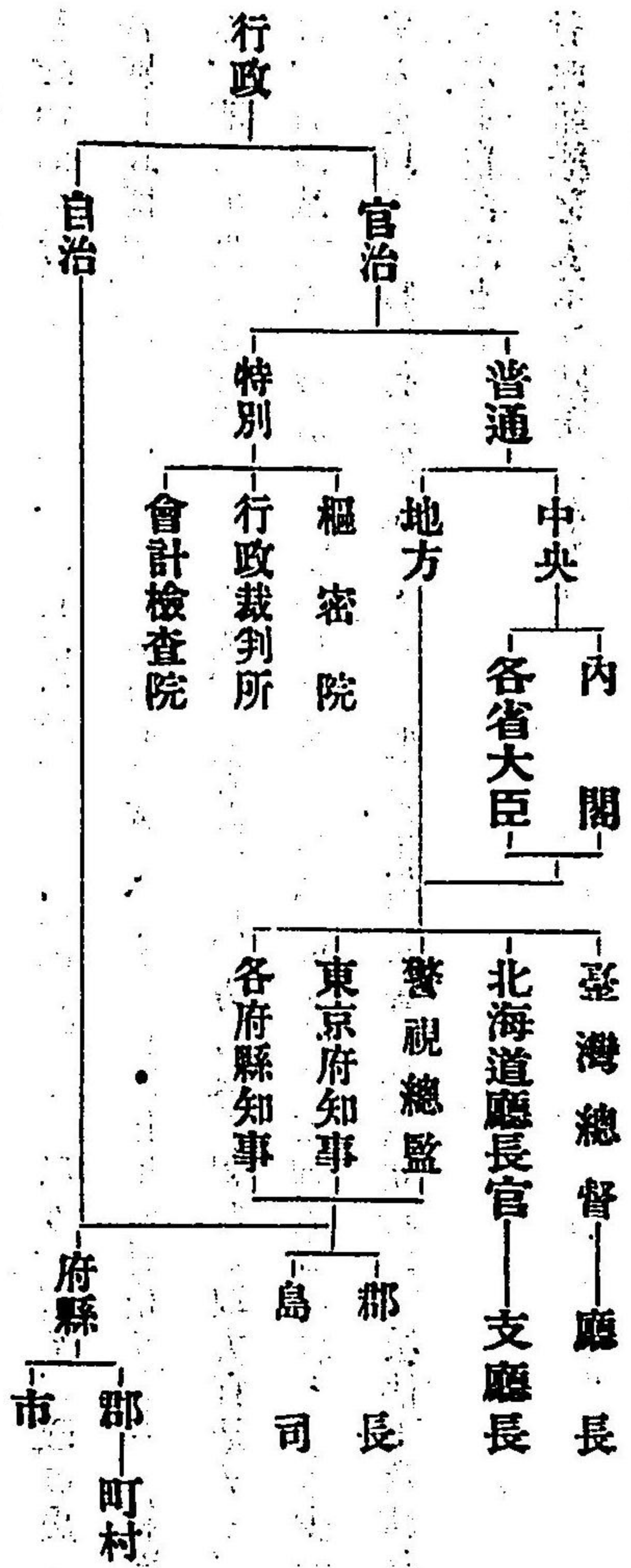
臺灣は、内地と司法制度を異にし、臺北、臺中、臺南の三地方法院あり、臺北に覆審法院ありて各地方法院の裁判の上訴を覆審す。

行政官廳

**行政官廳** 行政とは、天皇が各省大臣、其他の行政機關によりて行はる、主權の作用を云ふ、

行政組織を分て二とす、一は官治行政、二は自治行政これなり、官治行政は更に普通行政機關と特別行政機關との二に分つ。普通行政機關も、その行政作用の行使せらるる範圍により二分せらる、即ち中央行政機關たる、内閣、各省大臣と地方行政機關たる地方官是なり、特別行政機關とは、行政裁判所、會計検査院の如きものにて、樞密院は諮詢機關なれど、多少の行政事務を處理するを以て、特別行政機關に入る、府縣郡市町村等の公共團體は、公法上及び私法上の法人にして之を自治體とす。

行政組織を表示せば次の如し。



財政

第五章 財政

**帝國の財政** は年々膨脹し來り、今や臨時事件費の爲に巨億の資を投じ、國民の負擔、頗重きを加ふるに至れり、三十八年度の總豫算を見るに、軍事費の七億七千萬圓の外に、歳入總額三億四百餘萬圓、歳出總額二億千餘萬圓に達す、歳入の主要なるものは租税、印紙收入、官業及官有財産收入、雜收入、預金利子繰入等にして、地租六千三百六十四萬餘圓を第一とし、酒税六千五百三十三萬餘圓、關稅二千百餘萬圓、郵便電信收入二千五百七十一萬餘圓等主なる財源なり。歳出經常部は、大藏省所管最も大に、六千萬圓に上り、陸軍省之に次ぐ、三千九百萬圓、海軍省

逓信省共に二千萬圓臺、司法省は一千萬圓、内務省九百三十萬圓、文部省四百六十萬圓、農商務省、外務省共に二百萬圓臺にして最も少し、皇室費三百萬圓は、既定の歳出とす。

歳入	三,440,000,000	酒税	6,364,000
歳出	2,100,000,000	郵便收入	2,571,000
地租	6,364,000	外務省	2,000,000
關稅	2,000,000	大藏省	2,730,000
皇室費	3,000,000	海軍省	3,900,000
内務省	9,300,000	文部省	4,600,000
陸軍省	9,300,000	逓信省	2,000,000
司法省	1,000,000	臨時部	4,600,000
農商務省	4,600,000	農商務省	4,600,000
外務省	2,000,000	内務省	9,300,000
大藏省	2,730,000	海軍省	3,900,000
陸軍省	9,300,000	司法省	1,000,000
文部省	4,600,000	農商務省	4,600,000
逓信省	2,000,000		

府縣税、市税、町村税の如き地方税は年を追つて増加し來り、一方に於ては、地方債増加し、益益國民の負擔を大ならしむ。  
明治三十五年度の調査、府縣收入、支出左の如し。



公債

府 縣 收入	2,300,000	支出	2,800,000
市 收入	2,500,000	支出	3,300,000
町 村 收入	3,300,000	支出	3,500,000
北海道 區町村 收入	1,600,000	支出	1,500,000

府縣税は、地租割戸數割、營業税を主なるものとし、土木費は支出の魁にして教育費之に次ぐ。市町村税は、直接國稅、府縣税に附加課税するものを主とし、支出は教育費第一に居る。北海道區町村の歳入は、戸別割、雜收入を主とし、教育費は支出中の首位を占む。

**公債** 公債は公共の需要に對する臨時の信用手段にして、其目的より見れば、整理的及計畫的手段となり、その結果より見れば經濟學上に於ける不生産的、又は生産的の投資に該當するものなり、我國は明治三年、九分利付外國舊公債、四百八十八萬圓を倫敦に募集せし以來、内外に於て各種の公債を募集し、三十七年度首に於て左の額に達せり。

各種公債現在高 三十七年度首に於ける現況左の如し

舊 公 債	2,500,000	金 祿 公 債	2,500,000
海 軍 公 債	8,200,000	整 理 公 債	2,500,000
鐵 道 公 債	2,800,000	軍 事 公 債	2,500,000

北海道鐵道公債	2,500,000	事業公債	2,500,000
臺灣事業公債	2,500,000	紙幣銷却借入	2,500,000
合 計	2,500,000		

三十七年以後に於て、日露戰爭に關し、多額の軍費を要し、數回の内外債を募れり。

第一回内債	1,000,000圓
第二回内債	800,000圓
第三回内債	1,000,000圓
第一回外債	98,720,000(英貨一千萬ポンド)
發行額	
第二回外債	117,156,000
第四回内債	1,000,000圓
第三回外債	292,890,000
第五回内債	1,000,000圓

日露開戦後、新國債内債、四億八千萬圓、外債五億七百萬圓。以上は國債なるが、地方債も、亦近年著しく増加し、六千七百萬圓に及ぶ、大阪の二千百萬圓を

第一とし、東京の七百萬圓、長崎の四百萬圓之に次ぐ、その他、兵庫、神奈川、愛知等、債務の多き縣とす。

地方債

總計	七,三〇〇,〇〇〇	大阪	三,八〇〇,〇〇〇
東京	七,三〇〇,〇〇〇	長崎	四,〇〇〇,〇〇〇

我國の富

我國の富の概算は、百十九億圓(明治三十年の調査には百十八億〇六百萬圓なり)にして之を歐米諸國に比するときは、頗る乏しと云はざるべからず、これ我國土の狹隘と、鐵その他の礦物の富を藏する少なさと、國土の割合に、山脈高く連なり、洪水多くして表土を流ひ去りて農産の富少なさと、開國日淺くして、商工業の發達著しからず、土地の利用、完からざるによる。一例を云は、獨逸の山林は一丁歩十五圓の收益あり、山林と云は、製紙業を聯想せしむ、我は薪草を産するに止まり、一丁歩二十三錢の收益あるのみ、その他概かくの如し、幸にして天與の好位置を保ち、特に世界有数の多魚地なれば、將來水産の方面に於て大に富の増加を得るなるべし。左に各國の富の比較表を擧げん、(近頃日本銀行の調査するところによれば百二十七億に及ぶといふ今は舊調査に従ふ)

日本	百十九億圓	一
西班牙	二百三十八億圓	二倍弱
伊太利	三百十六億圓	三倍強
奧地利	四百六十二億六千圓	四倍強

露亞	六百十六億四千四百萬圓	五倍強
獨逸	七百七十二億四千四百萬圓	六倍強
佛蘭西	九百八十億圓	八倍強
英吉利	千八百八十億六百萬圓	十倍
米合衆國	千六百三十五億圓	十四倍弱

富の要素は土地、勞力、資本なり、我の土地は狹隘なり、資本は寡少なり、この二方面の發展を謀ると共に、大に勞力の經濟的使用をなさざるべからず、有用なる勞力を増大するは、我國目前の急務なり。

各種生業人頭比較

米	五三	農	三二	工	一五	商
英	一九	農	六八	工	一三	商
佛	五四	農	三〇	工	一六	商
獨逸	四二	農	四五	工	一三	商
日本	七九	農	七	工	一四	商

貯金

貯金 我國民は、勤儉貯蓄の精神に乏しきは、識者の憂ふる所、世界中最下位にあり、世界の諸國民中、米國民の貯金額は、六十億圓にして、最も多く、獨逸之に次ぎ、四十五億四千八百萬圓は其次にして九億九千九百五十四萬圓なり、貯金者一人の平均額は、同じく米國最も多く、八百三十六圓、遙に之に劣りて之に次ぐは加奈陀五百七十六圓、次に匈牙利五百二圓、其次は獨



第六師團		第五師團		第四師團		第三師團		第二師團		第一師團	
久留米	宮崎	鹿島	熊本	尾道	京都	函館	函館	旭川	旭川	旭川	旭川
久留米	宮崎	鹿島	熊本	尾道	京都	函館	函館	旭川	旭川	旭川	旭川
久留米	宮崎	鹿島	熊本	尾道	京都	函館	函館	旭川	旭川	旭川	旭川

師團各兵科の所在地は次の表の如し

管師	管師	管師	管師	管師	管師	管師	管師	管師	管師	管師	管師
第十師團	第九師團	第八師團	第七師團	第六師團	第五師團	第四師團	第三師團	第二師團	第一師團	第一師團	第一師團
神戶	福岡	鹿島	熊本	尾道	京都	函館	函館	旭川	旭川	旭川	旭川
神戶	福岡	鹿島	熊本	尾道	京都	函館	函館	旭川	旭川	旭川	旭川

大日本陸軍各師團配備表	
步兵第一旅團(東京)	野戰砲兵第一旅團(東京)
步兵第二旅團(同)	野戰砲兵第二旅團(東京)
步兵第三旅團(同)	野戰砲兵第三旅團(東京)
步兵第四旅團(同)	野戰砲兵第四旅團(東京)
步兵第五旅團(同)	野戰砲兵第五旅團(東京)
步兵第六旅團(同)	野戰砲兵第六旅團(東京)
步兵第七旅團(同)	野戰砲兵第七旅團(東京)
步兵第八旅團(同)	野戰砲兵第八旅團(東京)
步兵第九旅團(同)	野戰砲兵第九旅團(東京)
步兵第十旅團(同)	野戰砲兵第十旅團(東京)
步兵第十一旅團(同)	野戰砲兵第十一旅團(東京)
步兵第十二旅團(同)	野戰砲兵第十二旅團(東京)
步兵第十三旅團(同)	野戰砲兵第十三旅團(東京)
步兵第十四旅團(同)	野戰砲兵第十四旅團(東京)
步兵第十五旅團(同)	野戰砲兵第十五旅團(東京)

<p>師第一 (京東) 團</p> <p>步兵第二旅團(東京) 騎兵第二旅團(習志野) 野戰砲兵第二旅團(國府臺)</p> <p>步兵第二旅團(東京) 騎兵第二旅團(習志野) 野戰砲兵第二旅團(國府臺) 工兵第一大隊(東京) 野戰砲兵第一旅團(習志野) 騎兵第一旅團(習志野) 步兵第一旅團(東京)</p>	<p>師第二 (臺仙) 團</p> <p>步兵第三旅團(仙臺) 步兵第十五旅團(新發田)</p> <p>步兵第三旅團(仙臺) 步兵第十五旅團(新發田) 工兵第二大隊(仙臺) 野戰砲兵第二旅團(仙臺) 騎兵第二旅團(仙臺) 步兵第二旅團(仙臺)</p>	<p>師第三 (屋古名) 團</p> <p>步兵第五旅團(名古屋) 步兵第十七旅團(豊橋)</p> <p>步兵第五旅團(名古屋) 步兵第十七旅團(豊橋) 工兵第三大隊(名古屋) 野戰砲兵第三旅團(名古屋) 騎兵第三旅團(名古屋) 步兵第三旅團(名古屋)</p>	<p>師第四 (阪大) 團</p> <p>步兵第七旅團(大阪) 步兵第十九旅團(伏見)</p> <p>步兵第七旅團(大阪) 步兵第十九旅團(伏見) 工兵第四大隊(大阪) 野戰砲兵第四旅團(大阪) 騎兵第四旅團(大阪) 步兵第四旅團(大阪)</p>
<p>師第五 (島廣) 團</p> <p>步兵第九旅團(廣島) 步兵第二十一旅團(山口)</p> <p>步兵第九旅團(廣島) 步兵第二十一旅團(山口) 工兵第五大隊(廣島) 野戰砲兵第五旅團(廣島) 騎兵第五旅團(廣島) 步兵第五旅團(廣島)</p>	<p>師第六 (本熊) 團</p> <p>步兵第十一旅團(熊本) 步兵第二十四旅團(久留米)</p> <p>步兵第十一旅團(熊本) 步兵第二十四旅團(久留米) 工兵第六大隊(熊本) 野戰砲兵第六旅團(熊本) 騎兵第六旅團(熊本) 步兵第六旅團(熊本)</p>	<p>師第七 (川上) 團</p> <p>步兵第十三旅團(上川) 步兵第十四旅團(上川)</p> <p>步兵第十三旅團(上川) 步兵第十四旅團(上川) 工兵第七大隊(上川) 野戰砲兵第七旅團(上川) 騎兵第七旅團(上川) 步兵第七旅團(上川)</p>	<p>師第八 (前弘) 團</p> <p>步兵第四旅團(弘前) 步兵第十六旅團(秋田)</p> <p>步兵第四旅團(弘前) 步兵第十六旅團(秋田) 工兵第八大隊(弘前) 野戰砲兵第八旅團(弘前) 騎兵第八旅團(弘前) 步兵第八旅團(弘前)</p>

<p>師第九 (澤金) 團</p> <p>步兵第六旅團(金澤) 步兵第十八旅團(敦賀)</p> <p>步兵第六旅團(金澤) 步兵第十八旅團(敦賀) 工兵第九大隊(金澤) 野戰砲兵第九旅團(金澤) 騎兵第九旅團(金澤) 步兵第九旅團(金澤)</p>	<p>師第十 (路姫) 團</p> <p>步兵第八旅團(姫路) 步兵第二十旅團(福知山)</p> <p>步兵第八旅團(姫路) 步兵第二十旅團(福知山) 工兵第十大隊(姫路) 野戰砲兵第十旅團(姫路) 騎兵第十旅團(姫路) 步兵第十旅團(姫路)</p>
<p>師第十 (龜丸) 團</p> <p>步兵第十旅團(松山) 步兵第二十二旅團(普通寺)</p> <p>步兵第十旅團(松山) 步兵第二十二旅團(普通寺) 工兵第十一大隊(松山) 野戰砲兵第十一旅團(松山) 騎兵第十一旅團(松山) 步兵第十一旅團(松山)</p>	<p>師第十 (倉小) 團</p> <p>步兵第十二旅團(小倉) 步兵第二十三旅團(大村)</p> <p>步兵第十二旅團(小倉) 步兵第二十三旅團(大村) 工兵第十二大隊(小倉) 野戰砲兵第十二旅團(小倉) 騎兵第十二旅團(小倉) 步兵第十二旅團(小倉)</p>

海軍は全國を四箇の海軍區に分つ。

- 第一、横須賀鎮守府。羽後、陸奥國界より本土東海岸、南海岸に沿ひ、紀伊南牟婁、東牟婁郡界に至るの海岸、海面及、小笠原島の海面、並に北海道の海岸海面。
- 第二、吳鎮守府。紀伊國南牟婁、東牟婁郡界より長門國、大津豊浦郡界に至り、又筑前遠賀宗像郡界より九州東海岸に沿ひ日向大隅國界に至るの海岸海面及、四國の海岸海面並に内海。
- 第三、佐世保鎮守府。筑前遠賀、宗像郡界より九州西海岸及同南海岸に沿ひ、日向大隅國界に至るの海岸海面及、小笠原島の海面、並に北海道の海岸海面。





第七章 外交

我國は、徳川家光、國を鎖してより、僅に支那、和蘭二國の船舶の來航するに止りしが、嘉永六年、アメリカ合衆國大統領フィルモア、水師提督ペルリを遣して和親を求めし以來、國を開き列國と和親條約を締結せしこと、二十三國の多きに及び、條約國名、條約年月日、明治三十六年五月調は左の如し。

- 亞米利加 和親條約 嘉永七年三月三日調印  
安政二年正月五日批准交換
- 合衆國 改正通商航海條約 明治二十七年十二月二十二日調印  
同二十八年三月二十二日批准交換
- 大不列顛 改正通商航海條約 嘉永七年八月二十三日調印  
安政二年八月二十九日批准交換
- 露西亞國 通好條約 明治二十七年七月十六日調印  
同年八月二十五日批准交換
- 和蘭國 改正通商航海條約 安政元年十二月二十一日調印  
同三年十一月十日批准交換
- 佛蘭西國 修正通商航海條約 安政二年十二月二十三日調印  
同四年八月二十九日批准交換
- 獨逸國 修正通商航海條約 同三十年八月八日調印  
同三十年八月二十日批准交換
- 葡萄牙國 修正通商航海條約 同三十年八月八日調印  
同三十年八月二十日批准交換
- 佛蘭西國 修正通商航海條約 同三十年八月八日調印  
同三十年八月二十日批准交換
- 獨逸國 修正通商航海條約 同三十年八月八日調印  
同三十年八月二十日批准交換
- 白耳義國 修正通商航海條約 同三十年八月八日調印  
同三十年八月二十日批准交換
- 伊太利國 修正通商航海條約 同三十年八月八日調印  
同三十年八月二十日批准交換
- 丁抹國 修正通商航海條約 同三十年八月八日調印  
同三十年八月二十日批准交換

- 佛蘭西國 修正通商航海條約 安政五年九月三日調印  
同六年八月廿六日批准交換
- 獨逸國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 葡萄牙國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 佛蘭西國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 獨逸國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 白耳義國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 伊太利國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 丁抹國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 佛蘭西國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 獨逸國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 葡萄牙國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 佛蘭西國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 獨逸國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 白耳義國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 伊太利國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換
- 丁抹國 修正通商航海條約 同三十一年三月十六日批准交換



- 丁抹國 改正通商航海條約 明治二十八年十月十九日調印  
同二十九年五月六日批准交換
- 瑞典 修正通商航海條約 明治元年九月二十七日調印  
同三年十一月七日批准交換
- 西班牙國 修正通商航海條約 明治三十年五月二日調印  
同三十年五月一日批准交換
- 特別通商條約 明治元年九月二十八日調印  
同三年三月八日批准交換
- 奧地利 修正通商航海條約 明治三十年一月二日調印  
同九年九月九日批准交換
- 洪牙利國 修正通商航海條約 明治卅三年三月廿八日調印  
同卅四年三月三十日批准交換
- 秘露國 修正通商航海條約 明治卅二年九月十四日調印  
同卅四年十二月三日批准交換
- 韓國 修正通商航海條約 明治卅一年十二月五日調印  
同卅一年十二月五日批准交換
- 暹羅國 修正通商航海條約 明治卅九年二月廿六日調印  
同卅九年三月二十二日批准交換
- 墨西哥國 修正通商航海條約 明治卅九年九月二十六日調印  
同卅一年一月二十三日批准交換
- 暹羅國 修正通商航海條約 明治卅二年二月廿五日調印  
同年五月二十二日批准交換
- 墨西哥國 修正通商航海條約 明治卅二年六月六日批准交換  
同廿二年六月六日批准交換
- 墨西哥國 修正通商航海條約 明治卅四年七月二十九日調印  
同六年三月九日批准交換

○清國 講和條約 明治二十八年四月十七日調印  
同年五月八日批准交換

○伯刺西爾合衆國 修正通商航海條約 明治二十九年七月二十一日調印  
同年十月二十日批准交換

○亞爾然丁共和國 修正通商航海條約 明治二十八年十一月五日調印  
同三十年二月二日批准交換

○希臘國 修正通商航海條約 明治三十四年九月十八日批准交換  
同三十四年九月十八日批准交換

○希臘國 修正通商航海條約 明治三十二年六月一日調印  
同年九月二十一日批准交換

○果剛獨立國 修正通商航海條約 明治三十三年一月十七日調印  
同年七月九日批准交換

外交事務を掌る外交機關に、外交官、領事官あり、外交官は國家を代表し、領事官は、國家の經濟的方面の外國に發達せんことを掌る。

特命全權大使 本國を代表するのみならず、本國君主を代表す

特命全權公使 共に本國を代表する政治上の機關

辦理公使 たり、その階級に相違あるのみ

公使館一等乃至三等書記官

外交官補、書記生

總領事 代理公使として公使の職務を行ふを得、他の領事を監督し、廣き管轄區域を有す

領事官

領事官補 本國の經濟上の利益を圖らんため外國に駐在する官吏

日本公使館所在地は、米國華盛頓、英國倫敦、露國聖彼得堡(交戦引上中)、瑞典那威國ストックホルム、和蘭國海牙(兼丁)、佛國巴里、獨國伯林、白耳義國ブラッセル、伊國羅馬、埃國維也那(兼理)、韓國京城、暹羅國盤谷、清國北京、西班牙國馬德里(兼理)、以上特命全權公使駐劄(英、米、佛、獨に大使館を置く) 14  
 墨西哥國メキシコ(兼理)、伯刺西爾國リオ、ジャチイロ(兼亞爾)以上二國辨理公使駐劄、

總領事館

- 一、米國紐育。管轄區域 メーン。ニユー、ハムプシヤイア。ヴァルモン。マサチユーセツ。ロードアイランド。コネクチカット。ニユーヨーク。ニユー、ジアルシー。ペンシルヴァニア。メリーランド。ヴァージニヤ。ウエスト、ヴァージニヤ。ノース、カロリナ。サウス、カロリナ。ジョージア。フロリダ。及デストリクト、オブ、コロンビヤ。
- 二、英國倫敦。管轄區域 大貌列顛國
- 三、英領モント、リヨール。管轄區域 英領コロンビヤ州及西北テリトリーを除き、その他の各州及各テリトリー但加奈陀殖民地政府に關係する事項については全英領加奈陀を管轄す。
- 四、濠洲シドニー。管轄區域 ニューサウスウェールズ州。クスマニヤ州。ニージーランド州。ヅキクトリア州。サウスオーストラリア州中サウスオーストラリア州。ウエストオーストラリア州中グラスコイ。サウスウエスト。ニュークラ。イースタン、フージー島但濠洲聯邦政府に關係する事項に付ては全濠洲を管轄す。

五、米領ホル、管轄區域 サンドウチ群島。

六、清國天津。管轄區域 直隸省、山西省。

七、清國上海。(南京に分) 管轄區域 江蘇省中松江府、太倉府、通州、鎮江府、淮安府、徐州府、海州、揚州府、江寧府、安徽省、浙江省中寧波府、臺州府、紹興府、温州府、處州府。

領事館 所在地 管轄區域

- 一、米國桑港。カリフォルニヤ。コセラド。ユータ。ネヴァダの四州及ニユーメキシコ、アリゾナの二テリトリー。
- 二、米國シヤトル。(ポートランドに) (分館あり) モンタナ。ヨージン。アイダホ。ワシントン。オレゴン及アラスカの六州。
- 三、米國シカゴ。インディアナ、イリノイス。ミシガン。ウスケンシン。ミネソタ。イラワ。ミソソリ。ケンタッキー。ノースダコタ。サウスダコタ。チブラスカ。カンサス。オハイオ。テンネシ。アラバマ。ミスシッピ。アルカンサス。ルイジアナ。テキサスの十九州オクラホマ。インヂアンテリトリーの二テリトリー。
- 四、英領晚香坡。英領コロンビヤ州及西北テリトリー。

- 五、英領孟買。英領印度、錫蘭島、（西印度洋にあり）
- 六、英領タウンズウィック。クイーンズランド州。サウスオーストラリア州中ノーザン、テリトリー。  
ウエストオーストラリア州中キンバリー、ノース、ウエスト。英領ニューギニア。兼轄。獨領  
ニューギニア、アリアナス群島（グアム島を除く）カロリナス群島、パパラウ群島。（トモ）
- 七、英領香港、香港政廳管轄地、兼轄澳門政廳管轄地、廣東省中廣州府、南雄府、韶州府、連州、  
肇慶府、羅定府、高州府、雷州、
- 八、英領新嘉坡。新嘉坡島。彼南島。フビンス、オプ、マラッカ。（マラッカ海峡にあり）
- 九、露領哥爾薩港。（開戦中閉館）管轄區域 薩哈連島。
- 十、佛國里昂。佛蘭西國。
- 十一、白耳義國アンヅェルス。管轄區域 白耳義國。
- 十二、米領マニラ。フガピン群島。マリアナス群島。グアム島。（マリアナ群島にあり）
- 十三、韓國京城。京畿道東部、江原道西部、忠清道東部、（京畿道東部、忠清道東部、江原道西部、忠清道東部、
- 十四、韓國釜山。慶尙道東北部、江原道南部、
- 十五、韓國馬山。慶尙道西南部、
- 十六、韓國九山（城津に分）咸鏡道、江原道東北部、（城津に分）

城津分館  
は當時引  
上中

- 十七、韓國木浦。全羅道、忠清道南部（群山に分）
- 十八、韓國仁川。京畿道西部、黃海道南部、忠清道西北部、（京畿道西部、忠清道西北部、
- 十九、韓國鎮南浦（平壤に分）。平安道、黃海道北部、（平壤に分）
- 二十、清國福州。福建省中福州府、延平府、建寧府、邵武府、福寧府、（福建省中福州府、延平府、建寧府、邵武府、福寧府、
- 廿一、清國芝罘。山東省、（山東省、
- 廿二、清國重慶。四川省、陝西省、甘肅省、貴州省、雲南省、（四川省、陝西省、甘肅省、貴州省、雲南省、
- 廿三、清國漢口。湖北省中漢陽府、武昌府、德安府、黃州府、河南省中彰德府、衛輝府、開封府、  
陳州府、許州、歸德府、南陽府、汝寧府、先州、江西省中九江府、南昌府、饒州府、廣信府、  
南康府、建昌府、撫州府、臨江府、瑞州府、袁州府、（湖北省中漢陽府、武昌府、德安府、黃州府、河南省中彰德府、衛輝府、開封府、
- 廿四、清國杭州。浙江省中杭州府、嘉興府、湖州府、金華府、衢州府、嚴州府、  
湖南省中岳州府、長沙府、寶慶府、衡州府、桂陽府、郴州、永州府、（浙江省中杭州府、嘉興府、湖州府、金華府、衢州府、嚴州府、
- 廿五、清國牛莊。（引揚中）盛京省、吉林省、黑龍江省、（引揚中）
- 廿六、清國廈門。福建省中興化府、泉州府、永春府、汀州府、漳州府、龍巖州、  
廣東省中潮州府、嘉應府、惠州府、（福建省中興化府、泉州府、永春府、汀州府、漳州府、龍巖州、
- 江西省中吉安府、南安府、贛州、寧都州、（江西省中吉安府、南安府、贛州、寧都州、

廿七、清國沙市。湖北省中荊州府、荊門州、襄陽府、安陸府、施南府、宜昌府、鄖陽府、湖南省、中澧州、常德府、永順府、辰州府、永綏廳、乾州廳、鳳凰廳、沅州府、晃州廳、靖州、河南省、中懷慶府、河南府、陝州、汝州、

廿八、清國蘇州。江蘇省中蘇州府、常州府、

廿九、露國オデッサ。(開戦中閉館) 歐羅巴露西亞。

貿易事務官 露領浦潮斯德(開戦中閉館)

名譽領事 外國人にして帝國の依頼を受け領事の職務を行ふもの。

- 米國 ニュー、オイヤンス、 米國フキラデルフヤ
- 英國 グラスゴ、 英國ミッドルズブラー
- 露國 聖彼得堡、 和蘭國安斯特提
- 佛國 ボルドー、 獨國伯林
- 白耳義國 ブリニッセル、 伊國未蘭
- 伊國 ヌシメ、 伊國パレルモ
- 伊國 ナポリ、 埃國維也納
- 秘露國、 露州メルボルン
- 米國 モビル
- 伯國 ベシム
- 伊國 ジエノア
- 埃國 トリエリスト
- 露州 ニューゼーランド

- 南濠洲 アデレード 瑞西國 チューリク
- 佛國 ル、ハーブ 和蘭國 ロッテルダム
- 丁抹國 コーペンハーゲン

本邦に公使を駐劄せしむる諸國、及び領事駐在所を左に掲ぐ。

亞米利加合衆國(大使) 横濱、神戸、長崎、淡水、

大不列顛國及愛蘭土國(大使) 横濱、神戸、長崎、淡水、臺南、下の關、函館、

露西亞國(引揚中) 横濱、長崎、函館、神戸、

- 和蘭國 横濱、神戸、長崎(領事) 淡水、安平、
- 佛國 西國(大使) 横濱、神戸及大阪、長崎、臺灣、
- 獨逸國(大使) 横濱、兵庫及大阪、長崎、臺灣、
- 白耳義國 東京、横濱、神戸、大阪、長崎、
- 伊太利國 横濱、神戸、
- 西班牙國 横濱、長崎及神戸(佛國領事代理) 淡水(英國領事代理)
- 埃地利匈牙利國 横濱、
- 韓國 ○

瑞領事館  
瑞領事館  
瑞領事館  
瑞領事館

暹羅國 ○ 長崎、横濱兼東京、神戸兼大坂、  
 清國 横濱、神戸、  
 伯刺西爾國 横濱、神戸及大坂、長崎、  
 葡荷牙國 (伊太利公使館内) 横濱、神戸及大坂、長崎、  
 瑞典、諾威、丁抹國 (和蘭公使館内) 瑞典諾威國、横濱、神戸、長崎、丁抹國、横濱、神戸、長崎、  
 墨西哥國 神戸兼横濱、  
 領事館のみを有するものと、その所在地、  
 瑞西國 横濱、  
 秘露國 横濱、神戸、  
 智利國 横濱、  
 列國との和親は年を追ふて厚さを加へ、特に英米二國との親交深く、明治三十八年九月發表せられたる日英同盟條約は、東亞並に印度に關し、三國攻守同盟をなすべきを約せり、

### 第八章 生業産物

我が國は氣候温暖にして、雨量豊多なると、土地の肥沃にして、人口の稠密なるとは、天産物豊饒にして、各種の生業行はる、今之を分ちて農業、林業、漁業、鑛業、工業、商業の六とす。

#### 第一節 農業

我が國は古來「瑞穂國」と稱し、農を以て國の本とし、世々之を奨勵したるを以て能く進歩し、從て各種の穀産に富り、故に農民の數は實に二千二百萬人、(臺灣を除く)全國人口五割を占む、然れども耕地は約五百二十萬町(内田地二百八十萬、畑地二百四十萬町)にして、其産物も悉く國民の消費するに過ぎず、農産物中最も産出の多きは、米にして、平均年産額四千三百十四萬五千石(三十一、三十二年より三十三、三十四年まで三ヶ年平均)に上り、臺灣は五百三十五萬七千石(三十三、三十四年より三十五、三十六年まで三ヶ年平均)を産す、尤も産額の多き縣は新潟にして、二百三十七萬石、次は兵庫二百十八萬石、福岡二百萬石に上り、愛知(一、七)千葉(一、六)富山(一、五)山形(一、四)熊本(一、三)なり

米作の多少は灌水の如何により、灌水是土地の高低に關するを以て、一府縣の産額のみを以て米作の適否を判す可らず、是れ府縣には大小の別あるを以てなり、要するに米作は低平の沖積層に適し、高原地には適せず、即濃尾、關東、畿内等の諸平原は最も米作に適し、濃尾平原は二方に里に付七千石以上を産し、畿内平原は五千石乃至六千石を産し、瀬戸内海岸、及筑紫平原等は三千



り、例へば古衣服の材料たりし、<sup>カザサ</sup>野麻の類、又近年外國産の染料に壓倒せられたる紅花、葉藍の如きは是れなり、或は棉、茶、煙草、甘藷、の如く中世外國より移植し、全國に普及せるものあり、されど米作が全國主要の農産たることは、今も古に異ならず、我が國は他の東洋諸國と同じく、早くより米食を以て主とし、稻田の經營は農業の中心たり、されば大化大寶の土地制度に各人民に班らたりし口分田を始めとし、位田、職田、功田、賜田、神田、寺田等に至るまで、皆水田を以て給與し、畑は此以外に宅地に附隨して有るに従ひて之を分與し、普通六年一班の例に由らざりしが如し、其後人口の増加益々多く、米産の積不足を告ぐるに及び、次第に麥、蕎麥等の雜穀を栽培し、畑地は漸く重ぜらるゝに至れり、封建の世に於ても、所謂知行の實高、石高は尙皆水田を單位として、計算せられ、畑地は之に比して大に石盛(公定收穫高)の率を減ぜられしなり、而して稻田は他の農用地と異り、特に灌漑の必要なること等の理由よりして、常に別種の經營を受けざるべからざるを以て、従て耕地の區劃形狀を特別にし、現今所謂自由農産の世となりて、市場の状況を豫察して、往々作物の取捨選擇を爲すべき時に當り、種々なる不便を以て農の生産を制限するの傾あり、然るに一方には米の國內の需用は近來益増加せんとす、是は他に人口の増加のみに因由するに非らず、各人の米を食ふ割合も亦昔より遂に増加せるが爲めなり。

大學の教師エツゲルト博士が、其著『日本土地改良論』に、日本人の平均米消費高は、其食物全量の五三%に當るならんと首ひしは、今より十七八年前の事にして、今は又之よりも遙に増加したるなるべし、米食増加の原因は多くあるも、其主なるものは(一)生活程度の増進、(二)交通機關の改進、(三)市街地人口の増加、(四)麥類市價の騰貴、(五)農兵の制度等なるべし。(猶明治三十四年十一月十五日の官報米消費高の統計参照)上に列舉したる農産物の中に、棉、茶、甘藷、馬鈴薯、煙草の五種は中世以降外國より輸入せられしものなれども、其他は起原概ね甚古し、棉と藍とは明治以降外國産の輸入によりて非常に其生産を減じ、今や將に消滅に近かんとなす、茶も亦印度茶等の競争激甚にして大に其影響を被らんとす、煙草は官專賣制度の結果として、徳川氏の後半期に比すれば、頗る其産額を減じ、茶種の需用も亦昔より大に少く、従て其生産を減ぜり、麥は稍々衰勢を示すと雖、未だ大に減するに至らざるべく、其他の農産物は大抵皆増加の勢あり、殊に桑は生糸の輸出に伴ひて近年大に其耕作面積を増加せり。(法學士柳田國男氏農政學に據る)

**畜産** 我が國は牧畜に適せざるにあらざれども、此の業は未だ發達せず、近時肉食論盛なるに従ひ、漸次牧畜業も發達すべし、畜産中最も重要なものは牛及び馬にして、近年外國の良種を

輸入し、頻に改良を計れり、最近牛の頭數は二百二十七萬五千三百八十頭<sup>(三十五年度)</sup>にして、馬は一百五十一萬五千頭(同上)に上る、牛の最も多きは廣島縣の九萬五千頭、次は岡山縣九萬二千頭にして長崎縣(八九)、兵庫縣(七九)、島根(七三)等も少からず、馬は鹿兒島、熊本何れも十萬頭に上り、次は岩手(九五)、福島(八五)、北海道(七九)、宮崎(七三)等なり。豚は二十一萬三千四百頭、山羊は六萬二千頭あり、豚は沖繩(一〇四、頭)鹿兒島(四〇、)千葉(一〇、)を多しとし、山羊は北海道(四八)、長崎(三、)を多しとす。

此外臺灣には水牛十七萬八千頭<sup>(三十五年度)</sup>、黄牛七萬七千頭、山羊十萬五千頭、豚七十七萬九千頭あり。最近我が國(臺灣を除く)一ヶ年の屠牛數十九萬六千頭にして、數量四千四百六十五萬斤、此價額七百八十萬圓に上り、馬は四萬七千八百頭に、七百二十五萬斤、價額七十萬六千圓なり。

**我が國家畜數の少き所以**

我が國家畜の頭數は、其人口一人に對する割合、西洋諸國に比して甚だ少し、而も明治に至り其數甚だ増加せり、西洋にては上古より畜産は耕作と相須ちて離るべからざるものと考へられたれど、我國にては以前の家畜耕作よりも、人力耕作を以て主とせり、且肥料供給の手段として、又副産物の利用方法としても、殆ど家畜の必要を認めざりしなり。古代の日本に於ても牛馬は共に特別の用途あり。(例へば馬は軍用に、牛は車を牽かしむるため)社會の需用決して無きに非りしも、其飼養は別の方法により、農民の耕作と相須する泰西諸國の如くならざりき、此點は東西の農業上最顯著なる差異にして、延ては今日の農業狀態に大に影響を及せり。

而して、我國從來家畜の少き原因は、第一上古肉を食ひ、皮を衣るの習慣、盛ならざりしことにて、是れ氣候溫和にして他の衣服原料も早くより發見せられ、山食野獸の肉、又は魚介は食用せられ、且植物性の食料多きを以てなり。第二佛教の影響にして此宗教が、熱帯の天竺より起り、殺生を戒め、清淨淡泊の生活を勤めしこと。第三人口の數に比較して、利用せらるゝ土

地の面積狭きに失し、耕作に動物を便役するの機会少かりしこと。第四肥料として尿に人糞の施用せられしことなり。此の第四の原因は或は又前三者の結果なりとも云ふを得べし、兎に角人の排泄物を以て肥培の用に供せしは、往古よりの習慣にして之を以て西洋に於ける家畜飼養の手段に代へ、自然に養力循環の理法に合せしなり。(柳田農學士)

### 肉食の必要

進みて今の世界に爲すあらんとせんが、須らく先づ國民の血液を濃厚ならしめ、筋骨を榮養し、以て頭腦を剛壯ならしめ、次で精力を雄勁ならしめんことを要す、夫の榮色論、將た曹達亞爾加里調和論の如きは、一部人士間に行はると雖ども、人生を裨補するには、主として人體と同質のもの即肉類を要すとは千古に滲りて悖るべからざる法則なり、他の排肉食論の如きは要するに一種好事の說より、人生にして蛋白質、脂肪、糖質を要すとせば、道般を最も多量に食用するもの即肉類を要するは自然の需用なり。

### 戦後産業上の經營

酒匂農學博士熊本縣實業家に講話三十八年四月

今日の時勢は大に變動しつゝあり、所謂空前の大戦争の爲に政局は素より、國家經濟の方面も實に非常なる大變動を來たしつゝあり。依て我々日本國民は、今日に於て、將來如何にして時局の變化に適應しつゝ活動すべきか、如何なる方針を取つて進行すべきかを講究するは時務中の最も緊要なる時勢ならんと信ず。さて此經濟上の變化を觀察するには先づ國公債の狀況を見ること最も捷徑たり、開戦前に於ける本邦國債は總額五億七千五百萬圓なりしに、開戦後新に募集されたる者内債四億八千萬圓。外債五億七百萬圓に達せり、即ち戦争のために今日までに増加したる公債は約十億萬圓の巨額なり。此大負擔が將來我國の財政經濟界に如何なる反響を及ぼす可きや、

借金のことなれば元金利息をも支拂ふ可き義務あるなり。既に明年度に於て支拂ふ可き新公債の元利金は九千三百萬圓、明後年には一億八千萬圓、明後々年には二億七千六百萬圓と云ふが如き年々償却の義務あり。而して現今の財政年計は二億圓なるも、戦後は夫ら新經營のために必ずや多額の費途あること今より熾々たり、尙ほ此戦争の終結が延引して持久の策を講ずるの必要に迫まるにつれ、國債は益々膨大して國民の負擔は愈々以て増加すること自然の勢なり。さて此公債元利を償却する方法には二つあり即内國債は紙幣を以て爲し得べきも外債は悉く正金を以てせざる可からず。此支拂方法の差異は要するに我々が今後の活動方針を決定するの標準とする者なり、斯くて我々が時局の變化に適應しつゝ活進し進歩し行くことは國民の義務たるも、同時に又た國民の希望たり、發展たり。然らば之に對する覺悟は如何、是れ即ち刻下の緊要問題にて、之を解決するには甚だ難事にはあらざれど、只だ實行の一點に至つては舉國大に刻苦黽勉するにあらざるれば容易に其効果を收むる能はず。其解決とは即生産の發達に歸結するか其發達を爲すに就ては自ら二方面あり、第一は外國の輸入品を減少せしむること、第二は輸出品を増加すること即是なり。

農は國の基なりと唱ふる彼の農本主義は、維新以來數年前までは社會に疎んせられたるが、日露戦争のため農本主義が國家生活に付て最も大切なる關係を有する者なることを承認さるゝに至れり



昨年提唱されし國本培養説の如きは最も今日の時宜に適せる事業にして、其計畫が果して遺憾なく實行さるゝ者とせば三四億圓の増産を見ることは確實なり。而して本邦農産物中尤も重要な者は米麥蘭の三者にして、此三者の爲には本邦農業者の大部分が盡力し、土地の大部を使用し、従つて最多額の収入を得つゝあり。此三者は人、金、地積より見て、本邦農産中の骨子たる者なれば、改良に依つて來る可き新利益を單に米麥蘭のみに就て算するも三四億に達する勘定なり。今假に其改良に依て増收を得たりと想像せよ、米麥の増加は忽ち其輸入を防遏するに至らん。今日我々國民が最も憂懼に堪へざるは第一米の輸入なり。其輸入高は多き時は五百萬石にも達し、平均三百萬石即ち三千萬圓の巨額なり、故に其輸入を防ぐことを得ば三千萬圓の利益となる、又た麥の輸入も一千萬圓に達す、殊に昨年來は軍馬の糧食として巨額の輸入を見たり、小麥粉の輸入も又た頗る大なり、之を以て邦人の主食物たる穀物の新生産は直に輸入防遏の現象を來たす者なり。次に本邦生絲の年々輸出高は七八千萬圓の巨額にして、外國貿易に於ける本邦の生命は即ち生絲なり、生絲は斯る重要な物産なるを以て、今後は益々蠶絲業の盛大を計りて、外資輸入の途を開くことの必要は日又日重要を加へつゝあり。

彼の佛國の葡萄酒政略なるものは今日我々が取つて以て大いに學ぶべきの主義ならん彼は普佛戰爭に於て大敗し陸軍は破潰され、二十億圓の賞金を約し都府は蹂躪され國家財政經濟の基礎を一時累卵の危きに瀕し、其損害總額は百五十億圓を見積られ、列國よりは自滅せんかと想像されたるに拘らず、其償金は無事に返済し、剩さへ國運は爾來隆々として伸び、今や富を以て世界に鳴り、富のために却て心配せるが如し、其結果佛國民は金利を以て其生活を始め、寧ろ樂隱居生活の状態となり、大に活氣を減耗せんとしつゝありと、戰敗國の佛國が國民の覺悟如何に依つて右の如き好結果を得たれば、戰勝國たる日本の將來も國民の奮發如何に依りては、望外の發展を見るを得べきは炳然たり、畢竟するに佛國は戰後經營の根本方針を前述の如く外國貿易の發達に取り、盛んに農産物の増産を促して、食糧を自ら給し、商工に依つて外資を攝取せしに外ならざるなり、中就葡萄酒の製造を最も盛んにし、其輸出を獎勵したるの結果、其成績の最も良好なりしより、遂に佛國の此戰後經營法を葡萄酒政略と唱呼せるに至れり、然るに之に反し、戰勝國たる獨逸は如何と云ふに、大勝を以て意氣大に昂り、佛國の葡萄酒を飲用せしこと莫大にして、之が爲め償金として受取るべき正金は、爲替作用にて尠からず相殺されたり。此邊の消息は我々が大に玩味すべきの要點ならんと思考す。抑日本は葡萄酒を産するに適せざるも、幸に佛國の夫れと匹敵する特有なる生絲なる者あり、之を以て本邦は此生絲を以て將來外債償却の重要資源に充つるの方針を取らざる可からず、日本は戰爭に於て、大勝を得たると同様に、佛國が經濟を以て獨逸に勝ちたるが如く、經濟の競争に於ても又た大勝を博せざる可からず、以上は唯だ米麥蘭の

三品に就て立論せしが、此外凡ての産物に向つても、此の方針を以て經營せざる可からず、小なるものは集成して大となるべければ、小なりとて侮るべからず、况や大戰酣なるの今日に當りては尙更ら大小を論ずるの秋にあらざれば、戦後の方針としては百事百物此主義を以て突進し、國本培養の實効を奏し、今將に加重しつゝある重大の義務を首尾克く果すの覺悟が肝要なり。

農事改良の必要に關する大體論は前述の通りであるが、尙二三の細目に就て一言せん、普通農作物中、米と麥とは本邦國民の日常主食物とせる者なるゆへ、此二品だけは已む無くば他の者は排しても是非とも自國に於て産出し、且つ其改良にも多々益々勉勵せざる可からず。聞く所に依れば本縣に於ては稻作改良實行の端緒として粃種子の鹽水撰と植方の正條法とを明年までに全然實行せしめんとて、今や將に獎勵の最中なりと、之は大に國家のため慶賀の至りなるが、農商務に於ては尙ほ米作に付き綠肥の普及を希望し居れり。然るに本縣にては昔來紫雲英を多く用ひらるるに、此一兩年は殊に綠肥獎勵のために紫雲英の外に刈敷大豆の作付も盛大となれりと、依つて此上は尙一步進んで、諸害虫の驅除にも充分の骨折あらんとを希望に堪へざるなり、實際稻害虫が本邦農作に年々與へつゝある損害は莫大なる者にて、凡そ七百萬石にも達せるが、之を金に換算せば八千餘萬圓の巨額なり、此巨額の欠損は害虫の喰害に因る欠損にして、近年は驅除強制のために幾分其欠損額を減少せしめし形跡あるも、尙ほ未だ遙に努力の足らざるを見る、世間には

此損害の減少を見て、害虫の驅除よりか天候の順良に起因すと觀察せる者なきにあらざるが、其所謂天候の豊凶なる者は、害虫の發生と蕃殖とに都合よきと否らざるにて、害虫を離れて別に存する天候の狀況にあらざり、歸する所害虫に對しては尙ほ未だ大部分は自然の成行に放任し居るにあらざるか、之れ余輩が其驅除を切望する所以なり、蠶絲業の發達に對する希望は前述の如くにして近年は夏秋蠶の飼育も益々増加しつゝありて、國家經濟のため祝福するの外なきが、之に就て一面には養蠶業に取つて憂懼すべきの現象を示し來れり、之は他にあらざり全國各府縣とも夏秋蠶に給するに春蠶用の殘桑を以てすること之れ也、そのため桑園は自ら荒廢に傾き、現に關東の或る地方にては頗る困難せる者ありと、桑樹素より一種の植物にて其勢力も他種植物と同じく一定の制限ある者なれば、飼育高の増加に伴ふては當然桑園の擴張をなさざる可からざることば炳然たる道理にあらざるや。次に蠶絲業に就ては蠶病豫防のことも法律の示す所に遵據し、今後は一層慎重の注意ありたき者なり。其他共同稚蠶飼育、共同消毒、共同販賣、共同購入の如き、經濟的手段の改良も必要なり、蠶種の一定、桑樹の撰定、栽桑法の改善の如き、一々指摘するに於ては單に蠶業の一事に於ても將來改良を要するの件は多々あり。

牛馬の改良に對する余輩の意見は、日本に於ては頭數の増加よりも品質の改善がヨリ大切ならんと信ず、數より云へば本邦には馬は百五十萬もあれば充分ならん、されど現在の如き小軀孱弱の

馬にては軍馬にも耕馬にも餘り使用し得べからず、之と同じく牛も實質の改良が第一の急務ならん、肉用にも乳用にも使役にも實質の改良を爲さずんば數のみにては其効驗を見ること能はず。殊に開戦以來肉用のために、遽かに屠殺數を増加し、今や其欠乏を訴へ濠洲肉の輸入を増加し來れり。肉は人類の食品としては元氣を旺盛ならしむる滋養品なれば、今後は益々飼育を盛大にし其輸入を防止すること肝要なり、而して牛馬の改良に付いて第一必要なるは養蠶の改良と同様に適當の管理と牧場の整頓なり、其牧場は充分廣濶にし、時々良種の牧草種を播下し、能ふ可くんば地面を時々鋤き却し、新鮮佳良の秣草を給するに勉む可し。之に次では去勢をも遠慮なく行ふ可し、去勢の必要は今更ら喋々を要せず、而して政府は補助金をも箇人に支出し、且つそのため損害ありたる時は、賠償をも約して奨勵を加へつゝあり是非く盛に去勢せんことを切望す。右の外農家副業の如き凡利のある者は、大小を撰はず實行すべし、養鶏可なり、糸瓜可なり、薄荷可なり、縦令輸出高は一二萬を超へざるにせよ、苟くも正金の我に攝取し得べき者は、漏す無く悉く拾集するの主義を以て進行したる者なり。今日の場合悠々閑々として些々たる物品に至るまで外品の輸入を仰ぐことを爲さば、國力は次第に消耗して、遂には兌換制度の基礎も搖ぐの不幸を招く無しとせず、豈に恐る可きにわらずや、余が刻下の時局に處する滿腔の希望と方針は茲に在り。

### 本邦農業の現在及び將來

農業は尤も確實の職業、農民の生活は最も幸福なる境遇とは、從來久しく信せられたり、然り農民は山間に蟄居し、田園に靜住し、清風と明月とを樂み、鮮菜と新穀とに飽き、彼の擾々たる世上の俗事に至りては殆ど與り知る所なかりしなり、されば詩人墨客も想を農夫に寄せ、材を田園に取るを常とせり。然れどもこは過去の夢とならんとす、其の斯如幸福の状態を保ち得るものは彼等自ら生産せし穀食を食ひ、彼等自ら機織せし衣服を纏ひ、又時としては自ら建築せし、家屋に住せし時代なり、今や世界の經濟は一變して、社會組織は頗に其趣を改め、農民は其食物、其衣服、其家具を購買し、其他日常百般の消費物は皆之を購買せざるべからず、こゝに於て農家の經濟は一變し、農業は尤も確實の職業、農民は幸福なる境遇と稱す可らざるに至らんとす、我國の如きは現今未だ農家の状態憂ふ可らずと雖ども、將來十年乃至五十年の後果して如何、是れ研究すべき問題なり。

現今西歐諸國の實際に徴するに、農業者は漸次可憐の境遇となる、殊に好適の例は獨逸帝國にして、由來獨逸の發達は全くプロシア王國の力にあり、プロシア王國が能く盛大に、帝國統一の大業を爲し、霸を世界に稱する所以のものは、全く地主即農民の力にありと云ふ。當時の農民は、

最も愛國盡忠の精神に饒に、社會上政治上に於て最も重要な位置を占めたり、然るに最近五十年間に漸次困難に陥り、其重要な位置を去り、而して玆々之が救済の策を講ずるも如何ともなす可らざるの状態なり。

其原因は交通機關の發達を以て主要なるものとす、交通機關の發達は海外萬里の農産物は、容易に低廉なる運賃を以て國內に輸入せられ、從て國內の農業者は此の新輸入國農業と競争を受くることとなり、從て農産物は下落し土地の賣買價額は下落し、農家の収入は是が爲に減少し、負債は次第に増加し、年々困扼の状態に陥り、其結果社會上、政治上、經濟上に於ける農業者の地位は、漸次失墜するに至ると云ふ。

翻て現時我が國の状態を見るに、國內交通機關の發達は、却て地方農民の利益となる、是れ地方の農産物の販路を擴張し、從て其收益を多からしめたるを以てなり、然れども是れ決して永遠に持續すべきの現象にあらず、往年プロシア國內交通機關の發達の結果、一時農民は其利を被ること尠からざりしかど、海外對交通機關の發達は、往々之と結果を異にするに至るものあり、我國の將來も遂には此の状態に陥るに至らざるべきか、今之を統計に見ば我が國の米産額は平年約四千二萬石にして、我が國民全體の食糧とするに足らず、故に多少の米穀輸出ありと雖、輸入は常に三四倍す、而して我國人口の増殖は年々四五十萬にして、其結果米穀輸入は益々多量となりん

之を英國に徴するに、七十年前には其農産物は全國民の全食糧を供給すること能はずと雖も、尙大部分供給せり。然るに五十年前より外國農産物侵入の爲め、國內の農業は年々衰頽し、數年前同國議院に於ける農業調査委員の報告に、當時國內の農産物は僅に七週間國民を養ふに足らざると云ふ、實に我國農業者の如きは是等先進國の實狀に鑑みて、將來の大計を定めざるべからざるなり。

加之、海外諸國、米作物興殊に北米合衆國の南部諸州、就中テキサス、ジョージヤ地方に於ける斯業の發達は大に注意すべきことなり。而も其種子は本邦の米穀にして其品質優良、恰も本邦産と異ならずと云ふ、而も廣漠たる米大陸、地價の廉なる一反僅に二十圓に値せず、本邦の如きは上田一反四五百圓、貧劣なる山林原野さへ猶五六圓なり、地價に於て非常の差あるのみならず、灌漑の便なる、資本の豊なる、器械の應用に巧なるあり。企業的才幹ある米國の米穀生産費は我が國に比して非常の差異あるべし、併し最近の調査には此地の米産量るゝに足らずと雖も、將來果して如何、是研究すべきことならん。

況んや南亞細亞地方殊に東京、ビルマ、暹羅の米作は將來恐るべきものたらん、殊に暹羅のバンコック府の附近、メナム河の兩岸は茫々たる一帯の沃野にして、之を米作に供せば一ヶ年少くも二億石を得べしと、而も其地勢は垣々たる原野、灌漑便利に、氣候は四時温暖、二毛作をなす

べく、地價は低廉にして殆ど價なきが如し、加るに政府は國費を投じて大仕掛けの灌水の便を計りつゝ、わりと云ふ、次にメーコン河谷の如きも將來甚有望なりとす。

以上の地方は僅小の生産費を以て、巨額の米穀を生産することを得、即ち米國にては一石七圓、暹羅にては四圓を以て收支相償ふと云ふ、然るに我が國は如何、若し十圓以下に下落せば非常に困難するのみならず、八圓以下に至りては到底收支相償はざるべしと云ふ、只品質劣等なるを以て、我が米穀の敵にあらずと云ふも、昔時の外國米はいざ知らず、今日の外國米は品質佳良にして、本邦産と異なることなきに至らんとす、况んや暹羅ビルマ等は、我が九州米を輸入して、米質の改良を計るに於てをや、將來我が米穀を壓側する恐れあるのみならず、最近布哇に於て日本米は低廉なる合衆國米の爲に漸次排斥せられんとするの形勢あり、知らず日本米の前途如何。

唯々暹羅、米國のものを輸入するには、運賃高價なるを以て、恐るゝに足らずと爲すものあれども、是れ大なる誤にて、今日海上の運賃は甚だ低廉に、暹羅より一石の運賃は五十錢内外に過ぎず、亞米利加の南部のものは幾分汽車の便を取る爲め多少高きも、我國に輸入するまで一石に付一圓五十錢許を要するに過ぎずと云ふ、况んやパナマ運河開鑿せられたる曉には、海上運賃は更に下落し、從て安價に輸入し得べし。

若し斯の如くんば、我が農業者に於ては、大々の打撃なり、即英國、獨逸、過去五十年間にて、

漸次衰頹せるが如き現象を呈するに至らざるか、我が農民にして將に到來すべき經濟界の大變轉に際して、豫め用意する所なくんば、父祖傳來の職業と父祖の遺産とは、空しく散逸するの由來らん、是れ農民が宜しく此の世界の大勢に對して、正當防禦の術を講じ、又經世家の注意せざる可らざる所なり。然れども此の防禦術たるや、到底短簡を以て、解決すべからざれども、左に一法あり。

我が國現今米作の状態にては、年々六七十萬人を増加する人口に對して、悉く食料を供給する能はず、されど人口の増殖は實に喜ぶべく、多々益々多きを可とす。將來東洋の一大帝國として、雄を世界に稱せんと欲せば、少くとも一億の人口は必要なり。斯の如くんば到底糧食の缺乏を訴ふるは當然なり、然らば之に處するの策如何、曰く我が國の米作は最も完全なる發達を爲せるものにして、元來米作は其性質上小區の耕地に最も適す、此點に於て米作は我が國の最も長所にして、又最も適當としつゝある所なり、故に此の長所を益々發達助長して、其耕作法を改良するは勿論總べての農業者は其全力を盡して、米作に従事せんことを希望す。即斯の如くして全然外國米の輸入を杜絶し、國民の食物は總べて我が國に於て生産することゝ爲さんことを切望す。

元來外國産物の優勢なる競争は、最も恐るべきものにして、其の始は唯國內供給不足の幾分を補ふ如く思惟せらるゝも、是れ最も恐るべき禍根にして、現に我國の綿、麻、大豆の如き其始めは唯

唯國內の不足を補ふが爲めに輸入せられたるものも、一たび輸入を初むるや漸次國內の産物を壓倒し、其生産を困難ならしめ、遂に全く之を廢絶せしめざれば已まざるものにして、麻、綿、大豆等が漸次減少するに徴するも、般鑑亦遠からず。故に現時の米作に對し、益々改良進歩を計るは勿論、將來之を以て益々本邦農界の中堅となし、總べての農業者力を合せ、其の生産を大にし、以て他國より輸入を仰ぐの必要全く之なきに至らしめんことを計らざる可らず。

次に注意すべきは小農の保護なり、大農の存在は決して不必要とするにあらざると雖、我國の農業は基礎を小農に置かざる可らず、之を諸國の歴史に徴するに、他國との競争上最も早く其影響を受くるものは小農なり、若し一國の農業者中其の上級に位すべき大農のみ徒に多くして、之が根底たり基礎たるべき小農を缺かんか、農界の中心一方に偏重して、競争乃至壓迫に對するの抵抗力極めて薄弱なり、故に他邦との競争に備ふべき一策として、中、小農の保全を必要とするものなり。而して此が手段として産業組合の制度の如き最も適當なるもの、一ならん、産業組合の利益とする所は固より一にして盡さざれども、其大眼目とする所は大、中、小農乃至零碎農をして、完全なる調和と結合とを保たしめ、農民の全體を括護して、一國農業の基礎を鞏固ならしむるにあり。(法學博士松崎藏之助氏所説抜抄)

林業

### 第二節 林業

我が國は山岳到る所に起伏し、雨量も亦豊なるを以て、茂林の縁滴たらんとするを見ざるなし、殊に木曾、紀伊、大和、伊豆の諸山は良材豊富を以て名あり、森林の反別は國有林千二百六十九萬町(三十六年度)民有林七百七萬八千町にして此外御料林三百十萬町あり。

森林の效用

森林の人生に對する効能に依り、直接に間接とあり、直接には其樹木が直に家屋、橋梁、船體、鐵道の枕木、電柱、器具、薪材等の材料となり、日常生活に偉大の効益を興ふるのみならず、此の樹木に多少の加工をなして、摺付木、洋紙となし、又は木材を分解して、糸を紡ぎ、布を織り、或は人造絹糸を製する等、其他の効用を擧げて數ふ可らず、間接効能には森林は水量の調節器となりて、水源を涵養し、又は風量のを減じ、彼の須磨子等の佳景も、松林なくんば賞するに足らず、或は杉檜等として天に參するるとき、一種の幽玄の趣あり、且樹林は氣候を調和するに非常なる効あるものとす。

木材として杉、松、檜、及樺、薪炭用として楡及び樺、副産物として樟腦、松脂、醋酸、五倍子及び椎茸等を重なるものとす、山林保管の制は、現今文明諸國大に心を用ひざるはなく、吾が國維新變革後、其禁制亂れ、一時濫伐大に行はれしも、近時獨逸其他の文明國に倣ひ、大に山林の制を定め、樹木の保存栽植に着手せり、即ち山林の等級を制し、全國の林政區畫を大林區及小林區に分ち、之を監視するが爲めに、大林區署及小林區署を設け、林務官及其他の林官を置いて之に當らしむ、是に於て林制大に備はれり。



漁業

途を記すれば左の如し。  
 (一)石油不凍製造用。(二)自然瓦斯製造用。(三)醫藥。(四)無煙火藥製造用。(五)煙火製造用。(六)ガラス。(七)ゴム製造用。(八)石鹼。(九)蠟燭劑。(一〇)防腐劑。(一一)香水。(一二)香油。(一三)機油。(一四)東印度にて(一四)生皮貯蔵用。(一五)...

### 第三節 漁業

我國は四面海を環らし、暖流は南より來り、寒流は北より至るを以て、極めて魚族に富み、漁場の面積は耕地の面積よりも遙に廣く、實に無盡の富源と云ふべし。特に北海道の沿海は世界三大豊魚帯の一と稱せらる。現今全國漁業者の数は二百萬人にして、總人口の十二分の一に當り、其産額は生物類四千四百二十四萬五千圓、(三十五年)乾物鹽物肥料魚油計二千八百六十五萬七千圓(同上)合計七千二百九十萬二千圓に上る。其内産額の内多きは鱈にして、七百十九萬圓に上り三重と第一として二百十九萬圓、次は千葉(五三三)愛知(四九四)愛媛(四二七)等なり。津(鮭)は六百二十七萬圓(三十五年)度七百二十一萬圓(三十四)に上り北海道の五百七十四萬圓を第一とす。次は鱈五百三十八萬七千圓にして、高知百十六萬圓を最多とし、次は静岡(一〇三〇)千葉(四八二)茨城(四二四)等なり、第四は鯉節三百五十八萬八千圓にして、内高知六十萬圓を最多とし、静岡(五二六)鹿児島(三五四)茨城(三三九)等なり。第五は鯛にして、三百三十二萬圓に上り、漁獲の最多は山口(四五七)愛媛(三四七)廣島(三一九)兵庫(一八三)茨城(一七〇)等なり。第六は鯉

鮭 鱈 鯉 鯉 鮭 鮭

島根

島根

ツヨシダ  
ン博士水  
産談

(笹目鯛)二百六十萬圓にして、殆んど全部北海道に産し、第七は鯛二百三十萬圓にして、島根(四五五)新潟(二九七)長崎(二〇〇)大分(一四五)を多しとす。次は養乾鱈百八十萬、愛媛(三六七)山口(二八四)廣島(二二四)鮭百七十四萬九千圓長崎(二九九)三重(一八六)山口(一五六)鳥賊百六十五萬圓新潟(五二二)富山(一四六)鮭百五十五萬圓千葉(二二六)山口(一四六)静岡(一三八)三重(一三六)鮭百三十三萬圓千葉(二一〇)青森(一五四)宮城(一五二)等にして、何れも百萬圓以上に達せり。(單位は皆千圓なり以下之に同じ)今左に米國ツヨシダ博士水産談を參考の爲め記すべし。

#### ▲四國海約條條約の締結

太平洋上の海約條に關係ある四強國即ち日、米、英、露各政府の委員が先年華盛頓に會合して締結せんとせし海約條條約も當時英國植民大臣チエムパレン氏が加那陀に對する政略上より故意に米國の提議を容れずして今に其儘になり居れるが今日となりては歐洲及び東洋に於ける外交上の關係よりチエムパレン氏及び英國人は米國及び日本と親交するの必要なるを悟り居る折柄として英國も亦米國の提議を容るゝことなるべく此條約に依て最も利益するは日本及び北米合衆國なれば日本は據り今日より此件に注意すること必要なり(因に云ふ博士は白令海海峽會議の米國政府委員なり)

#### ▲領土問題と領

日本にて清國の領海に通漁權を獲んとするなどの際あらば如何にして魚の餌を得んとするやに注意せざる可らず英領ニューファンドランドにて米人は漁業權を有すれども餌を同地に得るの困難なるは實に我々の關心する所なり是れ同地方人民の容易に餌を米人に賣らざるが故なり日本人が清國に通漁權を獲し際に當ては宜しく沿岸清人の好情を失はざらんことを力むべく斯くて問斷なく餌を得るの途を開き置くこと必要なり

#### ▲領土問題考究の必要

日本は大小の群島國なるが上に海峽、水道、灣、半島、海角多きを以て漁業及び國防上に關し領



▲海峽の重要性の増進に必要なり三哩以内の領海なることは固より然りと雖も海峡、水道、灣などに對しては別に考究して領海權の擴張を期せざる可らず

▲對外漁業問題考究の必要 日本は大陸に在らざるを以て彼の獨逸對和蘭國の如き漁業條約を締結するの必要なしを雖も西比利亞海、朝鮮海に對する漁業の關係より外交問題な誘致すべきとあるべきを以て之れが豫防の爲め今日より對外上の

▲漁業の世界的共通交換 魚類の有無交換を行ひて世界共通の途を開くは水産上の利益のみならず亦國交を厚くする一途なり例へば日本の外には産せず臺灣、朝鮮に産するものは悉くは別種のものに屬し眞成に香氣ある佳味の鮭を産するは世界にて獨り日本に限り故に日本の鮭を歐米に移殖し而してシヤッド(原料の魚)の如き有利有効なる魚の漁業國たる日本に對して生産せざるは日本の爲めに取らざる所にして而かも容易に移殖すべし此れは宜しく米國のシヤッドを日本に移殖すべし又世界に於ける鮭は五種にして内劣等なる三種のみ日本に生産せり日本の鮭は米國にてドック、サーモンと俗稱するものに屬し

▲鮭の外は他種魚類も亦移殖せしむべきなり 一種の魚のなれば宜しく米國のヨロム、セナ河等より善良なる鮭の卵子を輸入し日本の諸河川に

▲水産の學問を以て國權を擴張すべし

▲日本漁業の大成就の必要 美國維納府のツッパライン博士が辛若種として公表せし日本魚類譜は有益なる著作なりといふ凡そ一箇の魚類を網羅せしに過ぎず日本の帝國大學に陳列せる魚類も亦余が整理せるスタンフォード大學に陳列せる魚類より少し余は現に六百數十箇の日本魚類をスタンフォード大學に陳列し置けり然るに日本魚類譜の大成就せるは日本の學問界の爲めに將た世界の學問界の爲めにも實に感むべきことなり今日本魚類譜七箇を畫せんとするは米國に於ては一個の漁業料五弗申す十四位なれども日本の畜工の報酬は殊に低廉なるを以て三箇位に過ぎざらん即ち二千圓少餘にて魚類を畫き盡くし出版費に二千四百圓も、あるものとせば僅々四千五百圓にて日本の魚類譜は大成就すべし此れしきの費用は日本の富家が宜しく負擔すべき者なり先年余が南米のカラバコ群島に水産調査に出張せし際は桑港近郊の富家バギンズ氏直ちに二千圓を寄附し墨西哥に出張の際にも同氏より二千圓を寄附し來り今回日本に水産及び社交、教育の調査に出張せんとするや同氏

より二千圓、別に匿名の募集より二千圓を寄附し來り余は常に思へり眞成の文明は富家が能く學問上若くは公共上の爲めに眞成の趣味を解悟する瞬間時より起發すと日本の魚類譜にして大成就し世界の學問界に之を貢獻せば日本國の品位を著し得るものと實に莫大なる功績を著し得るものと成し得るとせば誠に廉價なるものなり一箇の品位を世界に著し得るには兵馬の如き高價なるもの外に甚だ廉價なるもの別に在ることを悟らざる可らず(三十三年九月大日本水産會に於て)

また北海道には、獺、虎、鷹、鷹、鷹あり、且各所の沿海には鯨等を産すれども、其捕獲割合は少し、我が國水産は漁法宜しきを得ざると、資金の不足なるにより、規模小にして、天與の富は空しく海水に没せしが、近時遠洋漁業獎勵法等を發布し改良進歩を計り、一方には北は樺太島及び露領沿海州、西は韓國の沿岸に漁業權を得て全然我が漁獲勢力範圍に屬し、水産の前途益多望なりと云ふべし。

▲我が國の周圍漁業面積を計るに無慮七百三十萬餘町歩あり、今之を現今耕植する陸面の田畑五百五萬町歩に比すれば、海面の生産地は遙に耕地よりも廣大なり、是れ實に海國無盡の富と云ふべし。

我國は四面海なるのみならず、又瀬戸内海の如き山岳圍繞して降雨少なき地を有するを以て、食鹽の産額亦多し、即一ヶ年六百三十二萬九千石(三十年より三十五年)此金額は八百八十萬圓(同上)に上り、香川を第一とし、百三十六萬五千圓次は廣島(一、二六八)、山口(一、一三八)、兵庫(九七六)等なり。

▲製鹽法の改良 内地食鹽の産地は、瀬戸内十州を主とし、鹽質は産地に依り相違あれど、製法に依りて之を區別する時は

第一 第一 人文地理

一一九



第貳章 人文地理

(一) 億五千萬噸(佛國四千萬噸)等の炭産國に比すれば、實に數倍たり、現今文明の要素は鐵、石炭なるを以て國運の進歩せる諸國に於ては、石炭は昔豐富なり。

▲清國石炭の將來 地質學者は孰も清國礦産の有望なるを視き、此地下礦物にして一朝開掘に着手せられんが清國の前途は、彼の近年南亞、印度、滿洲等の金礦開掘の結果より、尙甚大なる影響を世界の經濟上に及ぼすべしとなせり、獨逸の而して、*von Richthofen* 氏の世界石炭存在理想額に依れば、

獨逸一六〇、〇〇〇、〇〇〇噸 英國八一五、〇〇〇、〇〇〇噸 合衆國六八四、〇〇〇、〇〇〇噸 清國(無煙炭)六三〇、〇〇〇、〇〇〇噸 其他諸國一七、〇〇〇、〇〇〇噸 此計算に依れば、合衆國を以て第一とすと雖も、若し無煙炭以外石炭をも算すれば、清國は實に第一位に居ることを推知すべし、而して又彼の三十餘年前清國內地の探査を以て有名なる獨逸の地質學者 *von Richthofen* 博士の說に於ては、現時世界の石炭消費年額は約六億噸と算し、試に之を山西一省より供給するとせば僅に一年餘を支へ得べしと云ふ若し今後の世界をして、長く前世紀及び現世紀の如く石炭時代ならしむるに於ては、清國の位置は今日の美國及び北米合衆國の如く、將來其製造工業の中心を茲に移し、文明の樞樞として業感無比の邦國たるべき運命を享有するものと云ふべし、是れ只石炭の一事に就てのみ謂へるものにして且之に加ふるに鐵礦を併有し且獨逸に當じること多かりと稱せらるゝに於ては清國礦業の前途有望なることを知るべし。

此の石炭の悉く開掘せらるゝ時は、實に我が國の石炭業に影響を及ぼすのみならず、各種の工業等も關係すること益し夥かりと云ふべし、即ち今日より其價格を爲さるべしなり。

我國石炭の古き地層(中古界)より産するものは多く、無煙炭にして、長門の美彌瀧浦の兩郡より産する無煙炭は最も古く、次は越前、加賀の國境なる大野郡谷村の産炭及四國阿波の勝浦郡止木村の産炭なり、次は尾張天草炭、紀伊宮井村の無煙炭等なり、然れど其配布量ならず、近古界に至れば我邦石炭原料の發生最も豐なる時代となり、其第三系は石炭を採掘すること頗る豊饒なり、されば此層の配置に應じて炭産地帯の大體は自ら北部、南の三部に分れり、北部(北海道)、中部(岩手、秋田、青森、山形、福島、茨城、栃木、群馬、千葉、埼玉、東京、神奈川、山梨、長野、新潟、富山、石川、福井、滋賀、岐阜、愛知、三重、奈良、和歌山、徳島、香川、高松、岡山、広島、山口、徳島、香川、高松、岡山、広島、山口)及南部(九州北部)是なり、以上の炭田より將來容易に開採せらるべき量にても無量十億噸に下らずと云ふ本邦の炭量も少くにはあらざるなり。

銅一〇年の産額は、四千八百三十九萬斤(價額千三百七十萬圓)にして、秋田縣を最多とし、即ち二百萬斤(價額三百二十八萬圓)全産額の四分の一を出す、次は栃木縣千二百萬斤(三百三十五萬圓)第三は愛媛縣九百四十萬斤(三百九十萬圓)第四は岡山縣三百二十萬斤(八十三萬五千圓)なり。

我國は世界重要なる銅産國にして、今重なる産地を擧ぐれば北米合衆國二十八萬二千噸、西班牙、葡國牙五萬五千噸、智利三千萬三千噸、日本二萬八千噸、實に世界第四位を占む。而して我が國礦物の産出價額より見れば第壹位にして、又輸出品の重要部を占む、且我國は銅礦頗る廣く分布し、前途最も有望にして、其産出年を追ふて増加し、明治八年には僅に四百萬斤にして現今十二分の一に過ぎざりしが、十六年に一千萬斤、二十年には二千萬斤、今は已に四千八百萬斤に上るに至る。

金は七百九十三貫五十八匁、(價額三百五十五萬圓)其産地は鹿兒島縣三百三十六貫(百十六萬圓)北海道百六十八貫(六十八萬圓)新潟百六十貫(八十二萬圓)等なり。

世界各國の重要なる金産地を擧ぐれば、(一) 滿洲二萬九千八百三十五貫、(二) 北米合衆國二萬九千二百五十七貫、(三) アフリカ一萬四千二百七十貫(四) 露國八千二百四十貫(五) カナダ七千五百八十三貫(六) 英領印度三千五百六貫(七) 支那三千一百九十三貫(八) 韓國一千二百八十貫に上る日本は約世界第十五六位にして七百九十三貫餘なり。

銀は一萬五千三百七十一貫(百六十八萬圓)にして、差出の最多きは秋田縣にして、四千五百六十七貫(六十三萬五千圓)約日本全産額の二割弱を占む、次は岐阜縣千八百五十六貫(二十五萬三千圓)兵庫縣千四百六十一貫(十四萬四千圓)等を重なる産地とす。

世界各國の重要なる銀産地を擧ぐれば、(一) 北米合衆國四十五萬四千九百三十八貫、(二) キリシマ四十一萬六千八百八十貫、(三) アフリカ













砂糖製造  
樟腦油  
煤油  
紙

臺灣には砂糖製造甚だ盛にして、年額九千三百萬斤(四百五十萬圓)を産し、此外樟腦三百二十萬斤、樟腦油二百二十八萬斤を産し、阿片烟膏製造高五萬三千五百五十圓(三十五萬六千餘年平均)に上る。以上各種の製造、漸次發達増進して、あれども、規模宏大の機關は、製造するものは未だ幼稚なり、我が國は最も工業に適する諸資格を備ふる國なれば、將來東洋の一大工業國たることを期せざる可らず、否我が國民は大に奮勵して、必ず斯の如く爲さる可らず、然らずんば内には土地に限り、人口の増殖は迅速なり、農業のみによりて、國力を涵養するに比到底能はざるなり。我が國が將來工業發達に通せるは左の諸事情あり。

- 一、石炭産出多きこと。
- 二、水力電氣を起すに適せること。
- 三、勞働賃銀安きこと。
- 四、工藝美術心に富むこと。
- 五、販賣區域を有すること。
- 六、運搬に便なること。
- 七、各種の原料を輸入するに都合なきこと。

### 第六節 商業

我が國封建の世には、各々一地方を區劃して、交通不便に、通貨も亦各藩によりて異に、從て有無相通すること難く、故に商業は一地方に限られたり、近時は此區域なく全國は比隣の如く、物

銀行會社  
銀行會社

貨の共通繁く、商業甚だ活潑なるに到れり、商業の最も盛なる地は、東京、大阪、京都を首とし、名古屋、仙臺、横濱、神戸の各市とす。此等の地は、其の近傍に廣大の生産地を控へ、交通の便備は、貨物の集散配送所たり、殊に東京は全國貨物の集散所にして、大阪は關西商品の吞吐所なり、是れ我が國主大商業地とす。此等の商業地には、必ず商業の機關たる銀行、會社、商業會議所、取引所及び運送會社等悉く具備し、因之には金、銀貨幣の融通を圓滑ならしめ、其方、貨物運輸の便を資す。

今全國に於ける銀行及び會社數を擧ぐれば左の如し。

日本勸業銀行	資本金 1,000,000	總行 東京
日本興業銀行	資本金 1,000,000	總行 東京
横濱正金銀行	資本金 1,000,000	總行 横濱
北海道拓殖銀行	資本金 1,000,000	總行 札幌
青島銀行	資本金 1,000,000	總行 青島
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 天津
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 香港
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 上海
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 蘭州
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 梧州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 張家口
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 煙台
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,000,000	總行 北京
華東銀行	資本金 1,000,000	總行 濟南
華西銀行	資本金 1,000,000	總行 西安
華南銀行	資本金 1,000,000	總行 廣州
華北銀行	資本金 1,0	



最近貿易の情況

最近外國貿易の情況 三十七年度の外國貿易が到底不振不況に終るならむとは初期に於て一般に豫想せられたる所なり。即ち時局の影響として海陸運輸機關の缺乏、運賃保険料の騰貴、増税等各種の事情纏綿して輸出入の發達を阻害し、一方には軍用品の需要増進に依りて結局巨大の輸入超過を見るならむとは充分の理由ある豫想なり。然るに事實は豫想に反し局部に就ては多少時局の影響ならむに依りて防止を難む。全體の計より現れば輸出入共に善良なる狀況を以て経過也。遂に左の如き好成績を際すに至れり。

三十七年輸出總額 前年比 101.5% 對前年 對前年 對前年 對前年  
 三十七年輸入總額 前年比 101.5% 對前年 對前年 對前年 對前年  
 輸入超過額 前年比 101.5% 對前年 對前年 對前年 對前年

輸出總額三億二千萬圓、輸入總額三億七千萬圓は空前の巨額なり。輸入超過は元豫期せし所にし。然るに五千萬圓に止まりしは豫想外の好結果と云はざるべからず。更に之を卅六年度輸出入と比較すれば左の如くにして

品名	三十七年	三十六年	比較(%)
米	1,000,000	1,000,000	100.0
小麦	500,000	500,000	100.0
大豆	200,000	200,000	100.0
其他	1,500,000	1,500,000	100.0
合計	3,200,000	3,700,000	86.5

増加の割合は輸出に於て一割強、輸入に於て一割七分、通計に於て一割四分弱に達するを見る。軍國の外國貿易にして斯の如き好成績を示したる所以のもの戦勝の結果たるは勿論なりと雖も亦常業者が内地商工業不振の結果外國貿易に向つて其の全力を傾倒したるに依らずんばならず。輸出入中如何なる商品が増進し又減少したるかを示さんが爲に前年度對照表を掲ぐれば左の如し。

品名	三十七年	三十六年	比較(%)
米	1,000,000	1,000,000	100.0
小麦	500,000	500,000	100.0
大豆	200,000	200,000	100.0
其他	1,500,000	1,500,000	100.0
合計	3,200,000	3,700,000	86.5







乾藍百八十萬圓等なり。第五佛蘭西三千九百萬圓(出三千四百萬圓)にして、我れの生糸一千六百七十萬圓、羽二重九百六十萬圓、屑糸三百九十萬圓、懋糸百四十萬圓等にして、彼れより縮緬呂二百三十萬圓を第一とす。第六獨逸三千二百萬圓(出五百萬圓)にして、我れより銅類八十萬圓、樟腦羽二重各六七十萬圓等を輸出し、彼れの精製砂糖二百四十萬圓、羊毛二百三十萬圓、軌條乾藍鐵條各々百二十三十萬圓宛輸入す。第七韓國二千一百萬圓(出一千二百萬圓)にして、我れより生金巾百三十萬圓、綿織糸百萬圓、白木綿四十五萬圓、(從來は毎年百萬圓以上)を輸出し、彼の米四百七十萬圓、豆類二百三十萬圓、牛皮六十萬圓等を重要品とす。

### 交通

交通とは旅客、物貨の運輸、並に音信の傳達に關する事務を云ふ、運輸は陸路、水路により、音信は郵便、電信、電話に依る、陸路には國道、縣道、里道の別あり、國道は中央首都と、伊勢大廟、各府縣廳所在地、師團司令部所在地、開港場を運ぬるもの、縣道は各府縣の重要都邑を連絡するもの、その修築改繕共に、府縣經費の負擔に屬す、里道は町村交通の道路にして、町村若しくは町村組合之が修築、營繕の費用を負擔す。

千八百里

東京日本橋ヨリ地方元標ニ至ル里程

地方	元標地名	道	里程	地方	元標地名	道	里程
京都	三條大橋	東海道通り	三三	福島	上町	陸羽街道通り	七
大阪	高麗橋	京都を經て	一四	岩手	盛岡紺屋町	陸羽街道通り仙臺を經て	一四
神奈川	横濱本町	神奈川を經て	八	青森	米沢	陸羽街道通り	一九
兵庫	神戸元町通	京都及山崎を經て	一五	山形	七日	米澤通り	一九
長崎	外浦町	京都及小倉を經て	一〇九	秋田	大町	米澤通り	一五
新潟	本町	長野及高田を經て清水越道	一〇九	福井	照手上町	米澤通り	一五
埼玉	浦和町	中仙道通り	六	石川	金澤尾張町	名古屋及柳ヶ瀬を經て	一七
千葉	千葉町	市川を經て	二〇	富山	西町	名古屋及高田を經て	一五九
茨城	水戸市駅前前	土浦を經て	六	島根	松江	長野及高田を經て	一七六
群馬	前橋連雀町	熊谷伊勢崎を經て	六	鳥取	西町	長野及高田を經て	一七六
栃木	宇都宮池上町	陸羽街道通り	一〇	岡山	本町	姫路及若狹を經て	一四
奈良	奈良三條通り	大津及伏見を經て	一〇	広島	細工町	京都及神戸を經て	一八
三重	津分都町	四日市を經て	一三	山口	大町	京都及廣島を經て	二二
愛知	名古屋鐵砲町	熱田を經て	一三	和歌山	橋町	大阪を經て	二二
静岡	岡服町	東海道通り	一三	徳島	西町	明石を經て淡路通り	二六
山梨	甲府錦町	甲州街道通り	一三	香川	高松常盤橋	下津井及丸龜を經て	二七
滋賀	大津上京町	東海道通り	一三	愛媛	松山札の辻	同前	二七
岐阜	白木町	名古屋を經て	二〇	高知	本町	同前	二七
長野	大門町	上田を經て	二〇	福岡	橋町	小倉及蘆屋を經て	三三
宮城	仙臺大町	陸羽街道福島を經て	二〇	佐賀	白山町	小倉及山家を經て	三三

大分	碩田橋	京都及小倉を経て	三三	鹿兒島	山下町	小倉及熊本を経て
熊本	本縣前	小倉及久留米を経て	三六	沖繩	那覇	鹿兒島及大島名瀬を経て
宮崎	上野町	小倉及大分を経て	三八	北海道	札幌	幌 網走 釧路 小樽 青森 秋田 山形 福島 茨城 栃木 群馬 埼玉 千葉 東京 神奈川 新潟 富山 石川 福井 岐阜 愛知 三重 滋賀 京都 大阪 和歌山 奈良 徳島 香川 高松 愛媛 高知 宮崎 熊本 鹿児島 沖縄

水路

水路は、海路と河路とあり、海路は遠洋航路、沿岸航路、近海航路の三に分ち、河路は河、湖、及、運河を含む、我國は國土の狭小なる割合に、山嶽多ければ、河湖の大なるものなけれども、琵琶湖、霞ヶ浦、北浦、猪苗代湖、穴道湖、中湖、那珂川、淀川、隅田川、利根川、信濃川、北上川、石狩川等は小蒸流船を浮ばしむ、運河の開鑿は未だ盛ならず、僅に本利根、新利根を連絡する利根運河二里に過ぎず。水路と陸路との連絡點は、即、港にして、河路と陸路とは河港を以て、海路と陸路、又は水路とは海港、或は河口港により連絡せらる、而して軍事上の用に供せらるゝを軍港、要港とし、軍港は鎮守府海兵團を置き、要港には要塞を設け、或は水雷團を置く、その他の港を商港となし、特に外國貿易の行はるゝを貿易港と稱す。

汽船千四  
百艘  
帆船四千

運輸機關は、歩進、流進、轉進の別あり、歩進は古に多く用ひられしもの、今も猶馬背の用多く、人足の用ひらるゝ言を俟たず、流進は主として船舶なり、船舶噸數の増減は、直に國勢の隆替を示すもの、我國商船噸數百萬に近く、海員亦年に増加し、汽船會社の隆起、増資相次ぎ、發達の幸運を示せり。

第一節 鐵道

鐵道

鐵道 最近の報告に據れば我國の鐵道延長は五千六百九十哩にして官線並に四十一會社の所有線たり、而して既成線路延長四千六百八十哩三十鎖に及ぶ、北海道鐵道開通の結果、東京を發して三日目の朝七時には、小樽に到着し、九時に札幌、午後四時に旭川に到着するを得、西は、東海道線、山陽線、九州線を経て長崎に達する二晝夜を要するのみ、鹿兒島鐵道、天鹽鐵道開通せば帝國の兩極端を旅行するも、六日を出でず、更に臺灣島に於ては北方基隆、淡水に發し南は打狗に至る二百五十哩開通せり。帝國の脊梁たる幹線は、前述の如く、北は天鹽の名寄より函館に通じ、更に、青森に發して下の關に及び、關門海峽を渡れば門司に起りて、長崎、八代に及ぶ。猶帝國を南北に横斷し、太平洋岸と、日本海岸とを連絡する四線あり、一は奥羽南線にして福島を發して既に秋田に向て通せり。二は東京に起り、直江津に及び。三は敦賀に起り、米原に於て、東海道線に會するもの。四は、大阪に起り、舞鶴に通ずるものとす。我鐵道の敷設、かくの如く普及し、島根、高知、宮崎、沖繩四縣を除く外、鐵道の通せざるなきに至れるも、未だ歐米諸國に比して肩を並ぶるに至らず。人文地理學に於ては、百平方浬の内にある、鐵道の延長を以て鐵道の密度として、相比较す、我國は一、四浬に達し、世界の第十六等に位するのみ、最も長さ鐵道延長を有す



るはアメリカ合衆國にして、二十萬哩に達し、世界鐵道哩數四十九萬哩の半に及ぶ、又土地の割合に鐵道分布の密度の大なるは、白耳義にして百平方杆に毎に二十一杆に及ぶ、近時我國の鐵道經營は、韓國に及び、京釜鐵道二六七、九、京仁鐵道二五、七既に開通し、最近に於て京義鐵道も既に落成せり。

三十八年二月十五日の官報に掲げられたる全國鐵道の運賃收入表を根據とし各鐵道の一噸當り收入と一噸一哩當り收入とを割出したる結果左の如し。以て運輸の繁否を卜すべし

官線	全線を通じたる一噸當り收入		私線	全線を通じたる一噸當り收入	
	一噸當り收入	一噸一哩の收入		一噸當り收入	一噸一哩の收入
東海道線	一、五六七	三、八五	山陽線	九、九八	二、六九
中央西線	八五三	一七、〇六	關西線	七、六八	三、九七
信越線	一、六六二	一四、〇八	北陸線	一、四一八	九、二〇
奥羽南線	一、二〇一	一〇、〇〇	中央東線	一、一一一	一三、三八
奥羽北線	九八六	二四、〇四	篠井線	九六五	二二、九七
吳線	四〇二	三三、五〇	奥羽北線	一、一一二	七、五六
官線合計	二、六三四	九、四五	陰陽線	八二〇	一七、四四
私線	一、九〇七	二、二二	北海道線	八九二	五、八三
日本鐵道線	四二九	一五、八〇	關西線	七六八	三、九七

第貳篇 人文地誌	私股線合計		私股線合計	人文地誌	
	一噸當り收入	一噸一哩の收入		一噸當り收入	一噸一哩の收入
參宮線	五二七	二〇、二六	佐野線	三五八	三五、八〇
總武線	八七四	一一、二三	播但線	五五五	一五、八五
青梅線	二四五	一八、八四	川越線	二八四	一五、七七
奈良線	三九四	一〇、三六	房總線	六二二	一五、六九
南和線	二七三	一九、五〇	成田線	五〇二	一一、一五
京都線	三〇六	一三、九〇	阪鶴線	九五二	九、九二
中越線	三四〇	一四、七八	上野線	五〇九	二四、二三
北越線	八五二	一〇、〇二	豊川線	二六〇	一五、二九
南海線	四六〇	一一、五〇	高野線	二二四	一三、一七
尾四線	二三八	一五、九三	西成線	八三	二二、七〇
紀和線	四九九	一五、八四	七尾線	六六一	一九、四四
豆相線	二二四	二二、四〇	近江線	三五二	一三、五〇
岩越線	九八八	二〇、一六	中國線	六八八	一四、三三
河南線	一六八	一六、八〇	東武線	五八四	一三、五八
龍ヶ崎線	四二四	二五、四〇	上武線	二四二	一七、二八
水戸線	三三四	二七、八三	伊豫線	三四八	一一、六〇
讚岐線	三四六	一一、八一	徳島線	五九七	二八、四二
九州線	五四〇	一、三二	博多線	二二四	一七、二三
北海道炭礦線	一、一七七	五、七六	北海道線	七三六	四、六九
私股線合計	九〇四	六、七二	總計	一、〇四八	七、五二

注意、へきは左の五線にあり

東海道線	一、五六七	三、八五	日 鐵 線	一、九〇七	二、二二一
山陽線	九九八	二、六九	關 西 線	七六八	三、九七
九州線	五四〇	一、三二			

開通豫定期

陰陽線松崎青谷七哩

廿八年五月十五日頃

奥羽北線大曲横手間十一哩

開通豫定期

奥羽南線院内湯澤間十哩

七月上旬

奥羽北線大曲横手間十一哩

開通豫定期

私線四十一社三千六百九哩

一社平均八十八哩 日本、炭礦、北鐵、關西、山陽、九州を除けば一社平均四十二哩弱。

### 第二節 馬車、電氣鐵道

馬車、電氣鐵道

**馬車及電氣鐵道** 年を追ふて線路を延長し、會社數卅三、線路延長百三十六里、六八、車輛一、〇〇四、馬匹一、六八三、東京市街鐵道、東京電車鐵道、小田原電車鐵道、京都電氣鐵道、京濱電氣鐵道等其大なるものなりとす。

人力車

**人力車** 近頃勞働の價值騰貴すると共に、鐵道、電車、馬車、鐵道の普及と相和して、逐次人力車の需要を減じ、年にその數の減する傾向あり、全國人力車總數一人乘、一七七、六八一、二人乘七四〇六、年に一萬を減する計算なり、某統計家が東京市につき、電車と車夫との關係を調査して、興味ある結果を得たり。三十六年末に車夫總數三萬九千二百三十七人なりしに、三十八年

二月に至り、市街鐵道は十七哩、電車十四哩六鎖、開通の結果三萬〇二百六十一人となり。電車の軌道一哩を増す毎に、車夫の數は二百三十人を減する割合となると。

### 第三節 海 運

海運業者は、日本郵船株式會社(海船七七、總噸數二四一、一六二) 大坂商船會社(海船七九、總噸數六三、一七三) 東洋汽船會社(海船六六、總噸數三四、六三九) を始とし、會社數六十二、個人營業者六十五人、船舶總噸數一、二五一、五四七噸にて、世界海事國の第六位に居る。船舶噸數の増減は明白に國家勢力の消長を示すは識者ならずも解するを得る所なり。次に主要航路を擧ぐべし。(我が船舶總噸數は三十八年末調)

日本郵船會社

**歐洲線** 往航。神戸、門司、香港、新嘉坡、ベナン、コロombo、蘇西、ポルトサイド、馬耳塞、倫敦、アントワープ、ミッドルスポロー、復航。倫敦、ポルトサイド、蘇西、新嘉坡、香港、神戸、毎二週一回、横濱、アントワープ双方を發船す。

**シヤトル線** 横濱、ピクトリア、シヤトル。毎四週一回、横濱シヤトル發。

**濠洲線** 神戸、長崎、香港、サースデー島、タウンズビル、プリズベン、シドニー、メルボルン。

毎月一回横濱、メルボルン双方を發す。

孟買線 神戸、香港、新嘉坡、コロンボ、孟買。(チエチエリン、子ガバ、タムに寄港する事あり) 毎月一回横濱、孟買双方發船、

横濱上海線 神戸、門司、長崎、上海、毎週一回双方發船。

神戸北清線 門司、長崎、芝罘、牛莊、毎週一回、神戸、牛莊發船。

神戸韓國北清線 門司、長崎、釜山、仁川、芝罘、天津、毎週一回神戸、牛莊双方發船。

神戸浦港線 門司、長崎、釜山、元山、浦鹽斯德、毎週一回双方發船。

神戸小樽線 東廻。横濱、秋の濱、函館毎月十回發船。内五回は四日市寄港。

西廻。尾ノ道、糸崎、門司、境、敦賀、伏木、直江津、新潟、酒田、土崎、函館、毎週一回双方發船。

青森室蘭線 函館寄港、毎月一回双方發船。

基隆神戸線 門司寄港、毎月二回双方發船。

函館根室線 釧路、厚岸、霧多布寄港、毎月六回、

根室紗那線 留別、乳香路、斜古丹、慈木取、得撫島、床丹寄港發航數、月により相違。

根室網走線 鴛泊、斜里、羅臼、發船數、月により異なる。

小樽稚内線 増毛、焼尻、天賣、鬼脇、鴛泊、香深、留萌。

稚内網走線 四月より十二月まで、毎月五回 枝幸、紋別、湧別、雄武、常呂

函館小樽線 四月より十月まで、毎月五回 江差、壽都、岩内、奥尻、釣掛

小笠原島線 毎月一回横濱發、

大阪商船會社

大阪商船會社

上海漢口線 三月より十一月まで、毎週二回。蕪湖、九江寄港、

漢口宜昌線 四月より九月まで、毎月六回、沙市寄港、

基隆神戸線 毎月二回双方發船、門司寄港

打狗横濱線 毎月二回双方發船、安平、澎湖島、基隆、長崎、門司、宇品、神戸寄港

臺灣沿岸線 東廻、西廻とも基隆、打狗間、毎月二回、

西廻 塗葛窟、澎湖島、安平、

東廻 蘇澳、花蓮港、卑南、火燒島、紅頭嶼、鶯寮鼻、大板轆寄港

淡水香港線 四月より九月毎月四回、厦門、汕頭

安平香港線 十月より三月毎月三回、厦門、汕頭、

福州三都澳線 毎月二回、厦門、汕頭、

福州興化線 毎月四回。

厦門石碼線 毎月五十回、

神戸韓國線 毎月四回、神戸、鎮南浦發船

門司、釜山、木浦、仁川、

その他、大阪を中心とし、瀬戸内海沿岸、各港、鹿兒島、沖繩、日本海岸の境、舞鶴等主として、我國西部沿岸の航海を掌る。近時北清にもその航路多きを見るに至れり。

東洋汽船會社

東洋汽船會社

桑港線 毎週一回、横濱、桑港及横濱香港の双方發船、

西廻 (横濱、香港) 神戸、長崎、上海、寄港

東廻 (横濱、香港) ホノル、寄港

香馬線 香港、マニラ 往復

世界の商船噸數

現今世界各國に於ける商船の噸數を調査するに實に左の如しと云ふ。(最近の「ワシントン」年鑑による)

英國	一六、八三一、九三八噸 (一九〇五年度)	米國	四、二六九、五〇五噸
獨逸	三、五二五、七四四噸	諸國	一、七九九、七九二噸
佛國	一、七三九、〇七七噸	露國	一、二〇三、九二二噸
伊太利	一、一四一、五〇二噸	日本	一、〇一〇、四三三噸

造船所

造船所は、その數百八十四の多きに及ぶ、數の點より云はば、山口縣第一に位し四十五、大阪府之に次ぐ。長崎の三菱造船所、東京の石川島造船所、神戸川崎造船所の如きは、その大なるものなり、此の外海軍省直轄には、横須賀、吳には壯大の造船所あり。

海員養成機關は、逓信省の商船學校を始とし、大小八校あり。甲種船長の免狀を有するもの、六百七十人、機關長の免狀を有するもの、四百八十人あり、以前は概、外國人なりしが、今は外國人の數は極めて少し。

#### 第四節 日本縦貫旅程

臺灣鐵道も三十八年より全通し、(中間一部輕便鐵道により連絡)全線二百五十哩午前六時に北端停車場基隆を發すれば、午後九時七分には南端停車場打狗に著することを得べし。而して我國領内の北端停車場即ち北海道官線名寄<sup>ナヨロ</sup>より、我が國領内の南端停車場即ち臺灣鐵道打狗<sup>タカ</sup>驛に至るには、即ち日本國內を縦に一貫するには汽車汽船の便を出來得るだけ利用して幾何時間を要すべきや、是れ頗る興味ある亦た頗る必要なる問題なるが、若し汽車の乗換及汽船の待合に殊更らに時間を

要せず、汽車より汽車に、汽車より汽船に飛び移ることを得るものと假定すれば、之れに要する時間は左の如くにして、百七十二時四十九分乃至百八十四時七分間には名寄より打狗に到達することを得べき計算なり。

地名	距離	最長時間	最短時間	地名	距離	最長時間	最短時間
名寄砂川間	八三	四時	三時	砂川岩見澤間	三三	二時	一時
岩見澤手宮間	七〇	三時	二時	高島函館間	二七	二時	一時
函館青森間	二〇〇	七時	七時	青森上野間	二七	二時	一時
上野新橋間	三三	〇	〇	新橋神戸間	二〇	二時	一時
神戸下關間	三三	〇	〇	下關門司間	一〇	一時	〇
門司長崎間	一三	九時	八時	長崎基隆間	六〇	三時	二時
基隆臺北間	一五〇	六時	一、一〇	臺北臺南間	二〇	二時	一時
臺南打狗間	八〇	一、一〇	一、一〇	合計	二、七三	一、八〇	一、七三

(備考) 函館青森間、下關門司間及長崎基隆間を示めず数字の單位は海里にして從て合計に示めざる二百六十七海里餘中六百八十九哩は其實海里なりと知るべし

然れども汽車と汽車、汽車と汽船との接続には何れも多少の時間を要す、故に實際に要する時間を知らんと欲せば各鐵道及汽船の出發時刻を照合し以て接続に要する時間を算入せざるべからず。此等の方法により更らに調査したる結果は左の如くにして、日本國內を縦に一貫するには即ち二百五十三時間と七分を要する也。

第一日	午前七時二十分	名寄發	午後一時十三分	砂川著
	午後三時十五分	砂川發	午後四時二十六分	岩見澤著
	午後四時四十二分	岩見澤發	午後六時三分	札幌著
第二日	午前六時廿一分	札幌發	午前七時五十一分	手宮著
	午後二時	高島發		
第三日	午前四時	函館著	午前十時	函館發
	午後五時	青森著	午後七時三十分	青森發
第四日	午後四時十五分	上野著	午後六時	新橋發
第五日	午前九時二十分	神戸著	同 十時	神戸發
第六日	午前五時二十五分	下關著	午前六時	門司發
	午後三時五十五分	長崎著		
第七日	午後三時	長崎發		
第八日	海 上			
第九日	海 上			
第十日	午前六時	基隆著		

午前六時三十分 基隆發 午後七時十二分 彰化著  
 第十一日 午前十一時卅六分 彰化發 午後八時二十七分 打狗著  
 合計 二百五十三時間と七分

### 第五節 通信

通信

通信機關は電信、電話、郵便とす。

**郵便** 我國は明治四年始めて、郵便の制度を實行してより、着々進歩の運に向ひ、今日は都鄙至るところ、郵便の達せざる地なし、特に明治十年萬國郵便同盟に加盟してより、斯業の長足の進歩を加へ、同盟各國に送るべき郵便物に對し、その距離の遠近を問はず、郵税同一にして、通過の手敷料を課せざるに至る、又我國は支那、朝鮮に郵便局を有し、特に明治三十八年よりは韓國一切の通信機關を引受け、郵便局の如きも六十三ヶ所を有するに至り、大便宜を加へたるものとす。

郵便線路 通常道路二三、二四六里六三 鐵道四、三九四里七〇 郵便局四、七七(三十七年度三月三十一日調)

**電信** 電信の發達亦著しく、陸上線は、線路六、七四八里三三、線條三三、八五三里六二に及び、海底電線は二、一五二里一八、心線延長二、八五二里八八に達す、臺灣より琉球を経て九州に達する

もの、臺灣と清國福建省とを連ぬるもの、大隅と大島とを連ぬるもの、渡島陸奥間は、その長さものにて長短六十一條あり、能取湖と北浦とに湖底線二里四二あり、信濃川、最上川等十一川に河底線十八里八七あり。

在外の我が郵便局所

明治卅八年四月十一日現在の清韓兩國に在る我郵便局所は左の如し(局所名中×印は出張所△印は受取所名)

局所名	所轄局名	局所名	所轄局名	局所名	所轄局名
北京	同	天津	同	牛莊	天津
山海關	同	天津	天津	鎮江	上海
芝罘	同	天津	天津	南京	上海
蘇州	同	天津	天津	漢口	漢口
大冶	漢口	福州	漢口	武昌	漢口
沙市	漢口	福州	漢口	廈門	廈門
汕頭	漢口	福州	漢口	汕頭	汕頭
京城	韓國	永登浦	京城	開城	京城
×永登浦	京城	×開城	京城	×水原	京城
△平澤	同	△成歡	同	△島致院	同

第貳篇 人文地誌



### 第三篇 處志

#### 第一節 關東地方

##### 總說

位置

位置 關東地方は、本州の中央より稍東面に偏する所にあり、北は奥羽地方に接し、東及び南は太平洋に面し、西は本州中部地方に連なる。即ち箱根關以東にある八國なれば、關八州又は坂東八國と云ふ、相模、武藏、上野は本州中部地方に接し、下野、常陸は奥羽地方に隣り、上總、下總、安房は半島をなして海中に突出す。行政上一府六縣に分つ、東京府は武藏の一部と、伊豆七島、小笠原島とに亘り、神奈川縣は相模全國と武藏の一部とを管し、千葉縣は安房、上總及び下總の一部を含み、埼玉縣は武藏の一部を管し、群馬縣は上野、栃木縣は下野、茨城縣は常陸と下總の一部とに及ぶ、その範圍頗る交錯せり。關東の地は西と北とに山を負ひ、東と南とは海に面し、その間に約方三十里の大平野を挟む、實に我國第一の大平野なり。

山脈

山脈 關東平野の西方武藏、上野、信濃、甲斐、相模の境上に聳れるは關東山脈の秩父山塊にして、甲武信嶽は拔海二千四百五十三米、その最高峰なり、その他二千米以上に達する高峯に乏

丹澤山脈

しからず、秩父山塊の南は丹澤山脈にして、相模の西北大部分を占め、主峰丹澤山は千五百六十九米、大山は千二百五十米に及ぶ、丹澤山脈の南には函根火山あり、伊豆の火山半島に連なり、富士帶火山脈の一部をなす。

六五

一六五

關東平野の北方上野、下野の大部分亦主として山嶽よりなれり、下野の西南部に聳れる足尾山塊には帝釋山、平岳、朝日岳等の高峰聳え何れも二千米内外の高を有す。

越後山脈  
那須山脈  
日光火山

足尾山塊の西に當り、上野越後の境上にありて、日本海と太平洋とを分水する越後山脈の横はるあり、この一山脈の間には、那須火山脈に屬する火山の噴出せる頗る多く、脈中の雄鎮、那須嶽は關東平野の北東端に聳え、その西に日光火山嶽の大噴起あり、主峰男體山は二千四百八十三米に達す、日光火山嶽の西には赤城、榛名、妙義、荒船の休山相望み、遂に上野、信濃の境上、白烟常に絶えざる淺間火山に連なる。關東平野の東北を望めば、那珂川、久慈川に挾れる八溝山脈の南北に走るあり、山甚だ高からず、八溝山は最高峰なるも約一千十米に過ぎず、餘脈更に南して、加波山、筑波山となる。西北兩方面の山嶽を以て限られたるに反し、房總半島は三浦半島と相擁して東京灣を抱き、三浦半島には低き丘陵起伏し、房總半島には清澄山、鋸山の如き房總山脈の低峰相連なる。

房總山脈

平野  
關東平野

平野 以上の諸山脈に包まれ、東南、海に面して、關東の大平野は横はれり、この平原は陸地



氣候

の隆起と河流の堆積作用とよりなれる、沖積土の沃野にして、東北に久慈川、那珂川あり、中央に利根川、荒川あり、南に偏して多摩川、相模川あり、皆この平野を灌漑す、就中利根川は鬼怒川、渡良瀬川、吾妻川、神流川等の支流を合せ、五十四萬町歩の田圃を灌漑し、運輸交通に便を與ふるに頗る多し、世に坂東太郎と呼ぶ所の故あるなり。

**氣候** 關東の地たるや、概ね北緯三十五度乃至三十七度の間にその位置を占め、温帯の中央に位し、最良の氣候帯に屬す、特に北西部に巍峨たる峰巒聳ゆるを以て、亞細亞大陸の酷烈なる影響を受くる少なく、南方より流れ来る黒潮絶えず沿岸を潤はし、多少氣候を調和し、風雨寒暑宜しきを得、所謂海洋的氣候をなす、左に各地の氣象表を摘記す。

全年平均温度	夏季平均温度	冬季平均温度	全年雨量
横須賀	一四・五	一七・七	一、八二六
横濱	一四・三	一七・三	一、六五〇
東京	一三・八	一七・七	一、四七〇
布市	一三・五	一七・四	一、六九〇
水戸	一三・五	一七・四	一、五三〇

熊谷 一三・一 二五・六 一一・三 一一五九・四

前橋 一三・九 二五・二 一一・二 一一二七・〇

足尾 九・六 一三・八 一・七 一、七二五・七

宇都宮 一三・二 二四・六 一一・〇 一、五七八・三

温度は七月八月最高に達し、二月二月最低に下る、雨量は夏期に多く、冬季に少なじ、これ南風の太平洋の水蒸氣を齎らし來りて凝結するに由る、風は北或は北西風多く、春冬に強くして夏秋に弱し。

産物

**産物** 關東地方は我國第一の大平野にして、沃野相連なり、大小の河流貫流するを以て、間はずしてその農業の盛なるを知る、八州の面積は二千〇七十八方里にして、全國面積の百分の八に及ばざれど、米の産額は全國の百分の十四、麥は百分の二十七、大豆は百分の二十八に上る、米は千葉、茨城に多く産し、麥は埼玉實に全國第一に位し、茨城之に次ぐ、大豆は埼玉、千葉、茨城の三縣多額の産あり。

米の生産額	千葉	一、四七二、〇〇〇石	茨城	一、二〇一、〇〇〇石
	埼玉	八九五、〇〇〇石	栃木	八〇二、〇〇〇石
	群馬	四五一、〇〇〇石	神奈川	三六八、〇〇〇石
	東京	二九三、〇〇〇石		

麥の生産額	一、二二五、〇〇〇石	大豆の産額	一、〇七二、〇〇〇石
千 葉	二八九、九九五石	茨 城	二四九、六七六石
埼玉	二七八、〇三九石		

關東平野は全國有数の蠶業地にして、上野、下野、武藏は特に盛なりとす。これ地質の桑樹に適し、温度適當にして、雨量の大に過ぎざるによる。製糸、織物業の盛なる亦全國に冠たりとす。上野の桐生、下野の足利、武藏の秩父、河越、入王子地方これが中心地をなす。關東の山脈は鑛物の富多からざれども、北方足尾の銅山は本邦産銅高の四分の一を産し、その價四百萬圓に及ぶ。

沿海の地は水産に富む、房總半島の南端野島岬近海を房州沖と云ひ、三浦半島以西、相模の南海と相模灘と云ふ。野島岬以東一帯の沿岸は出入屈曲極めて乏しく、大東岬と犬吠岬との間は弓形の砂丘をなし九十九里濱の好漁業地なり、蓋し親潮、黒潮の寒暖二流の衝突地にして、兩海流に住む魚族集まるを以てなり、鰻を第一とし、鯉、鮪、黒鯛、秋刀魚多く産し、東京に輸入する夥し、九十九里濱の北、犬吠岬を隔て、鹿島灘あり、こゝも亦水産多し。

人文 平野の人は氣質剛健勇大なれば、自ら武を好むの風を生ず、されば八州の平野は古來武を

用ふる所と稱せらる、神代、武甕槌神、經津主神の故事あり、中臣齋部の二大族がこの地に繁延せしは古史に徴すべく、崇神天皇の御宇には武甕川別命の將軍として東海に派せらるゝあり、皇子豐城入彦命は毛野君の祖として兩毛の地に鎮せらるゝあり、爾來武内宿禰の巡視、日本武尊の東征となり、漸次王化に霑ひ、大寶の制、上野、上總は親王の任國なり、東國の國司には常に有爲の偉才を任ず、中古王綱紐を解くや、京師に志を得ざる徒、去て東國に不羈の志を伸ばし、源平二氏の起る皆八州の地を基とす、爾來源氏、北條氏、足利氏、後北條氏、徳川氏皆八州の地に勢力を扶植し、以て天下に號令したりしなり、維新奠都の後には名實共に帝國の首都となり、政治上産業上我國の中心地となるに至れり。

### 東京府

沿革 武藏、鎌倉の時には平賀義信、守護たり、建武中興、足利尊氏を守護とす、尊氏反して子義詮をして當國を管せしめ、正平四年義詮の弟基氏代て關東管領となり、本州を領す、永享の末、管領持氏亡びて後、上杉氏に歸し、持氏の子成氏、下總古河に治して鎌倉を回復せんとするや、上杉氏は之を拒がん爲め、南は品川より北は鉢形に至るまで武藏を縦斷して、城塞を築く。即、長祿元年、扇谷上杉の臣、太田道灌、江戸に築く、當時の城郭は、その範圍頗大に徳川時代



下谷區 一五〇、〇二一  
 本所區 一四二、三三三  
 芝區 一六〇、三三九

淺草區 二四六、四七一  
 深川區 一一六、三一六

一、政治上の都會

宮城は麴町區の中央、丘陵の平地に臨める所にあり、正門を入りて三重橋あり、下橋は石を以て疊み、先づ南行して之を渡り、大升形に入り、更に西行、北行して鐵を以て築ける上橋を過ぎて禁門に入る、後門は坂下門と名づく、内閣、樞密院、宮内省等はこの門内にあり。

今の宮城の地は徳川氏の時の西丸なり、新城又西城と云ひ、退老又は嗣君の宅に充てたりしもの、明治元年十月十二日至尊東幸の時、本丸の舊營は炎後の修理なきを以て、西城を以て行宮に供せられ、駐紮四十日にして西旋したまふ、翌年三月東幸、ここに奠都せられぬ、明治六年五月五日假皇居あり、皇上赤坂假皇居に遷御したまふ、明治十七年皇居御造營の役起り、二十一年十月竣功す。翌年一月新宮に遷御、宮城と命名し給ふ、前殿(豊明殿)正殿(謁見所)後宮等皆成る。

陸軍、司法、海軍、外務、内務、大藏、文部の七省は麴町區に逓信省と、農商務省とは京橋區にあり。帝國立法院たる貴族院、衆議院は麴町區日比谷原町に在りて、白色木造の質素なる建物なり。又我國最高司法機關たる大審院、東京控訴院、東京地方裁判所と相並び麴町區虎之門内にあり、

皆としく式、赤煉瓦造、宏壯偉大なる建築なり。

その他會計検査院、警視廳並に東京府廳等、皆麴町區内にあり。

二、軍事上の都會

東京市は帝國軍事の中心地となす、參謀本部、海軍々令部、教育總監部あり、近衛師團と第一師團とは共にここにその司令部を置く、軍事教育の機關としては陸軍大學校、海軍大學校、陸軍士官學校、陸軍中央幼年學校、地方幼年學校、砲工學校、戸山學校、軍醫學校等あり、兵器の製造には東京砲兵工廠あり兵器保管には東京陸軍兵器本廠あり。

三、學術上の都會

東京市は學術上の中心都會にして、碩學鴻儒の淵藪なり、東京帝國大學、東京高等師範學校、女子高等師範學校、東京高等商業學校、東京高等工業學校、第一高等學校、東京外國語學校、東京美術學校、東京音樂學校、東京盲啞學校等の文部省直轄諸學校を始めとして、宮内省管下の學習院、華族女學校、逓信省管下の東京商船學校、東京郵便電信學校等の官立學校の外、無數の私立學校あり、早稻田大學、慶應義塾、明治大學、東京法學院大學、日本大學、法政大學はその大なるものとす。

公衆の知識見聞を廣むべき機關としては帝室博物館並にその附屬、動物園、帝國圖書館、教育博物

政治上の都會として東京

軍事上の都會として東京

學術上の都會として東京